

☆〈将棋駒〉 (20.5×18.0 千葉市美術館/アムステルダム国立美術館/日本浮世絵博物館蔵)

※将棋盤の上に将棋駒と盆栽の梅鉢が置かれている図。

「いさみたつ将棋の駒に梅の鞭 勝色みつるはなの魁
若松亭美鳥 および秋長堂物築の狂歌が記される。

☆〈絵馬〉 (20.7×18.1 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/千葉市美術館/アムステルダム国立美術館蔵)

※「奉納」図は、「大願成就」の文字と、五重塔が描かれた絵札、梅の花をつけた枝を組み合わせる。

☆〈初午詣〉 (20.7×17.8 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/千葉市美術館/アムステルダム国立美術館/馬の博物館蔵)

※初午詣は、旧暦2月最初の午の日の稲荷神社での祭事。図は、正月らしく、王子稲荷に供される三番叟の被り物を被り、狐の面を付けた人形が藁苞の中にある。酒を入れ腰に当てて持ち歩ける水筒、藁に包んだ供え物に梅の一枝を添えたものなどを組み合わせた図。

斤葉酒芦人「さしさかす王子ミやけのはる駒に はたらきそする風の梅が枝」、森遊亭人成「友とちと王子戻りの梅が枝も さいつさゝれつ吸筒の酒」、寢覚庵興兼「家つとにかさしてもとる王子道 ゆきゝの袖もにほふ梅が枝」、新羅亭万象「梅そへて王子ミやけの春駒にひきつれ霞む袖も匂へり」の狂歌が記される。

☆〈駒下駄〉 (21.0×18.0 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/東京国立博物館/千葉市美術館蔵)

※駒下駄、手拭いをかけたおかめの面、暴れ馬の絵柄の凧、山椒の摺りこぎ棒、扇子などの正月の景物を集める。狂月亭真晴「新玉の春にあふみの和合薬 ふんでとめたる馬の書そめ」、四方歌垣真顔「若菜つむ春にあふみのかねてはく 雪間のあし駄踏とめてけり」の狂歌が記される。近江の大力女お兼注の物語に正月の景物を集めた図という。

注) 近江のお兼：『古今著聞集』には、近江国梅津の遊女お兼ねは、放たれ暴れる馬の手綱の端を高下駄で踏んで鎮めたという話がある。



☆〈駒形堂・御厩川岸・駒止石〉（すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/シカゴ美術館/アムステルダム国立美術館/日本浮世絵博物館蔵）



970 駒止石 (DNP アートコミュニケーションズより) 御厩川岸 (JAPAN SERCH より) 駒形堂 (JAPAN SERCH より)

☆〈駒形堂〉(20.8×18.1) 三枚続きの右図。隅田川の対岸に描かれる。瓢箪形印は無い。

☆〈御厩川岸〉(20.6×18.1) 三枚続きの中図。大勢の人を乗せた船が浮かび、手前の岸边には二人の武士が乗る馬が描かれる。対岸に凧が一つ上っている。

☆〈駒止石〉(20.6×17.4) 三枚続きの左図。手前の道に大きな駒止石が描かれ、見物の人がいる。背景に雪を被った富士山が見える。駒止石は、寛永8年(1631)、隅田川が洪水となり、旗本の阿部豊後守忠秋が隅田川を渡り被害状況を調べたときに、馬を繋ぎとめた石。現在は、本庄氏の大名庭園(旧安田庭園。現東京都墨田区横網1-12-1)に移設されている。

☆〈木馬〉(すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵)

☆〈競馬香〉(20.5×18.2 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館アムステルダム国立美術館/神奈川県立歴史博物館蔵)

※加茂の競馬になぞらえて、赤黒に分かれて聞香をし、香を聞当てた者が赤あるいは黒の駒を進め、先に決勝点に辿り着いた者が勝ちとなる遊び。図は、乗馬している公家、団扇、盆の上に置かれた香壺の画を組み合わせる。

971 競馬香 (神奈川県立歴史博物館)



☆〈馬瑙石〉(20.6×18.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館アムステルダム国立美術館/神奈川県立歴史博物館/太田記念美術館：長瀬コレクション/アムステルダム国立美術館蔵)

※盆栽の鉢に珊瑚が生けられ、その前に水晶の塊と球形の瑪瑙が置かれている。

☆〈馬除〉(20.6×18.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館/神奈川県立歴史博物館/大英博物館蔵)

※洗面用の湯桶、盥、手拭い掛けに掛けられた手拭い、「三井石山 比良 右三景」と染付された鉢に植えられた松と福寿草が描かれる。染付の文字は、三井晩鐘、石山秋月、比良暮雪を表していると思われる。文化4年(1807)～7年(1810)の中判「新板近江八景」(伊勢屋利兵衛版)や文化8年(1811)の横小判「銅板近江八景」(総州屋版)を念頭に置いた作品である。瓢箪形印無し。

「初日影鳩てる春にあふみのや かゞみの山を見るもまばゆき 三星亭真湖」の狂歌が記される。

☆〈三弦駒〉(20.9×18.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム美術館蔵)

※柄が継げる継棹の三味線が、稽古本を包んだ風呂敷に寄せかけてある。棹の先には弦を張る駒がある。

「春霞ひく三味せん佐保姫の 心のこまもつなくいとゆふ 若松亭美鳥」、「ひとしきり眠たき春の夜も日に 継三味せん注のさほの川風 秋長堂物梁」、「弾初のうた三味せんやいと竹に ミつのあハする鶯のこゑ 秋長堂物梁」の狂歌が記される。

注) 継三味せん：継三味線。持ち運びに便利のように棹を繋ぐことのできる三味線。

☆〈綿繰馬〉(20.5×18.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※綿花を布の上に乗せ棒を二本組み合わせ合わせた間にくぐらせて種子を取り除く綿繰車と、馬の鞍が置かれている。浄瑠璃「源平布引滝」で、斎藤実盛が手塚太郎と再会を約して馬に乗ると太郎は綿繰車に跨って「ヤアヤア実盛」と相対するくだりで、図の鞍は実盛を、綿繰車は太郎を暗示すると推定される(『2005 北斎展図録』p357より)。

「真白まる梅の臥龍や作りけん 流馬注に似たる綿くり馬ハ 相什楼真槌」、「去年つみてけのこる雪か白妙に わたくり馬の春の詠ハ 花月亭才」、「咲梅のにはほひハ風にのりかけの 綿くり出す午の初はる 松廼屋其成」の狂歌が記される。

注) 流馬：諸葛孔明が発明したという車。木牛流馬。

☆〈馬蘭〉(すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵)

☆〈春駒〉(すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵)

※着物を入れる漆塗りの盆に、玩具の春駒や白鳩の置物、熨斗、小槌などが置かれ、上から宝の模様の袱紗をかぶせた図。

☆〈馬のす〉(20.6×18.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵)

※異国風の雲の模様の木琴の共鳴箱に、皮張りの胡弓と弓が寄せかけてある図。「馬のす」は、馬の尾の毛をいい、胡弓の弓の弦に使われる。蓋を広げた共鳴箱は馬の鞍に似た形である。

☆〈海馬〉(20.2×17.5 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション/アムステルダム国立美術館蔵)

※海馬は、タツノオトシゴのことで、媚薬として珍重された。手前には折り目のついた紙があり、その中にタツノオトシゴが置かれている。側の箱には玉虫が二匹入れてあり、これも安産の守りとされたという。

☆〈有馬産〉（すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館/ハンブルグ美術コレクション蔵）

※有馬温泉の西方の三木は刃物の製造が有名で土産に売った。図は、和鋏、小刀、筆に矢立、刃物の包装紙（一の字の下に菊が描かれ、左下に「文殊 四角作」と書かれる。鋼を扱う株を持っていて、最高級品を示す書き入れ）が組み合わせたもの。

972 有馬産（すみだ北斎美術館）



☆〈駒曳銭〉（すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵）

※漆の盆に笹の模様が染めつけられた蓋つきの茶碗が置かれている。その前に瓢箪の根付けに紐で括りつけられた袋から、鍵や銭がこぼれ出ている。銭は駒曳銭と呼ばれ、人が馬を曳いている模様の銭で、民間で作られ、財布に入れ、金が増えるまじないにしたという。瓢箪形印は無い。

☆〈馬貝〉（20.8×18.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/アムステルダム国立美術館蔵）

※馬貝は、二個の赤貝の殻に紐をつけ、それを手綱に見立て足で踏みながら歩く玩具。屏風を巡らせた板の間に燭台の蠟燭がとまり、華やかでめでたい衣装の童子が、足で踏んだ紐を両手で引き上げている。瓢箪形印は無い。

「ことし還暦の春をむかへて をさなきに帰る春とて午貝も ふみはしめにぞ筆をすゝむる 新羅亭万象」の狂歌が記される。

☆〈馬錢別〉（すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵）

☆〈相馬焼〉（19.7×17.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※鉄瓶に布が掛けられ、相馬焼きの山水の絵付がされた徳利と、馬が絵付けされた白い茶碗に箸が乗せられている図。

「草の芽もふくかけん淡雪の 中の青ミや茶の初むかし 秋風園花主」の狂歌が記される。

☆〈馬蹄石〉（20.3×17.1 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション/アムステルダム国立美術館/ハーバート大学サッカー美術館蔵）

※水差しに梅の小枝が差してあり、筆立てには数本の筆が立ててある。その横には硯に墨が添えられている。

☆〈馬盥〉（すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵）

☆〈神馬草〉（すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵）

☆〈鞍馬牛房〉（すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵）

※瓢箪形印は無い。

●摺物「**畠山重忠**」（落款から文政5年〈1822〉か。文政5年～8年〈1822～25〉説あり。色摺。不染居為一筆。21.1×18.7 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション）

※畠山重忠が一の谷合戦のひよどり越えで、愛馬三日月を担ぐ姿が描かれる。文政5年（1822）『馬尽』の絵の一として描かれたのではという見方もあるが不明（『ピーターモース・コレクション北斎図録』による）。「岩陰にかくれし風を案内にて 峰よりおとす春の梅か香鉄廼屋盾成」、「春風も秩父の方ハつよくして 峰吹おろす駒鳥の声 四方真顔」の狂歌が記される。

●摺物「**四姓ノ内**」（この頃か。紙本角判色摺。北斎改為一筆）

※四姓とは、源（みなもと）・平（たいら）・藤（ふじわら）・橘（たちばな）の四つの姓をいう。

☆〈干味満照 **藤卷鎌**〉（「干珠満珠」とも。21.6×19.0 ウイーン国立工芸美術館/オランダ国立民族学博物館蔵）

※三足の盤の上に藤卷の鎌と輝く宝珠を乗せる図。大織冠（官位の最上位）藤原鎌足と海女の玉取伝説（龍に奪われた宝珠を取りもどすよう鎌足に命じられた海女がそれを果たしたものの、龍宮の龍や魚族に殺されるという伝説）にちなんだ物と狂歌を配す。

☆〈源 **小烏丸の一腰**〉（21.3×18.1 ウイーン国立工芸美術館/北斎館/オランダ国立民族学博物館蔵）

※小烏丸は、平家代々に伝わる名刀。烏がこの刀を持って平家の始祖・桓武天皇に捧げたといわれる。図は、黒い烏が赤い鞘の刀を背負い、背後には白梅の花が咲いている図。

柳風亭待兼「しのゝめの帯のもやうの鳥たすき 霞の底にむるゝ小烏」が記される。

973 源 小烏丸の一腰（北斎館）



☆〈**青葉笛 青山琵琶 平**〉（21.2×18.5 島根県立美術館：永田コレクション/オランダ国立民族学博物館蔵）

※袋に入った琵琶と青葉笛が置かれている図。平敦盛は笛の名手であり、祖父・平忠盛が鳥羽院より賜った『小枝』（または『青葉』）という笛を譲り受ける。源平合戦の末期、熊谷次郎直実と一騎打ちの後、直実に組伏され首を刎ねられた。直実が敦盛の首を包もうとしたとき、一本の笛を見つけ、平家軍は戦場にあっても、風流を忘れずに、平家の陣屋からは管絃の音色が聞こえていたが、昨夜の笛の音はこの若き敦盛であったと知り、熊谷はこの後出家し、敦盛のことを弔ったという。

「さんこしゅ（珊瑚珠）の玉の初音は海はらの みどりの竹をいつるうぐいす 五十鈴川人」、「みどりなす竹の内にも初こゑの 玉をさゝくる庭のうぐいす 千羽亭手踊」の狂歌が記される。

☆〈**普門品 注 菊水鎧 橘**〉（21.2×17.6 北斎館/オランダ国立民族学博物館蔵）

※朱色の具足箱の上に鎧が乗せられている。鎧の胴部分には橘正成の菊水紋が施されている。その右には矢が刺さった経典「普門品」の巻物が台の上に置かれている。能の「菊

慈童」では、菊慈童がこの經典の一部を書き、滴る菊水を飲んで不老長寿になったという伝説がある。「床にさく梅はかふとの鉢うゑにかざる鎧の裡もかをれり 草花園嶽丸」の狂歌が記される。

注) 普門品：法華經第二十五品の觀世音菩薩普門品の略。

●摺物「枕草子を読む娘」（「文庫脇の女性」とも。不染居為一筆。中判色摺。21.3×18.6 すみだ北斎美術館蔵）

※文箱に左腕を掛け、笹色紅の女が腕まくりをして下に置いた枕草子を読んでいる。右手の肩先からは赤い襦袢が見えている。文箱に「不染居為一筆」の書き入れがある。「はつ夢も枕ゆたかにみちのくや こかね花さく山のあけほの 竹葉菴」、「白かねの毛ぬき手にとる玉みとり 子日にもひく松の青髭 樂聖菴」の狂歌が記される。



974 枕草子を読む娘（すみだ北斎美術館）

文政6 (1823)	癸未	64 歳	大摺腎虚陰精 (隠号)	北斎改注為一、武蔵北斎戴斗先生
(板元による)、前北斎為一、北斎改為式：こと (53 歳)、阿美与 (35 歳)、孫 (14 歳)、				
阿栄 (26 歳)				

注) 改：北斎は改号後しばらく前の号の後に「改」の字をつけることが多い。「かい」と読むことが多いが、本稿では「あらため」と読む。

- ◇1月30日、勝海舟生（～1899）。
- ◇2月、曲亭馬琴、息子宗伯の神田宅の隣の家（刀研ぎ師の家）を買い改築する。
- ◇4月6日、大田南畝没（75歳）。
- ◇7月6日、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（Philipp Franz von Siebold 1796～1866）、出島に着任（独人なるも蘭人として入国）。浮世絵収集を始める。
- ◇7月7日、長崎商館長ブロムホフ帰国。後任商館長ヨーハン・ヴィレム・デ・スチュレル（Johann Wilhelm de Sturler）赴任。
- ◇8月、江戸大風津波。
- ◇諸国干ばつ。

○艶本：溪齋英泉『志の婦壽李』（「鷹高先生図」とあるところから、紫色鷹高を隠号として用いた北斎作とされたが、名古屋の尾崎久弥（江戸文芸研究家）が、本書の文中に「淫乱斎」という溪齋英泉の隠号があることを指摘されたという（『芸術新潮』1989年3月号「北斎」特集所収、林美一「北斎 艶本への挑戦」p40）。

図は、北斎の『津満嘉佐根』（文政元年：1818）の絵を反転させたものもある。

※溪齋英泉は、鷹高（北斎から譲られ、文化10年頃から使用）、雁高亭、淫乱斎、女好軒などの隠号を用いた。

【川柳デビュー 俳号記を用いる】

★この頃より川柳の会に出席、12月22日の川柳の会（柳亭種彦の判）で、画号に先駆け

て俳号「^{まんじ}卍」を用い、一句詠む。天保4年(1833)頃まで『^{はいふうやなぎたるとる}誹風柳多留』に約189句(重複撰を含む)の川柳が「卍」名で収められている(永田生慈『北斎クローズアップ風景画』p104~105 及び『北斎美術館3美人画』p155)。

※「六十代以降終生、毎年、江戸の川柳年鑑に寄稿し続けたことも記憶に留めおいてほしい。これらの川柳の多くは、エロチックなひねりがかかっており(略)」(リチャード・レイン『定本浮世絵春画名品集成1』所収)

【北斎の川柳】

安永5年(1776)・寛政元年(1789)に「^{かこう}可候」(草双紙作者)、文化2年(1819)に「^{きんたい}錦袋」、同2・3年からは「万二」「万仁」「萬二」「万治」「万子」と「まんじ」と読む俳号が登場するが、いずれも北斎とは別人と考えられる。

文政8年(1825)の『誹風柳多留』85扁では序文を書き、本格的に卍号を使用し始めた。作句は天保15年(弘化元年:1844)まで続けたと思われる。その間、文政11年(1828)に「カツシカ」、晩年には「^{まんじ}万字」「^{ひやくしやう}百姓」「^{ひやくしやう}百性」なども使用している(以上は田中聡『北斎川柳』2018 河出書房新社 p15~17の記載を参照した)。

●艶本『^{えんぼん}縁結出雲杉』(『^{えんぼん}偶定連夜好』とも。「いつもすき」のもじり。中本(26×19cm)色摺の本に二つ折、見開き十二図。北斎艶本の最後の作。序文には^{おおずりじんきといんせい}大摺腎虚陰精序とある。序文の日付は、文政5年(1822)となっている。改題再摺本『^{つゆのひらひら}津万廻飛奴満』(『^{つゆのひらひら}津弓廻飛奴満』とも)があるという(『^{えいれん}絵入春画艶本目録』による)。



975 縁結出雲杉 (部分: <http://www.ptt.co.jp/kawade/naiyou.htm> より転載)

●絵手本『^{いっぴん}一筆画譜』(題簽の角書「^{でんじん}伝神開手」)。一筆画の集成。半紙本一冊。全29丁淡彩。武蔵北斎載(戴)斗先生^{つのだん}注嗣意(北斎の意向を継いだの意味)。江戸・須原屋茂兵衛、山城屋佐兵衛、岡田屋嘉七、須原屋新兵衛、和泉屋金右衛門、大坂・河内屋喜兵衛、河内屋和助、河内屋茂兵衛、秋田屋大右衛門、京都・風月庄左衛門、俵屋清兵衛、名古屋・永楽屋東四郎版。15.8×22.8。島根県立美術館:永田コレクション/フリーア美術館:フルゲャー・コレクション/名古屋市蓬左文庫/大英博物館蔵)

他に、別の書肆版がある(京都書林 堀川通 伏見屋藤右衛門、大坂書林 心斎橋通 柏原與左衛門、同 同清右衛門、同 河内屋木兵衛、同 敦賀屋九兵衛、東都書林 糺町四丁目 角丸屋甚助、日本橋砥石店 大坂屋茂吉、同 新右衛門町 前川六左衛門、尾陽書林 名古屋本町通七丁目 永楽屋東四郎)。

注) 戴斗先生: 戴斗号は文政2年(1819)に弟子の北泉に譲っているの、文化14年(1817)名古屋滞在の折、当所の文人画家丹羽嘉言(福善斎)注の一筆画の遺稿に北斎が工夫を加え、さらに図を追加し、その時の戴斗号を用いたもの。天保13年(1842)3月に『^{いっぴん}一筆絵本』(吉田屋文三郎・藤屋宗兵衛・三河屋甚助版)と題した縮刷復刻本が出る。

注) 丹羽嘉言: 福善斎。寛保2年(1742)~天明6年(1786)。南画家。

※序文「鶴のむれたち亀のうかむさまくのすかたを一筆にかきなせしは、この春風のなご屋人福善斎彰父の筆の跡なるを、さきのとし、戴斗翁府下に遊ひし時見めて、かゝる物のうつもれらむハ口をしきわさなれば、其鶴亀の長き世に伝へんとて、うつしもの（写し物）して、すりまき（摺巻）になし、又筆の意を学ひて、諸鳥の形をはしめ、くれ竹のよわたる人のまめわさ戯れわさ、山川家居などにいたるまで、真間の継橋かきつきて、此一まき（一卷）とはなせるなり（略）。癸未の春 尾府下申林子識」（句読点・ルビ・注は筆者による）。

※『一筆画譜』出版後、北斎は永楽屋東四郎に8月4日付で、次の書簡を送っている。

「（略）御文面之内ニ一筆画譜後編之儀御注文被下候筆料之義者老丁ニ付七匁五分イニて出来候（略）」

北斎は「後編を私に依頼してください、画料は見開き一枚（2 ページ）につき七匁五分でできます」と言っているのである。絵の部分は29丁なので217匁5分（約361,906円）注の画料でどうかというのである。

注）1両=銀60匁=10万円。1匁=約1667円。1分=10分の1匁=167円で計算。実際の貨幣値は、時代によって変動している。



976『一筆画譜』（大英博物館：2種類あり。ARC デジタル・コレクションより）

●絵手本『今様櫛拾（旁部分は竹冠に金）雛形』（5月。横中本〈美濃本二ツ切〉墨摺。上中下の三冊。前北斎為一誌〈柳亭種彦の序文による〉。角丸屋甚助（衆星閣）・伊勢屋三次郎（栄樹堂）・西村屋与八（永寿堂）版。12.8×18.1 東京国立博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館/フリーア美術館：フルヴェラー・コレクション/オランダ国立民族学博物館蔵）

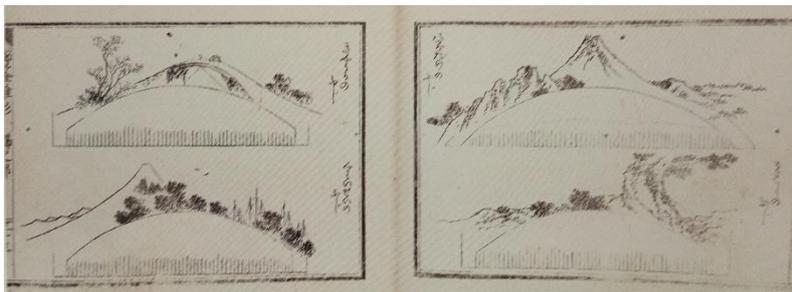
※奥付には「前北斎為一先生画図 彫工 江川留吉 東都書林永寿堂蔵板」とある（『葛飾北斎伝』p257）。

この本に北斎の「百橋一覽」の広告とともに「富嶽八体」という本の出版予告があるが未完。末に竹製の煙管の図を載せ「紀の国へこゆる時、この製作を見たり」とある。上中二冊が櫛の図案約250図（櫛崎宗重『北斎論』p364では文政5年版とあり）。

下巻は煙管の図案約160図。実物大で描かれた職人のための図案集。弘化2年（1845）にも後摺が刊行されている。

※北斎の図案による櫛や煙管などを切り抜き、工作出来るよう工夫されている。櫛を富士

山の麓に見立てた図案もあり、それぞれに季節や時間の山容の違いを現わしている。〈なつのふじ〉〈うらふじ〉〈ふゆのふじ〉〈よあけのふじ〉〈ハツがだけのふじ〉〈ミこしのふじ〉〈きょうかのふじ〉〈くわいせいのふじ〉など。

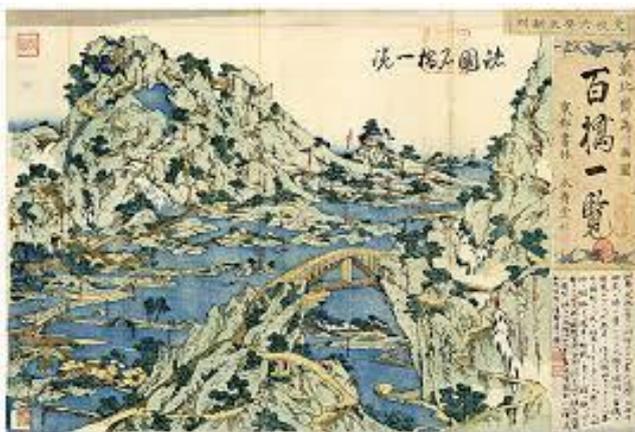


977『今様櫛鑑雛形』左：きょうかのふじ くわいせいのふじ 右：ハツがたけのふじ ミこしのふじ

●絵手本『鷗肋面譜』(版下絵。画題は仮題。文政6年：1823の西村屋与八版『今様櫛鑑雛形』の巻末広告に『為一先醒鷗肋面譜』と題した絵手本出版案内があるが、版下絵のみで未刊と思われる。「船高瀬船般缸並同船海中ノ大船艇同愉瀬帯」の書き込みがある屋根船が描かれる。船の中では荷物を整える男や、モップのようなもので甲板を拭く男、船端から海水で布を洗う男などが描かれる図や、フランス国立図書館蔵の「海女図」に似た絵があるという。

●錦絵「百橋一覽」(「夢の百橋図」とも。この頃か。横大々判。後摺の方印に「北斎改為式筆永寿堂西邑之印」とある。包紙(国立国会図書館蔵)には「前北斎為一画図」「東都書林 永寿堂梓」「文政六癸未新刻」とある。西村屋与八版。42.6×56.4 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/太田記念美術館蔵)

※秋の一日、絵を描くことに疲れた北斎が、山の岩肌に無数の橋がかかっている幻影が壁に映るのを見たことを図の中で「去る年仲の秋一日面壁時を移すに髣髴朦朧として一条の図を現したり(略)」と説明している。図は、全体が黄色の色調で、峨々たる山間の村々に架かる多くの橋が描かれる。後に「諸国名橋一覽」(文政7年頃(1824)。無款。図にあった説明文が削除されている。42.7×58.2 国立国会図書館蔵)と題した改題後摺判が出る。



978 百橋一覽 (日本浮世絵博物館)

●団扇絵「群鷄」(前北斎為一筆)『年譜』による。⇒天保4年「群鷄」参照。

●摺物「稚遊拳三番続之内」(春興狂歌色紙判色摺。北斎改為一筆)

※芍薬亭長根門人の楽聖庵酒月光丸が中心になって刊行したものか。じゃんけんの紙・石・鋏を意識した三枚組の画。「鋏」に相当する画は確認されていないという。

☆〈石〉(「盆景を造る娘」とも。21.5×18.3 東京国立博物館/千葉市立美術館/アムステルダム国立美術館/チェスター・ビティ図書館/ボストン美術館蔵)

※羊年に因んで、岩を羊に変える仙術を持つ仙人の黄初平(328?~386)が描かれた掛

け軸の中に「北斎改为一筆」とある。盆石で富士山を造る娘の図。楽聖庵、石上舎三年、鵲巢庵の狂歌が壁に記されている。 979 石（千葉市美術館）



☆〈紙〉(20.3×17.4 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション)

シヨ
シノ慶応大学高橋浮世絵コレクション
/千葉市美術館蔵)



980 紙（慶応大学高橋浮世絵コレクション）

※蒔絵の料紙箱と硯箱の蓋には、それぞれ鶴亀が二匹ずつ描かれている。「亀あやのせち着に鶴の黒飽きて 春にしむかふ蓬萊の山 鵲巢庵」、「料紙箱まき絵の鶴も松陰の 硯になれてあそふ書初 北栄子捨魚」、「すみよしの松のまき絵に色香そふ 春の海辺の桜うすよう 楽聖庵」の狂歌が記される。

●摺物「美人カルタ図」（「カルタとりの美人」とも。真行草之筆意 北斎改为一画。色摺。24.0×27.8 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※花魁・官女・年増・娘などさまざまな階層の女性六人がカルタをしている図。この期の美人画は少ないので貴重な作例という（『ピーターモース・コレクション北斎図録』 p131 による）。左隅に「未春」とある。蜀都園序文の狂歌が記される。

●摺物「鳥籠を囲む女たち」（真行草之筆意 北斎改为一画。色摺）上記作品と同一揃物。

おんせい 文政7 (1824)	きのえさる 甲申 65 歳	さきのほくさいいつ 前北斎为一、	ほくさいあらためかつしかいつ 北斎改葛飾为一、	さきの 前ほくさみ为一、	かつしかいつ 葛飾为一、
かつしかいつ 人まねする甲のはつ春かつしかのおやち为一、					
北斎改为一 印つによつてう					
つす、ふしのやま、ひとりにんぎょう：こと(54 歳)、おみと(36 歳)、まご(15 歳)、おんせい(27 歳)					

◇3月21日、鋏形蕙斎(北尾政美)没(64)。

◇4月8日、牧墨僊没(50)。

◇5月9日、曲亭馬琴、神田明神下(石坂下同朋町。現、千代田区外神田三丁目、秋葉原芳林公園付近)の一人息子宗伯(医師)宅に住み、隠居して剃髪し笠翁と号す(10年前より蓑笠漁隠と称していた)。

◇5月28日、薪水を求めて常陸・大津浜に上陸したイギリス捕鯨船乗組員を水戸藩が捕縛。

◇8月9日。イギリス捕鯨船、薩摩宝島に上陸し略奪。

◇富士講禁止令。安永4年(1775)、寛政7年(1795)に続く禁止令。

◇江戸で駱駝の雌雄二頭が披露される。

◇シーボルト、長崎で鳴滝塾を開く。

◇江戸の女芸者が禁じられる。

○曲亭馬琴、合巻『金毘羅船利生纜』(中国小説の翻訳)。

★8月26日、川柳の会(秋乱題。社蝶評)に出席、3句詠む(『年譜』による)。

★閏8月28日、川柳の会(多之乱題。白鷺評)に出席、2句詠む。文政8年(1825)発行の『柳多留』に86句載る(『年譜』による)。

●往来物『最明寺殿 教訓仮名式目』(1月。一冊。北條相模守平朝臣時頼公御撰・前北斎為一。印ふしのやま。中沢庄兵衛(北辰堂)版。島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館蔵)

※北条時頼が、弘長2年(1262)9月に作った92か条の教訓を画材としたものだが、「往古鎌倉御殿最明寺時頼入道遙に遠海眺望の図」(『新北斎展図録』p239の図)のように、時頼の生活なども絵画化している。

●案内書『江戸 買物独案内』(2月。三冊。中川芳山堂(中川五郎左衛門)撰。北斎改葛飾為一画。鉛屋安兵衛。12.0×20.0。早稲田大学図書館/国立国会図書館蔵)

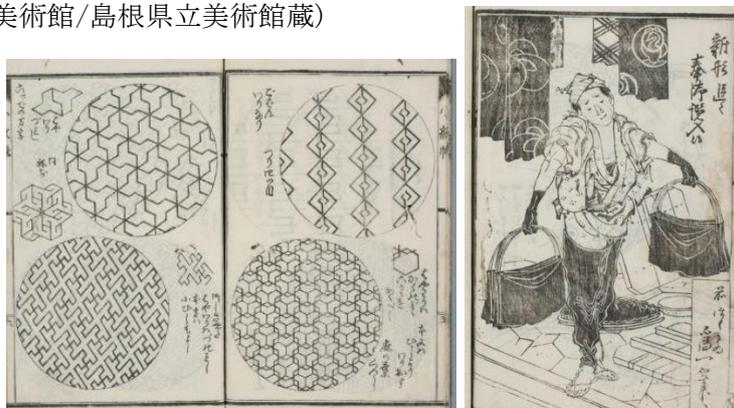
※『江戸 買物独案内』二冊と『飲食之部』一冊の構成。北斎は上巻に「東都繁栄之図」(無款)と「浅草観世音富貴市之図」(北斎改葛飾為一画)、及び『飲食之部』の見返しに「鯉 白魚 蝶(蝶か) タコ」(無款)一図を描く(『年譜』による)。



981『江戸 買物独案内』浅草観世音富貴市之図(早稲田大学図書館)

●絵手本『新形小紋帳』(3月。中本一冊。全27丁。柳亭種彦の序文に「文政甲申春三月雨日」とある。染色家のための小紋染め図案集。大阪屋秀八・播磨屋勝五郎他六書肆の連名版。18.1×12.3。すみだ北斎美術館/島根県立美術館蔵)

※表紙見返しに「初編 新形 染彩目 発兌 後編 植華 手引系 近刻 葛飾為一筆 印一人人形」とあって、後編を予告している。初編・後編共に特殊な読みを付し、各図案に簡単な図案名や説明をつけている。明治17年『北斎模様画譜』に再刻改題。



982 新形小紋帳(すみだ北斎美術館)最終丁

最終丁に「前ほくさみ為一筆」と署名し、紺屋職人の絵に添えて「新形追奉御覧入候」と、続編を予告している。

●狂歌絵本『花鳥風月集』（9月。角書「狂歌新撰」。一冊。葛飾為一。口絵に三十六人を描く。他に竜斎北泉画。六樹園撰。石川雅望（六樹園）の序文。二世浅草庵の跋文。壺月堂市住版 九州大学：富田文庫蔵）

●錦絵「奥州塩竈松寫之略図」（この頃か。天保初期（1830～33）説あり。横大大判。一枚摺。前北斎為一筆。印つによつてうつす。40.8×54.5 日本浮世絵博物館/パリ国立



図書館/島根県立美術館：永田コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション/メトロポリタン美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※戴斗時代に三種の俯瞰図があるが、為一期では唯一の俯瞰図。印号に「つによつてうつす」（図によって写す）とあるので、何らかの図を参照したものか。

983 奥州塩竈松寫之略図（『2019 新北斎展図録』より転載：島根県立美術館）

●錦絵「諸国名橋一覧」（p 509「百橋一覧」の改題後摺版。無款。42.7×58.2 太田記念美術館：長瀬コレクション/国立国会図書館/すみだ北斎美術館蔵）

※「百橋一覧」（文政6年：1823）にあった賛が消え、図右上に横書きで「諸国百橋一覧」が記される。

●摺物「色紙判五枚揃の役者絵」（1月。「役者芝居図」とも。色紙判色摺。全5枚か。署名：人まねする申のはつ春かつしかの親父為一筆。島根県立美術館：永田コレクション蔵）
※文化4年（1804）以来、描かなくなった役者絵を頼まれて描いたものか。曾我狂言に取材した五枚揃の役者絵（浅野秀剛「北斎の主題 選びの法則—フリーア美術館所蔵の肉筆画調査レポート」『2005 北斎展図録』p 31 所収）。

各図とも歌川風で描かれているので（『年譜』による）、自ら「人まねする」というのであろう。

☆〈七代目市川團十郎と二代目岩井桑三郎〉（20.7×18.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※印を結んで見栄を切る団十郎と、横笛を持って振り返る女形桑三郎の図。落款中に「申のはつ春」とある。

984 七代目市川團十郎と二代目岩井桑三郎（島根県立美術館）

☆〈三代目市川門之助と七代目市川團十郎〉（ボストン美術館蔵）



●摺物「羅生門」(1月。色摺。北斎改為一筆。19.7×26.4 太田記念美術館：長瀬コレクション/大英博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション)

※画中の高札に「申初春」とある。図は、甲冑姿の武将が羅生門の石段に片足を掛けて、両手で高札を掴み、馬の手綱を口に銜えて強く引いている図。能「羅生門」の題材。



985 羅生門 (すみだ北斎美術館)

源 綱 (渡辺綱) の羅生門に巣くう鬼の片腕を切り落として退治した話で有名。「綱」から手綱を強調したか。高札に「申初春 狂歌堂」とあり、文政7年の春、狂歌堂真顔の四方側の依頼によるもの。狂歌「たのみある中よき類のツハものゝましはり深き春の酒宴 鉄廼屋大門」、「豆はやす東の京の鬼やらひ 羅生門まで春の来る頃 燕

栗園千類」が記される。高札には「禁札 禁おきて 君俄ため摘若菜野に手綱取る 絡那須謝武春駒 申初春 狂歌堂」とある。

文政8 (1825)	乙酉	66 歳	前北斎葛飾為一述記、	述記、	北斎改為一、	前北斎為一述記、
前北斎為一	二人人形、	ふしのやま：こと (55 歳)	(阿美与：37 歳)	孫 (16 歳)	阿	宋 (28 歳)

◇1月7日、初代歌川豊国没 (57)。

◇2月18日、異国船打被令。

◇5月、イギリス船、陸奥九戸沖に来航。

◇シーボルト、出島に植物園を造る。

○7月26日、四世鶴屋南北「東海道四谷怪談」初演(中村座)。

○曲亭馬琴、合巻『傾城水滸伝』(中国小説の翻案)。

★甲信方面に旅をしたか(詳細不明)。

【長女阿美与没】

★この頃阿美与没か (37)。孫は柳川重信に預けるも、重信が大坂に行くため再び北斎の元に引き取る。

※『日本浮世絵博物館所収 大揃い北斎』(北斎資料 757. p 172)で紹介されている『浮世絵派画集・第5冊・77頁(大村西崖)』では文政4年(1821)の没としている。

「(略)長女美与、門人柳川重信に嫁し、後離別して家に帰りて死す(北斎墓碑の側面に「浄運妙心信女、文政四辛丑歳注十一月十三日」とあるは即ち是れならむ)」(ルビは筆者による)とある。

注)辛丑歳：辛巳歳の誤りか。

★3月10日、川柳の会(清泉評)に出席、1句詠む。(『年譜』による)。

【『俳諧柳多留』に序文を書く】

★この年発行の『柳多留』85篇中の「女郎花連」の句集の序文を書く。

「敷島の道ハ正しうして動ず。縦バ人の立るに等し。是眞と言べきや。連俳ハ前句の意を伝へて其様を異にす。巻中自歩が如し。亦行ならずや。されバ此風詠は滑稽を元とし、興を縦にす。聞人咄笑して、能世に走るを以て艸とせんか。しかも川柳の枝葉繁茂して、八十五編の著名を分つ。夫が中に女郎花と呼べる名に愛て馬喰町居る清屎の主一ト年風流の筵を開き、四方の好子を勧めて、何百有余吟を集め川柳翁の撰を乞ふ。甲乙の位定て、上木（筆者注：出版）して集の末編に備ふ。僕其席に連るを以て是に序せよとなり。幼より画を好むの癩癩ハあれど文編の筵を窺ふの眼なく、烏焉馬（注：烏亭焉馬）の誤りいかにせんと再三辞すといへども赦さず。止事を不得して丹青の筆を霏ぎ鈍墨を点じ、文に似たるを記す。観る人咎る事勿れ。于時文政西夏 前北斎葛飾為一述卍」（『年譜』資料20 p161。句読点は筆者による。ルビは現代仮名遣いに直した）

※烏亭焉馬（落語中興の祖。1743～1822）の勧めでしかたなく序文を書いたというのである。序文及び同集所収の北斎の19句に俳号として「卍」を用いている（『年譜』による）。

★10月2日、川柳の会（カシハ評）に出席、3句詠む。

★12月15日、川柳の会（中ノ橋納会。松鱸評）に出席、2句詠む（『年譜』による）。

★12月20日、川柳の会（葛飾納会。夢輔楽評）に出席、1句詠む（『年譜』による）。

★この年発行の『柳多留』に掲載された句（85篇に19句、86篇に27句・88篇に1句）

※以下、本稿掲載句及び解釈は『誹風柳多留全集』（三省堂）と『年譜』及び田中聡『北斎川柳』（河出書房新社）、宿六心配（西山新平）『謎解き 北斎川柳』（河出書房新社）を参照した。

【柳多留 85 篇】

☆団子屋の夫婦喧嘩は犬も喰 卍（犬も食わない夫婦喧嘩も、団子屋の喧嘩は飛び散った団子を犬が食う）

☆黄色なゑり巻和尚さまきつい好 卍（黄色の襟巻きの高僧は、襟巻き同様、男色の狭くてきついのが好き）

☆誰が嗅いで見て譬たか河童の屁 卍（屁の河童というが、いったい誰が嗅いで譬えたというのか）

☆鳥指しハ生きた雀の帯を 卍（鳥指しは捕まえた雀を生きたまま腰の帯に挟み込み、後で鷹匠に渡す）

☆誰がかいで見て譬たか河童の屁 卍（他者評により前出。但し、表記に異同あり）

☆いろはへ花のちりにるハ比叡おろし 卍（比叡山に縁のある上野寛永寺の坊主が、花の散るようにぞろぞろと不忍のいろは茶屋を目指す）

☆とかく葛の葉後口からさせ勝手 卍（安倍清明の母・葛の葉は狐の化身。交接は後からのし放題）

☆大道直ふして昌平まで柳 卍（無）（浅草御門から昌平までの柳の大道は吉原通いの人出が多い）

☆新造を備後表へのり出させ 卍（経験浅い新造は、備後表の畳に船を乗り出すように頭が蒲団の上に出る）

☆気行の情を能真似るので流行 卍（いく表情や仕草が演技ながら上手なので人気の遊女だ）

☆足ながの三里手長がすへてやり 卍（足長の男の三里には手長の男が灸を据えてやる。『山海経』から）

☆頭字をひろつて夫婦ツマト呼ビ 卍（妻も夫もツマと呼ぶ。妻のツビ、夫のマラの頭文字も続ければツマ）

- ☆真直な榎木の棒を母の杖 卍 (真っ直ぐな硬い棒が母の杖になる。堅気の真面目な息子の棒も義母の棒だ)
- ☆見附物だと突合ぬ鳩仲間 卍 (口うるさい見附の番人のいる所の鳩は、互いに突つかずに、付き合わない)
- ☆雪の朝親を炬燵に呵り込ミ 卍 (雪の朝、仕事を装い遊郭に行こうとする父親を炬燵に入れと諫める子)
- ☆売居のやうに御寺の煤はらひ 卍 (売り家のように堂内をからっぽにしての寺の煤払い)
- ☆化物の息子三郎ッ首ぐらゐ 卍 (六郎っ首の息子だから三郎っ首ぐらいのものだろう)
- ☆鉄壁も通ふれと浅黄おやしてる 卍 (遊郭で、浅黄木綿の田舎侍が鉄壁も破らんと勃起して控えている)
- ☆干蛸魚苞麩となり果る口惜しさ 卍 (干蛸の足を藁で包んだようなあそこの元気も、柔らかい麩のようになった悔しさ)

【柳多留 86 扁】

- ☆御薬菌青瓢単 (たん) が多んを這ひ 卍 (小石川薬草園の療養所の縁側に青ざめた病人が寝ている)
- ☆灰小屋の出逢イ穢栗投入れ 卍 (灰を貯える小屋での密会は、覗いた男に嫌がらせて穢栗を投げ込まれる)
- ☆紅葉ふみわけぐんにやりと鹿の屎 卍 (紅葉踏み分け、なんと鹿の尿を踏む。猿丸太夫の歌を踏まえる)
- ☆御薬菌青瓢単 (たん) が多んを這ひ 卍 (他者評により前出)
- ☆鰯と唐もろこしハ又いとこ 卍 (魚の卵のつぶつぶはトウモロコシと似ていて従姉妹の従姉妹か)
- ☆紅葉ふみわけぐんにやりと鹿の屎 卍 (他者評により前出)
- ☆小当りのこたつにむすこ首ツたけ 卍 (娘と炬燵に入り、息子は相手の気持ちを探る。息子も元気)
- ☆雪かきの十のふの出る美しさ 卍 (冷たい雪かきに、炭火を運ぶ十能を持って出てくる娘の美しさ)
- ☆唐の節季候チャルメラで踊り込み 卍 (割竹を鳴らす門付けの節季候が、チャルメラを鳴らす唐人だ)
- ☆ふん付けたかとおもわれる乱拍子 卍 (能「道成寺」の足踏みの舞は踏んづけたよう。「糞」に掛ける)
- ☆二間柄の蛇皮線を弾く手長島 卍 (一間の柄を二間にして蛇皮線を弾く『山海経』にある手長国の女)
- ☆天狗の管弦簫の笛をバ吹ず 卍 (天狗は管弦も得意だが、簫は鼻が邪魔して吹くことができない)
- ☆すくはせ給へ御十夜のあづきがゆ 卍 (御十夜の日のあずき粥。私を救うように揃ってください)
- ☆惣銅壺女房と共に身をしづめ 卍 (借金で、女房は身売りし、火鉢の高価な銅の爛付けまでも売りに出す)
- ☆新道へ金のなる木をやりたがり 卍 (横町の細い新道には妾が多い。娘も妾にして裕福に暮らさせたい)
- ☆いゝのくを尻で書ク大年増 卍 (大年増は娘と違い、指ではなく「いいの」を恥じらいなく畳に尻で書く)
- ☆灸点に勇士後ろを見せる也 卍 (敵に後ろを見せない勇士も、灸を据えるときは背中を見せてやせがまん)
- ☆彫物の有るが稲荷の吾妻ツ子 卍 (浅草稲荷町の寺は彫刻が多い。彫物のある寺も男も江戸っ子の自慢)
- ☆灸点に勇士後ろを見せるなり 卍 (他者評により前出。但し、表記に異同あり)
- ☆明キ株は三郎坊に中天狗 卍 (長男・次男ならぬ三男坊や大天狗ならぬ中天狗には株がなく、一人身が多い)
- ☆六部宿千手観音背負せられ 卍 (六十六部が泊まる安宿では、千手観音と称す虱をうつされる)
- ☆ふへますに気がへりますと姑いゝ 卍 (娘に子が増えたけれど、私は白髪や皺が増えて気が減入る)
- ☆大切な尿を見に来る小児医者 卍 (もっともらしく診察で子どもの尿を見に来る小児医は胡散臭い)
- ☆我ながらくさめを笑ふ鏡磨キ 卍 (銅の鏡面を磨きながらくしゃみをした自分の変な顔に思わず苦笑い)
- ☆振袖と羽織を吃(吠え)る村の犬 卍 (村には珍しい振袖姿の娘や羽織の男。胡散臭さに犬も吠える)
- ☆其腰で夜も竿さす筏乗り 卍 (木場のいなせな筏乗りは、そのしっかりした腰で夜も竿さすのか)
- ☆さめての上の御分別黒に染メ 卍 (色褪た着物はよく思索して古さの目立たない黒に染め直そうか。『仮

名手本忠臣蔵』七段目「一力茶屋」の場での平右衛門の台詞「醒ての上の御分別、無理を押へて三人を」を踏む)

【柳多留 88 編】

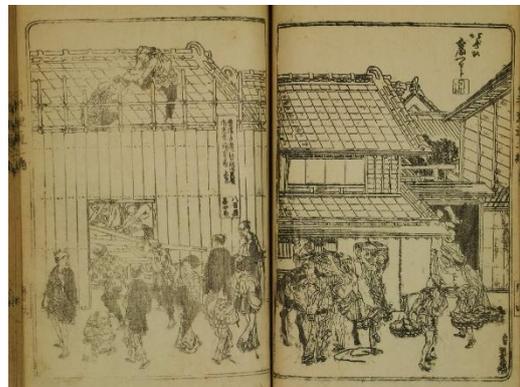
☆猪子から櫓の下でたゞきばき 巳(猪子の日は炬燵開きの日。炬燵の下は男女の舞台。触れた手を叩く)

●料理本『料理通 二編』(2月。角書「江戸流行」。全四編。八百屋善四郎作。北斎改为一筆。他に、酒井抱一、谷文晁等が挿絵を描く。和泉屋市兵衛〈甘泉堂〉版。18.4×14.8。早稲田大学図書館蔵)

※北斎は二篇(八百前改築の図)と四編(天保6年2月:1835)に挿絵を描く。初編(文政5年:1822)と三編(文政11年:1828)には描かず。

※江戸の料理屋:八百善注の料理法の解説書。

注)八百善:享保2年(1717)に江戸の山谷で開業。文政期の四代目の当主栗山善四郎は文人墨客との交流が深く、狂歌、絵師、戯作者の大田南畝(蜀山人)は八百善で芸者小萬に「詩は詩佛(筆注:大窪詩佛。文化文政期の漢詩人) 書は米庵(筆者注:市河米庵。文化文政期の書家。幕末の三筆と唱われた)に狂歌俺れ 芸者小萬に料理八百善」と狂歌を書いて渡し、その道の随一を示したという(『頓智頓才蜀山人』ねぼけ庵主人編 大正3年。「国立国会図書館デジタルコレクション」p236~237より)。



八百善は現在、神奈川県鎌倉市十二所33-2で開業。

986 料理通二編:八百善改築の図(早稲田大学図書館)

●錦絵『新版大道図彙』(全12図。四つ切判錦絵揃物。無款。西村屋与八・伊勢屋利兵衛版)

※この年の西村屋与八の出版広告に「新版 大道図彙 前北斎为一 袋入十二枚 此画江戸市中のにぎはひ大道の有さまを集む はりませなどにハ別て珍しき品也御求御覧可被下候」とあるという(2005『北斎展』カタログ)。広告には「前北斎为一」とあるが図は無款。

※版下絵には「東都地名の内」という題が付されている(『秘蔵浮世絵7 ギメ美術館』p251)

☆〈日本橋〉(12.7×19.4 フランス国立図書館/ギメ美術館蔵)

※旅の男二人が描かれ、「かつしかごおりのひやくせうほくろべいゑどけんぶつしてづなくうつたまげ申のふぜひをゑがく」(葛飾群の百姓黒子兵衛、江戸見物して図無くうつたまげ申すの風情を画く)と記され、日本橋の上で葛飾の百姓ほくろ兵衛が江戸の繁盛ぶりに驚いている傍らで、欄干にもたれて江戸城を指差している男がいる。十辺舎一九『東海道中膝栗毛』の弥次郎兵衛と喜多八を意識して制作されたと思われる。

☆〈本所〉(12.7×19.1 フランス国立図書館/ギメ美術館蔵)

※桶職人が桶に乗って箍を打っている。それを手伝う三人の男。大桶枠の中に入って削っている職人の図。

☆〈小田原町〉 (12.7×19.6 東京国立博物館/ギメ美術館/フランス国立図書館蔵)

※魚市場で両天秤の左右の籠に二尾の大きな鯉を入れ運んでいる男。それを見ている男たち。小田原町は、現東京都中央区日本橋本町と室町辺り。



987 小田原町 (東京国立博物館)



☆〈茅場町〉 (12.7×19.6 東京国立博物館/ギメ美術館/フランス国立図書館蔵)

988 茅場町 (東京国立博物館)

※大提灯に絵を描く三人の男と、墨を調合する男と、提灯を支える男の図。

☆〈石町〉 (12.7×19.2 東京国立博物館/ギメ美術館/フランス国立図書館蔵)



※天狗の面を付けた箱笈を背負い、高足駄を履いている山伏。シャボン玉を吹いて売り歩く男、それを面白がって見る子どもたち。一升徳利を三本手に持っている男。蕎麦捏ね用の大盆を立てて蕎麦切包丁を持っている男たちの賑わい。

989 石町 (東京国立博物館)

☆〈外神田〉 (東京国立博物館/フランス国立図書館蔵)

※やっちゃ場(青物市場)への西瓜を船から岸の受け手に放っている図。フランス国立図書館所蔵の「西瓜の陸あげ」にも同画趣の絵がある。⇒文政9年条参照。



990 外神田 (東京国立博物館)

☆〈馬喰町〉 (12.7×19.1 東京国立博物館/ギメ美術館/フランス国立図書館蔵)



※「公事宿」と呼ばれる宿泊所の部屋で按摩をしてもらう三人の男、それを見ながら旅支度をする二人の女。版元の永寿堂(西村屋与八)を思わせる「永」と染め抜かれた風呂敷に包まれた荷物が置かれた部屋の風景。

991 馬喰町 (東京国立博物館)

注) 公事宿：訴訟などのために宿泊する宿。訴訟手続きの事務処理に携わる人もいた。

☆〈御蔵前〉 (12.7×19.1 東京国立博物館/ギメ美術館蔵)

※仁王が安置された講堂に集まり念仏を唱える信者たちのを俯瞰的に描いた図。版下絵の

大提灯に版元の伊勢屋利兵衛・永楽屋東四郎・近江屋与兵衛(?)の文字が記されるが、錦絵では永楽屋の文字が消え、「志摩や重太●」と差し替えられている(『秘蔵浮世絵大観7 ギメ美術館』p 251)。



992 御蔵前 (東京国立博物館)

※『秘蔵浮世絵大観8』(p 262~269)では、この図を「無題」としている。

☆〈四ツ谷〉 (東京国立博物館/フランス国立図書館蔵)

※往来で、商売物を入れた箱を担ぐ男、大傘の下で物売る男、その前を馬で早駆けをする侍など、往来の賑わいの図。



993 四ツ谷 (東京国立博物館 : travel.jp より)

☆〈佃島〉 (12.7×19.4 東京国立博物館/ギメ美術館/フランス国立図書館蔵)

※船の錨を鍛冶のハンマーで打つ男達の図。



994 佃島 (東京国立博物館)

☆〈通町〉 (東京国立博物館/フランス国立図書館蔵)

※「大蒲焼 ゑどまへ かばやき」と書かれた箱看板のある前の台に腰を下ろす母親と、その台に上ろうとしている子ども。その傍で赤子を抱きあげて喜ばしている母親。足萎えの男が木製の引き車に乗って移動している。その男の被る笠には「森田屋」の文字が記される。臼で米をつく男が手を休めて煙管で一服している。臼の下ではこぼれた米を漁る家鴨と鶏。米俵を背負って棚に寄りかかって休む男など、通町の賑わいの図。



995 通町 (東京国立博物館)

☆〈無題〉 (「住吉踊り」「季ぞろ」とも。東京国立博物館/フランス国立図書館蔵)

996 無題 (東京国立博物館)

※大傘の下で踊る男たち。各人が手に持つ団扇には



「新」「板」「大」「道」「図」「彙」の一字がそれぞれ書き込まれている。版下絵には「橋本町」（馬喰町となり）とある。

●川柳本『十二評十六題 狂歌国尽』（一冊。瀬川路蝶撰。序文に「干時文政西夏 前北斎為一述」）とある）文化7年（1810）『狂歌国尽』の改竄本といわれる（『年譜』による）。

●肉筆画「雄鶏図」（着色一幅。前北斎为一筆。印ふしのやま メトロポリタン美術館蔵）

※赤い鶏冠と黄色い両足、黒い羽根で覆われた雄鶏が首を垂れてこちらを見ている図。縁取りがない墨絵風の絵。

●肉筆画「鈿女命と猿田彦命」（絹本着色胡粉一幅。無款）

997 鈿女命と猿田彦命 (<http://uzumet.com> より転載)

※天狗の顔をした猿田彦命が右手に矛を持って立ち、鈿女命が垂髪、緋袴姿で右脇に矛を抱えて向き合っている。背景は胡粉地に黄土色の地潰し。

●摺物「小禽」（北斎改为一筆。印二人人形。色摺。18.9×17.2 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※黄色の鶏の雛と思われる三羽を漢画風に描く。鳥の画材から「酉年」の本年の作と推測されている。



六樹園の狂歌「普米かあたまはかりかかすくの 筆の坊よくなるうめてたき」（歌意不明）が記される（『ヒーターモース・コレクション北斎図録』による）。

998 小禽（すみだ北斎美術館「北斎師弟対決展」ツイッターより）

●摺物「彫摺図」（正月。色紙判色摺。北斎改为一筆。21.2×18.7 フィッツウィリアム美術館蔵）

※新春の摺物として、長門・萩の節亭南山の依頼によるもの。烏帽子を被る男が桜木を彫っている側で、晴れ着を着た女性が馬連で色を摺っている図。二人の脇には、「南山壽」と彫られた衝立が置かれている。「桜木にことぶく春の摺ものも 南の山のかげず崩れず」の狂歌が記される。

文政9（1826）丙戌 67 歳 卍、前北斎戴斗、前北斎为一、为一、为一写、（北斎）

印 葛しか、一人人形：こと（56 歳）孫（17 歳）、阿栄（29 歳）

◇江戸で疱瘡が流行。

◇4月1日、天文方の高橋景保（書物奉行）が江戸・長崎屋にシーボルトを訪ね、江戸とサハリンの地図、間宮林蔵の権太の記事を贈ると約束する。4月9日、高橋景保が再び訪

れ日本地図を後日秘密裏に長崎に送ることを告げ、翌文政 10 年 6 月にシーボルトに送った（『シーボルト江戸参府紀行』〈p 524～525 より〉昭和 50 年改訂復刻版 呉修三訳注。雄松堂書店 初版昭和 3 年）。高橋景保は北斎とも親交があったともいわれる（藤ひさし『北斎漫画 動きの驚異』河出書房新社。p 191）。

※長崎への帰路、5 月 7 日に大坂・道頓堀角の芝居小屋（麻尾弥三郎座）で「妹背山女庭訓」をシーボルト、スチュルレル、川原慶賀らが観劇する。市川団蔵、尾上菊五郎、尾上松助らの出演だったらしい（『2017 北斎展図録』p 12、及び『シーボルト江戸参府紀行』昭和 50 年改訂復刻版 p 575～581）。

★4 月 8 日、馬琴宅を訪れ杉浦女に扇二本を渡す。『馬琴日記』の本日条に「昼後、画工北斎来る。明後十日画会致候に付、杉浦女、柳新へ案内いたしくれ候様、申に付、お百（筆者注：馬琴の妻）を以て、案内致させ也。即刻帰去。杉浦方へ扇二本持参のよし」とある（ルビは筆者による）。

★4 月 9 日、馬琴主催、柳橋満八での書画会に出席。

★4 月 10 日、北斎自ら柳新で書画会を催す（『馬琴日記』）。

★10 月 23 日、川柳の会（武蔵野会。水魚評。会主：風松）に出席、1 句詠む（『年譜』による）。

★11 月 22 日、川柳の会（首尾松三回目。金成評）に出席、2 句詠む（『年譜』による）。

★12 月 10 日、川柳の会（首尾松会。菊雄評）に出席、1 句詠む（『年譜』による）。

★『柳多留』89 編に川柳 2 句、91 編に川柳 11 句載る（『年譜』による）。

【柳多留 89 編】

☆弱よく強を制しまア寐なんしよ 卍（妓楼で待たされ不機嫌な侍に、まあ寝ましよう甘い声で慰める）

☆誰のために育ツ權の切かげん 卍（墓前に供える榎が育ったが、供養する人にはどの程度切ったものか）

【柳多留 91 編】

☆性ハ為名ハ莊字ハ郎としやれ 卍（姓は「い」名は「そう」あざなは「ろう」で「居候」と洒落る）

☆古事記いせやハ浦安の嶋を着せ 卍（伊勢屋はケチで安物の裏地・伊勢綿を奉公人に着せる。「浦安の国」（日本）を書いた「古事記伝」の本居宣長も伊勢出身）

☆婚礼を蜆ですます急養子 卍（跡継ぎがなく、急な養子貰いの祝いには、蛤の吸い物ではなく蜆ですませる）

☆加茂の祢宜鍋とり公家と呑んで居る 卍（鍋掴みに似た飾りの冠を被る貧乏公家が、加茂の祢宜と呑んでいる。鴨・葱・鍋・鳥の組み合わせ）

☆蜻蛉ハ石の地藏に髪を結び 卍（石の地藏の頭に蜻蛉が止まって、地藏が髪を結ったように見える）

☆見付たら六つにすると馬鹿亭主 卍（密通の男女は重ねて四つにするが、実は女房の相手は二人だった）

☆どつちらで年を取ふと渡し守 卍（大晦日、恵方参りの客を乗せた船頭は、どっちの岸で年を取るのか）

☆恐ろしい釘に夜宮のかけ行灯 卍（宵祭りの行灯が、丑の刻参りで打ち込まれた五寸釘に掛かっている）

☆乞食の喧嘩鶏にひろわれる 卍（乞食の喧嘩で貰った食べ物が散らばって、それを鶏が脇から拾う）

☆乞食の喧嘩鶏にひろわれる 卍（他者評により前出）

☆むだきんを広げてこまる若狸 卍 (若い狸は八畳敷きに足りず、見栄で広げてもどうしていいやら困る)

【北斎工房の絵、大量に海外へ】

★3月15日(西暦1月9日)、シーボルト、商館長(J.W. Stuveler ヨハン・ウィルレム・ド・スチュルレル)の江戸参府に同行。長崎の若い絵師川原慶賀(1786～没年不明)を伴い、道中の様子を描かせる。4月10日(西暦3月4日)江戸着。5月18日(西暦4月12日)迄滞在。

※シーボルト、江戸滞在の4月10日から5月18日の間に北斎に会い、文政5年(1822)に前商館長ブロムホフが発注した絵を一揃い受け取る(マティ・フォラー「葛飾北斎とシーボルトの出会い」)。『2017北斎展図録』p11所収)

但し『シーボルト江戸参府紀行』(昭和50年改定復刻版)には、北斎と会ったという記事は見当たらない。江戸滞在中のほぼ毎日の記事が記載されているが、3月8日と4月4日から7日までの記事が書かれていないので、あるいはこの期間に会ったか。

※『秘蔵浮世絵大観8 パリ国立図書館』所収文には次の記事があるので要約する。

「1986年10月25日、パリ国立図書館において、檜崎宗重博士と本全集編集部は、25枚の水彩画を発見した。25図全ての様式は葛飾北斎かその一門の手と思われる。オランダ商館長ヨハン・ウィルレム・ド・スチュルレルが文政9年(1826)4月頃に江戸で入手したらしい。ほぼ同じ時期の制作と考えられる葛飾様式の水彩画15枚がフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトのコレクションとしてライデン民族学博物館(筆者注:現オランダ国立民族学博物館)に所蔵されている。これは寛政10年(1798)、商館長ゲイスベルト・ヘンミー(1748～98)と商館付医師レチケの注文したもの(寛政10年の項参照)」。

これについては、文政9年中に絵を描く約束があり、『日本風俗画』(仮称。彩色。オランダ画紙使用)として、シーボルト所蔵のものはライデンのオランダ国立民族学博物館に、オランダ商館長スチュルレルの所蔵のものはパリ国立図書館(筆者注:現フランス国立図書館)に、それぞれ買取られたという注(2007年12月13日「日経ビジネスオンライン」所収、内田千鶴子「シーボルト事件に脅えた北斎」より)。

注)1855年、J.W. Stuvelerの息子W.L Stuvelerにより1855年にパリ国立図書館に寄贈された。

※シーボルトは『北斎漫画』初編から10編までも持ち帰っている(『北斎漫画』3「奇想天外」所収「旅する北斎漫画」浦上満 p337より。2011年 青幻舎)。但し、初摺版は2冊だけらしい(浦上満『北斎漫画入門』p32 文藝春秋社 2017年)。

【シーボルトが持ち帰ったとされる15図】

※文政7年(1824)～9年(1826)の作か。古オランダ画紙による画(オランダ国立民族学博物館:シーボルトコレクション蔵)。

ファン・ヒューリック(ワシントン・フリーア美術館長)による分析(『秘蔵浮世絵美術館8 パリ国立図書館』p268～267)では、第1グループ(1～6)は「日常生活の情景」(古オランダ画紙を使用)、第2グループ(7～11)は「祭礼」(古オランダ画紙使用)、

第3グループ(12~15)は「江戸市中」(古オランダ書類上質紙に和紙で裏打ちしたものを使用)に分けている。

※第1グループと第2グループはシーボルトが収集し持ち帰ったもので、第3グループは川原慶賀(魚屋北溪画ともいわれる)が北斎をまねて描いたものとしている。

☆1〈早駆け〉(紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定:北斎。26.7×40.1 シーボルト・コレクション)。『富嶽三十六景』(天保2年)〈隅田川関屋の里〉や「武士の乗馬」(フランス国立図書館蔵 文政9年条参照)にも同画趣がある。

999 早駆け(オランダ国立民族学博物館)



☆2〈厩〉(「洗馬図」とも。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定:北斎。27.3×39.8 シーボルト・コレクション)

※二頭の馬を厩で洗う二人の男。一頭は歯を磨き、もう一頭は餌袋から与えられた桶の餌を食べている。『絵本孝経』(嘉永3年:1850)に同画趣がある。

☆3〈武士と従者〉(縦紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定:北斎。27.5×39.5 シーボルト・コレクション)

※肘までの手袋をつけようとする武士と、笠と風呂敷の包み物をもつ従者の図。

☆4〈驟雨〉(「驟雨図」とも。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定:北斎。27.2×39.8 シーボルト・コレクション)

※突然の夕立に傘をさしたり、笠をかぶったりして慌てている図。『富嶽三十六景』〈駿州江尻〉の動きのある画趣に近い図。

1000 驟雨の夕立(オランダ国立民族学博物館)



☆5〈漁師の家族〉(「漁村図」「初夏の浜辺」とも。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定:北斎と応為。27.6×40.2 シーボルト・コレクション)

※漁師とその妻が上から吊るされた網を編んでいる側で、打ち上げられた大きな錨に乗って遊ぶ5人のこども。画面右には石垣の上に家が建っていて、沿岸の海沿いの家並みも遠近法で次第に小さく描かれる。

1001 漁師の家族(オランダ国立民族学博物館)



☆6〈呉服商〉(「商家の図」「節季の商家」とも。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定:北斎と応為。27.8×40.1 北斎と応為の共作とも。シーボルト・コレクション)

※店の主人が炬燵にあたり、猫も丸まっている。その前で番頭が当座の帳面を脇に置いて算盤をはじいている。その脇では女将が茶を団扇で沸かしながら番頭の様子を穏やかに見

ている。画中の当座の帳面に「文政七年正月」の文字がある)

1002 呉服商 (オランダ国立民族学博物館)

☆7 〈秋祭り〉 (「村祭り図」 「初午祭」とも。横長判。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定：北斎。27.6×40.5 シーボルト・コレクション)

※村の祭りで子どもたちが、小川の端の先を練り歩く。狐の面をつけ扇子を広げている子がいる。先頭の子は「正一位大明神」の幟を持っている。



☆8 〈年始回り〉 (「震が関での年始回り」 「年始行図」とも。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定：北斎と応為。39.8×28.4 北斎と応為の供作とも。シーボルト・コレクション)



※袴をつけた武士が、盆を手に持つ商人と、鉄箱の上に鶯が置かれ、その脇でしゃがんでいる丁稚に何か話している。これから新年の挨拶廻りをする様子。商人の足元には犬が二匹、互いに臭いを嗅ぎ合っている。図の左には、新竹で作った垣に海老と羊歯(裏白)の正月飾りが飾られ、図の右の立ち並ぶ倉とともに遠近法で次第に小さくなり、その先の火の見櫓に視点が集中する。空には凧が三つあがっている。

1003 年始回り (オランダ国立民族学博物館)

☆9 〈花魁と禿〉 (「遊女と禿図」とも。無款。北斎工房。推定：魚屋北溪か二代戴斗。紙本着色一枚。40.0×27.6 シーボルト・コレクション)

1004 花魁と禿 (オランダ国立民族学博物館)

☆10 〈花見図〉 (「花見見物の一行」とも。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定：魚屋北溪。北斎と応為の供作とも。40.0×27.2 シーボルト・コレクション)



※商家の女二人が姉様被りで花見に出かける。二人の手には煙管がある。側には下男が赤い毛氈を担ぎ、弁当の入った箱を抱えている。丁稚も日傘と荷物を背負って付き従っている。図の左には細みの桜の木が三本あり、図の上全体に花を広げている。

1005 花見図 (オランダ国立民族学博物館)



☆11 〈端午の節句〉 (紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定：北斎と応為。魚屋北溪画とも。40.2×27.6 シーボルト・コレクション)

※物干し場の中で、女が赤子を抱いて、母親のほうに差し出そうとしている。母親は着物の前をはだけ、胸を出して赤子を見ている。紋が描かれた幟や、赤い鍾馭が描かれた幟が立ち、図の上には大きな鯉が泳いでいる。

1006 端午の節句 (オランダ国立民族学博物館)



☆12 〈七五三宮詣〉 (30.4×39.8 無款。北斎工房。推定：魚屋北溪。紙本着色一枚。シーボルト・コレクション)

※土手の先の神社に向かう七五三詣の一行。男性に肩車された少女は角隠しを被っている。その前を行く母親。後についていく小奴。土手の先には往来している人たち、土手下では駕籠かきがいる。図の上半分は藍のぼかしで空が描かれる。

☆13 〈大川端夕涼み〉 (「大川楼上図」とも。30.4×39.8 無款。北斎工房。推定：魚屋北溪。紙本着色一枚。シーボルト・コレクション)

※隅田川端の料理屋の提灯が架かっている楼上で涼む芸妓が二人。一人は立って、^{ひざまず}跪いて三味線箱を小脇に抱えた男と話している。一人は背を向けて座り大川の夜景を眺めている。そばに朱塗りの五脚の盆に料理の椀などが乗っている。

☆14 〈江戸城〉 (30.4×39.7 無款。北斎工房。推定：魚屋北溪。紙本着色一枚。シーボルト・コレクション)

※「玄猪」は、10月亥の日の行事で、胡麻や小豆を入れた亥の子餅を亥の刻に食べて無病息災を祈る中国の行事を江戸城でも催された。「玄猪の登城」は暮六つ(午後6時頃)に登城するので、大手門と桜田御門前で火を焚く。図は炊かれる焚き火が描かれる。火は城の櫓に向かって吹き上げられている。登城した諸侯に紅白の餅が下賜された。

☆15 〈大山講山帰り〉 (「行楽図」とも。30.4×39.7 無款。北斎工房。推定：魚屋北溪。シーボルト・コレクション)

※道標のある緩やかな山道を、二人の女と、子供を背負う年増女の家族。その後ろには小僧が二人、棒に下げた荷物を肩にしてついていく。同様の右にも大山帰りの男が二人立っている。

【文政7年～9年頃。フランス国立図書館蔵の北斎にかかわる作品 25 図】

(紙本着色。『浮世絵大観 8 「パリ国立図書館」(現フランス国立図書館)』による)

※以下、北斎工房による作品。全て和紙を使用。

☆1 〈武家〉 (北斎工房・無款。北斎工房。推定 北斎。紙本着色 45.2×31.7)

※和綴じ本を左手に持ち、三つ巴紋の袴を着け、何かを見やる侍。
1007 武家



☆2 〈町家の娘〉 (「まちやのむすめ」とも。紙本着色。北斎

工房。推定：北斎。45.4×31.8)

※島田の前髷に赤い飾り物、後ろの髷に青い飾り物をつけ、鼈甲の簪を挿した娘。胸元は少はだけてお守りの紐が見える。下唇は笹紅で、薄い緑色。

1008 町家の娘



☆3 〈武家の奥方〉 (紙本着色。北斎工房。推定：北斎。45.4×31.1)



※丸髷に角隠しを被り、外出姿の女房。眉は剃られ、唇は笹紅。鼈甲の簪を着け、撫子の花の模様扇子を持っている。

1009 武家の奥方

☆4 〈町家の男〉 (「まちやのおとこ」とも。紙本着色。無款。無款。北斎工房、推定：北斎。45.5×31.8)

※着物の両袖の中で腕組みをして、うつむき顔の男の顔。

1010 町家の男



☆5 〈凧あげ〉 (紙本着色。無款。北斎工房。推定：魚屋北溪か二代戴斗。31.8×45.4)

※「龍」の字の書かれた大凧を上げる準備をする男たちを見る町家の奥方。武士と鉢み箱を担いだ供人がいる。空には鳶凧があがっている。

☆6 〈武士の乗馬〉 (紙本着色。無款。北斎工房。推定：北斎。31.6×45.4)

※シーボルト収集の15図中の

「早駈け」の構図に似た構図。

1011 武士の乗馬

☆7 〈茶店と往来〉 (紙本着色。無款。北斎工房。推定：魚屋北溪。31.8×45.3)

※「御屋寿美処」の看板のある葦簾張りの茶店の風景。床机に座る尼や、赤子を背負った女に茶を出す店の女。

側には天秤の両脇に下げた籠の野菜を売る男、鳥もちですずめを捕まえようと竿を持ち上げる男がいる。



☆8 〈日本橋辺風俗〉 (紙本着色。無款。北斎工房。推定：北斎。31.6×45.5)

※対岸には米蔵が立ち並ぶ。図の右から、臼で餅を突く男が、頭の汗に手を当て休んでいる。菰樽を担いだまま、台に腰掛けて休みながらそれを見ている搗米屋注の男。棒手振りの男がしゃがんで野菜の入った箆を下に置いている。重ねた寿司箱を肩に担いで売る男。掘割で釣りをする男。托鉢をする僧侶。奉納箱を背負い、「奉納金比羅大権現 本所番場町 願主 金剛院」と書かれたものを持つ金比羅参りの男。鮎の箱を持つ鮎売りの男。棒の先に付けたトンボの玩具を操りながら売る男。

大英博物館にはこの絵の素描がある (墨画。27.6×39.8『2007 北斎展図録』 p 105)。

注) 搗米屋：玄米を問屋から買い入れ、精米して売る商売。

1012 日本橋辺風俗

☆9 〈大山詣〉(紙本着色。無款。北斎工房。推定：北斎。31.7×45.6)



※険しい山道を

行列を作るように登る大山詣たち。「奉納大山石尊大権現」と書かれた大木刀を担ぐ男たち。



1013 大山詣

☆10 〈土手仕事〉(「土手工事」とも。紙本着色。無款。北斎工房。推定：北斎。31.7×45.5)

※土手を工事している男たち。遠くの橋には大勢の人が往来している。『伝神開手 北斎漫画』九編(文政2年)にも同画趣がある。大英博物館には、この絵の素描がある(紙本墨画。27.6×39.1 『2007 北斎展図録』p94)。

1014 土手仕事

☆11 〈西瓜の陸あげ〉(紙本着色。無款。北斎工房。推定：二代戴斗。31.7×45.5)

※河岸に着けた舟に大量に積んだ西瓜を岸の男に放り投げる男、舟から岸に渡した板の上に立ち、同じように西瓜を放る男を描く。岸の切石には子供が二人座って見ている。この図は『新板大道図彙』(文政8年)の〈外神田〉と同構図となっている。



大英博物館には、この絵の素描がある(紙本墨画。27.9×40.1 『2007 北斎展図録』p91)。

☆12 〈大神楽〉(紙本着色。無款。北斎工房。推定：二代戴斗か魚屋北溪。45.3×31.8)

※「大」と染めた布を被った獅子舞が踊り、笛と太鼓で囃す男たち。その周りで見物する人々。



☆13 〈神楽巫女〉(紙本着色。無款。北斎工房。推定：北斎か二代戴斗。45.2×31.5)

※二階の舞台上で巫女が御幣を肩にして踊り、烏帽子の男が太鼓を叩いている。その様子を見上げて見物する人々。『絵本庭訓往来』(文政11年)にも同画趣がある。

1015 神楽巫女

☆14 〈井戸掘り〉(紙本着色。無款。北斎工房。推定：北斎か魚屋北溪。45.4×31.7)

1016 井戸掘り

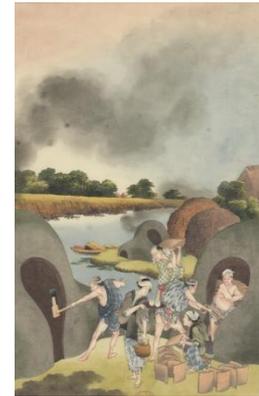
※足場を高く組み上げ、そこに上り井戸掘りの作業をする男たち。



☆15 〈今戸瓦窯〉（紙本着色。無款。北斎工房。推定：北斎。45.5×34.7）

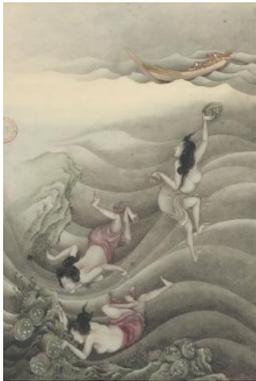
※いくつかの窯で瓦を焼く男たちに茶を出す女と、瓦を整理する女。今戸は瓦などの焼き物で有名。『絵本隅田川兩岸一覽』（享和3年：1803～文化3年：1806）、『都鳥』（享和2：1802）にも同画趣がある。

1017 今戸瓦窯



☆16 〈海女〉（紙本着色。北斎工房。推定：北斎。45.3×31.7）

1018 海女



※海中で鮑を取る三人の海女。海上の船には男たちが乗っていて、一人の海女が鮑を届けようと浮き上がっている。『伝神開手 北斎漫画』初編（文化11年）、『百人一首乳母か絵と起』〈参議堂〉（天保6年頃）にも同画趣がある。

☆17 〈仏師〉（紙本着色。無款。北斎工房。推定：魚屋北溪。45.4×31.7）

※赤く巨大な仁王像に色付けをしている職人たち。足元に寝転んで裾部分を担当する男、太い足に色づけする男、腰の部分に金箔を貼

る男たち。

☆18 〈雨中の漁〉（紙本着色。無款。北斎工房。推定：北斎。31.7×45.4）

※雨の中、激しい川の流りに浮かべた舟から釣りをする三人の男。向こうの滝の上にかげられた橋には傘をさした男たちが往来する。

1019 雨中の漁



☆19 〈海浜の漁師〉（紙本着色。無款。北斎工房：推定：北斎と応為。31.7×45.2）



※海浜で漁の網を修理する男と、それを指差して何か指示している男。側で籠を持っている子どもや、弁当の包みを持ち、赤子を背負う女がいる。海辺には波が寄せ、沖には帆掛け船が浮かぶ。

1020 海浜の漁師

☆20 〈洗張り〉（紙本着色。無款。北斎工房。推定二代戴斗。31.7×45.4）

※盥で布を洗う男。横に渡した布に刷毛をかける男と、それを見ている赤子を背負った女。布を干すために竿で持ち上げる男たちを描く。二代戴斗画とも。

☆21 〈素麺作り〉（紙本着色。無款。北斎工房。推定：二代戴斗。31.6×45.4）

※民家の軒先で男女が素麺を作っている。座ってこね鉢の素麺の生地をこねている男と女。細く伸ばした素麺を組んだ桁に掛け、棒で整えながら干す女。二本の棒に巻きつけた生地を伸ばす作業をしている男女。

☆22 〈漆屋 ろうそく屋〉（紙本着色。無款。北斎工房。推定：北斎。31.5×45.3）

※図の右には、「山形の下に久」と書いた定紋と、「ひしや（菱屋）」と書かれた暖簾の掛かる店先で、大きな木鉢に漆を塗る三人の職人。図の左には、「清浄三徳」と書かれた蝋燭を象った立看板があり、「三徳」と書かれた暖簾の店の中で、二人の男が蝋燭を作っている。三徳は、四谷御門外の蝋燭問屋・三徳屋治兵衛の店。



1021 漆屋 ろうそく屋

☆23 〈提灯張り〉（紙本着色。無款。北斎工房。推定：北斎。31.5×45.3）

※「参講中」と書き込まれた大提灯に台に乗って字を書く男。提灯の根の部分に赤い色づけをする男。側ですり鉢で顔料を擦っている男の後ろで、色付けしていない傘を竿に繋いで持ち上げている男がいる。傘屋も兼ねていた。提灯には、「江戸講中」として「武蔵屋」「江戸屋」「千代田屋」「足立屋」「埼玉屋」「児玉屋」等の屋号が書かれている。この図は『新板大道図彙』（文政8年）の〈茅場町〉と同構図である。フランス国立図書館では画題を「茅場町」としている。大英博物館に、この絵に似た素描がある（紙本墨画。27.9×40.1 『2007 北斎展図録』 p



89)。 1022 提灯張り

☆24 〈雪の渡し〉（紙本着色。北斎工房。推定：魚屋北溪。31.7×45.3）

※雪降る中、渡し舟には傘を差したり笠を被った人々が所狭しと乗っていて、船尾の船頭が竿をさしてこれから出発しようとする様子。

大英博物館には、この絵の素描がある（墨画。27.8×39.2 『2007 北斎展図録』 p 101）。

☆25 〈隅田川風景図〉（紙本着色・大塚八郎。24.5×40.4）

※図の右には、隅田川の百本杭が描かれ、河口には屋根船が浮かぶ。空には鳥が数羽舞っている。向こう岸には木々と家並み。全体に遠近法で描かれる。

この図だけがオランダ紙が使われ、他の 24 図とサイズが違う。図の下に欧文が書かれ、「江戸において、1826 年 4 月 おおつかはちろう」とあるという。ここから作者は北斎の門人大塚八郎（道庵）であり、この人物の何らかの介在で 25 図がスチュルレルに渡ったと考察されている。

1023 隅田川風景図



●肉筆画「行楽図」（文政7年～9年〈1824～26〉。紙本着色一枚。無款。31.8×45.7 個人蔵）

※オランダ国立民族学博物館の 29 点はオランダ紙に描かれているが、この絵は紙に描かれているので、文政 9 年(1826)にヨハン・ウィレム・スチュルレルによって国外に持ち出されたパリ国立図書館の 25 点の系統と思われる。北斎作か不明。

商人の女二人と男二人が行楽に行く途中で、小高い丘を歩いている。後ろから赤子を背負った女中と、棒に掛けた弁当を包む荷物を担いだ丁稚がついて行く。



1024 行楽図 (『2017 北斎 富士を越えて展図録』より転載)

●肉筆画「大川楼上図」(文政 7 年～9 年〈1824～26〉。紙本着色一幅。無款。31.6×45.5 個人蔵)

※オランダ国立民族学博物館の 29 点はオランダ紙に描かれているが、上記「行楽図」同様、この絵はオランダ紙ではなく、紙に描かれているので、文政 9 年(1826)にヨハン・ウィレム・スチュルレルによって国外に持ち出されたパリ国立図書館の 25 点の系統と思われる。北斎作か不明。

隅田川沿いの料亭の部屋で芸者二人がくつろいでいる。一人は立って簪かんざしに手をやって、しゃがんで三味線箱を持っている男の方を向いている。一人は、座って団扇を持ち隅田川を眺めている。芸者の前には脚付きの赤い盆に料理が乗せられている。隅田川には提灯をつけた屋形船が何隻も浮かび、図の左の両国橋には提灯を手にした群衆と、打ち上がる花火が描かれている。



1025 大川楼上図 (『2017 北斎 富士を越えて展図録』より転載)

【更に「江戸の風景」6 図発見】

※平成 28 年 (2016) 10 月 23 日「読売新聞」(朝刊) 記事。

「日本に西洋医学を伝えたドイツ人医師シーボルト (1796～1866) が持ち帰り、オランダのライデン国立民族学博物館が所蔵する作者不明の絵画 6 点について、同博物館のマティ・フォラー・シニア研究員は 22 日、「富嶽三十六景」などの作品で知られる江戸時代後期の浮世絵師、葛飾北斎 (1760～1849) の作品と判明したと発表した。

長崎市で開かれたシーボルト関連の国際学会で明らかにした。フォラー氏によると、日本橋や品川などの江戸の街並みをモチーフにした水彩画 5 点と北斎原画の石版画 1 点。いずれも落款はなく、遠近法や明暗法などの西洋の技法が使われている。

フォラー氏が 2 年前、ドイツの城に保管されていたシーボルト直筆の目録を発見。目録には『江戸の絵師、北斎が描いた江戸図 6 枚』などと書かれていたという

※同日「朝日新聞」記事では、目録に「北斎が西洋画の技法で描いた」とのシーボルトの

記述があったとしている。

●肉筆画「江戸の風景」(文政6年～9年〈1823～26〉か。仮題。水彩着色6図。無款。オランダ国立民族学博物館蔵)

※江戸の風景を描いた6枚(一枚は原画の石版画)。筆致の趣から北斎弟子たちによる工房の作品の可能性もある。画題はいずれも仮題である。

☆〈日本橋図〉

※日本橋の向こうに江戸城と富士山が見える。手前には多くの船が行き来している。遠近法による描写で『富嶽三十六景』の〈日本橋〉の構図に近い。

1026『江戸の風景』「日本橋図」



☆〈両国橋図〉

※両国橋西詰めに塔が建ち、岸边には料理屋等が並ぶ。川にはたくさんの船が浮かび、図の右に雪を被った富士山を描く。



1027『江戸の風景』「両国橋図」

☆〈隅田川の岸边〉

※鐘ヶ淵当たりの風景と思われる。船着き場の岸边には蔵が並び、その前に帆かけ船等が浮かぶ。



1028『江戸の風景』「隅田川の岸边」

☆〈品川夜の月〉海に面した品川宿がひっそりと描かれ、街道を行く人もまばらで、月影に照らされている。海は手前が濃く、沖に行くに従って薄くなるグラデーション。図の左上に白い満月。



1029『江戸の風景』「品川夜の月」

1029『江戸の風景』「品川夜の月」

☆〈冬景色〉図の右には、雪を被った木々の間から芝増上寺の屋根が見える。前の広い道には、雪降る中をぼつんと五人の人物が描かれる。遠近法が強調され

画面中央に収束する一点描視となっている。

1030『江戸の風景』「冬景色」

●肉筆画「合せ鏡見美人図」(文政6年～9年〈1823～26〉北斎工房。94.2×33.0 シーボルトの注文によるものか。着色一幅。無款。オランダ国立民族学博物館蔵)



※2021年2月のすみだ北斎美術館「筆魂」展では、前北斎戴斗筆、印葛しか、個人蔵と



している。くの字に反るように立って合わせ鏡をする花魁。右手に持った手鏡に女の顔が映っている。袖から出た赤い襦袢や足元から見える青い着物の裾の縁取りは、チリチリと呼ばれる北斎の特徴的な描き方。

1031 合せ鏡見美人図（オランダ国立民俗学博物館）

●肉筆画「花魁道中図」（文政6年～9年〈1823～26〉か。北斎工房。シーボルトの注文によるものか。着色一幅。無款。86.2×31.5 オランダ国立民族学博物館蔵）

※『北斎肉筆画大全』による。白地に花模様の散らされた簪を挿した花魁が道中をしている図。大きな牡丹模様の前帯を抱くように締め、赤い裏地の

仕掛（打掛）を肩からずらして着て、前裾を右手で少し持ち上げて、首を前に傾けている、襟元から見える襦袢の模様は簪の模様と同じ。背景は地潰しで、花魁一人だけが描かれる。

1032 花魁道中図（オランダ国立民族学博物館）



【大英博物館所蔵の素描】

作品の所在は不明だが、大英博物館には以下の素描もある。北斎工房で仕上げ、海外売却の予定だったか。文化8年頃の作品であるが記述の関連から文政9年の項に記載する。

☆〈大工〉（文化8年頃〈1811〉 無款。紙本墨絵。27.7×39.2）

※鋸を挽く職人。『富嶽三十六景』〈遠江山中〉（天保2年）と『百人一首字波かゑとき』〈春道列樹〉にも同画趣がある。

☆〈橋を渡る男女〉（文化8年頃〈1811〉 無款。紙本墨絵。28.0×40.2）

※農家の庭先で彩色等の仕事をする男女。その側の小川の小さな橋を渡る男女。

☆〈幟の柱立て〉（文化8年頃〈1811〉 紙本着色。無款。27.6×39.2）

※幟用の太く長い柱を立てるため、梯子に柱の先頭を掛けて持ち上げようとする男たち。柱の根元を動かないように肩で支える三人の男。

●読本『還魂紙料』（「すきかへし」とも。随筆風。二冊。柳亭種彦作。為一写。西村屋与八・鶴屋喜右衛門他版 早稲田大学図書館/国立国会図書館蔵）

※「千年飴売り」「若衆木偶」など北斎の画風ではなく、古画をそのまま模写した絵となっている。画中に、葛飾為一筆・為一模・為一写などと記している。



1033 『還魂紙料』若衆木偶（早稲田大学図書館）

なお書名については「コトバンク」『世界大百科事典第2版の解説』)では「原本の版心注にある〈すきかへし〉を書名にする向きもあるが、同年刊の種彦の合巻に自身(「かこんしりょう」と)音読している」と説明している。

注) 版心：和装本で各頁の折り目の余白部分(前小口)。

●狂歌絵本『狂歌正流百花鳥』(一冊。北斎・北溪画。全亭正直編)

※「浮世絵文献資料館」による。

●狂歌絵本『蓮華台 万徳成翁追善集』(『万屋徳右衛門追善狂歌集』)とも。6月。一冊。万徳成編輯。六樹園撰。為一筆。一図のみ描く。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※山田徳右衛門注の七周期追善として刊行された。北斎の画は、凌霄花と思われる赤い花にとまる虻を一図描く。

注) 山田徳右衛門は、万徳成の父。六樹園(石川雅望)門下の狂歌作者。本書は、狂歌の外、和歌・漢詩・画によって編まれている。

※石川雅望の序文に「徳成ぬしの父なるひと、うせ給ひてより、よつときなゝかへりにそなりにたる。けにとしつきのなかれはやきこと、いまさらにおとろかれて、そゝろになみだのみいでく。(略)」とある(句読点、ルビは筆者による)。

●肉筆画「鍾馗図」(絹本墨絵一部淡彩一幅。前北斎為一筆。印葛しか。

102.2×30.4 熊本県立美術館蔵)

※表装裏書に「文政九戊年五月 戸塚弥吉 四代目弥吉」とある。図上部に太い黒の二本線が横に引かれているのは幟を意識したためともいわれる。画面のやや右方向を睨み、左足を前に出して立つ堂々とした鍾馗を墨絵風に描く。

1034 鍾馗図(熊本県立美術館)

●扇面画「子規と萩図」(着色一枚。為一筆。印一人人形)

※扇の右半分、萩の白い花が咲いている上を鳴きながら飛ぶほととぎすを描く。



文政10 (1827) 丁亥 68 歳 卅、(葛飾戴斗先生)、東都葛飾為一、北斎為一敬画、 北斎改為一、葛飾北斎為一、印葛しか：こと (57 歳)、阿栄 (30 歳)、孫 (18 歳)

◇3月26日(西洋暦)、ベートーヴェン没(58)。

◇5月6日、シーボルトの娘楠本イネ生。

◇5月16日、町芸者21名が華美の衣服・髪飾りを取り上げられ過料に処せられる。同禁止のお触れは文政7年6月19日にも出ている。

◇7月29日、江戸市中でみだりに日傘を使用することを禁じる。

◇7月、東西庵南北没(60余)。

◇8月13日、菅茶山没(80)。

◇11月19日、小林一茶没(65)。

◇柳島妙見寺境内に歌川豊国の筆塚が建立される。

★4月29日、川柳の会(桜木会。文志評)に出席、2句詠む(『年譜』による)。

★5月22日、川柳の会(名木月並会。克己評)に出席、1句詠む(『年譜』による)。

★6月5日、川柳の会(五堂随評)に出席、1句詠む(『年譜』による)。

★『柳多留』93篇に27句、95篇に2句、96篇に8句載る(『年譜』による)。

【柳多留 93 篇】

☆ぼんぼりで追人のかかるきりぐす 卍 (盗人の追っ手のようにキリギリスの居場所を娘が雪洞で照らす)

☆七日には逃れ八日につるされる 卍 (貧乏人の七草粥にはない齋が翌日には虫除けで行灯に吊される。

別解：正月七日に外す松飾りは八日に逆さに吊るし、九日の夷祭りに備える)

☆まじごと馬の見て居る麦畠 卍 (麦畑の男女の交わりを、馬がまじまじと見つめている)

☆張ぬきの兜幟の波しずか 卍 (張り子の兜や幟でも、波静かな穏やかな世では濡れて崩れることもなし)

☆金魚売網代の魚や籠の蟹 卍 (金魚売りが秋には網代に魚を乗せ籠に蟹を入れて魚屋になって売りに来る)

☆鬼一口に白玉の露もなし 卍 (白玉の露もないほど鬼に食べられた姫。『伊勢物語』「芥川」を踏む)

☆八兵衛計畧船橋を引て逃げ 卍 (八兵衛と呼ばれる舟橋の女郎は男を誘って金を取って逃げる)

☆なまりぶし反りを打程安くされ 卍 (鏢の生節のように刀の反りを返して人を脅す侍の安っぽさ)

☆悪魔をバ除す日除の下手鍾馗 卍 (悪魔退治の鍾馗の幟も下手な絵で、色あせた日よけになった)

☆金魚売網代の魚や籠の蟹 (他者評で前出)

☆七日をバのがれ八日につるされる 卍 (他者評で前出。但し、表記に異同あり)

☆女夫石割れぬ先きハ転び合 卍 (夫婦岩も二つに割れる前に、抱き合うように夢中に転び合っている)

☆泥水でお玉いけなく成ッてゐる 卍 (泥水と言われる遊郭で自分の持ち物もオタマジャクシのようなった)

☆花うるし吉野の紙を二タ重ごし 卍 (上質な二重に晒した花うるしの紙を蒲団の中で当てる恥ずかしさ)

☆染替し秋は千種の裏よし野 卍 (秋の着物の染め直しに金がなく、表は千草だが裏は春の吉野の桜のまま)

☆秋果て見られぬ面ラの種茄子 卍 (種を採る種茄子も秋の終わりには色あせて皺だらけ。老妻もまた同じ)

☆立手水嵯峨野で佛御開帳 卍 (嵯峨野の清涼寺の御開帳で水を掛けるお身拭いは、まるで立ち小便のよう)

☆君が代ハ旗ざほまでが寐てくらし 卍 (君が代の平和な世には戦の旗竿までも用がなしで寝て暮らす)

☆帰依仏と悟らで作る雪達磨 卍 (帰依仏とも知らないでやがて消えてしまう雪達磨を作っている)

☆灰吹に烟りの残る暮の客 卍 (吸い殻落としの灰吹き煙が消えないほど年末には来客が絶えない)

☆塗り桶程に駒止メの雪の朝 卍 (綿摘みの塗り桶程の高さに雪が積もり、吉原へ馬も通えぬ朝になった)

☆股引の牡丹を探す角兵衛獅子 卍 (角兵衛獅子が股引の間を覗くような仕草。獅子に牡丹の言葉通り)

☆我ものを握る片手のぬくめ鳥 卍 (鷹が小鳥を使えて足を温めるように我が逸物を握って手を温める)

☆西村御見舞大仏様御怪我 卍 (大仏様が怪我をして、神田鍛冶町の鋳物師西村様がお見舞いでお直しもする)

☆田毎く月に蓋する薄氷 卍 (姥捨山の「田毎の月」にそれぞれ蓋をするように薄氷が張っている)

☆塗り桶程に駒止メの雪の朝 卍 (他者評で前出。但し、表記に異同あり)

☆南天を水の鏡の裏もやう 卍（「年譜」では「もよふ」。手鏡の裏の南天模様のように手水鉢に庭の南天が写っている）

【柳多留 95 扁】

☆七百八十文章鞋とも申されず 卍（一足 16 文の草鞋も 47 足をさし銭にして 780 文の価値。忠臣蔵四十七士を踏まえる）

☆相番は堀部尻ごみする力弥 卍（堀部安兵衛との相番は、美少年の大石力弥（主税）も尻込みする）

【柳多留 96 扁】

☆水かげん亭主産所にきゝに来る 卍（妻が産気づき、亭主がおとどの水加減を産所に聞きに来る）

☆落すなよ小僧小二朱を団子にし 卍（小僧は小さい二朱銀を団子のように握りしめて吉原行きか）

☆南無ブツと異香薫ずる仏の尻 卍（読経の最中に普通の線香と違う匂いがしたのは仏の尻か）

☆髭抜き鏡大大きな面でかし 卍（髭抜きのための小さな鏡を大きな顔で貸してくる）

☆南無ブツと異香くんずる仏の尻 卍（他者評により前出。但し、表記に異同あり）

☆気違ひのとらまえたがる稲光り 卍（気違ひが捕まえたがるほどの一瞬の稲光だ）

☆落すなよ小僧小二朱を団子にし 卍（他者評で前出。但し、「落すなよ」が「落すな」となっている）

☆鹿のくそ奈良の晒シの式度洗ひ 卍（高級な奈良晒の布も下に落とすと鹿の尿で二度洗う羽目になる）

【卒中を患うも自家薬で回復する】

★この頃、卒中^{そつちゆう}を患うが自家製の薬で回復する。

※「二十四時たゝざる内に用ゐる。二十四時半時かけてもきゝます。極上々の酒壺谷、ゆず一ツ、こまかにきざみ、どなべにてしづかに、につめ、水あめくらいにつめ、さゆにて二度くらいにもちゆる。たねは、につめた上にて、とりすて候。」（北斎が製法を、狂歌をよくした戸崎文志（本所石原町の菓子商・名物：石原おこし）に伝えたものを清水晴風が写す。『葛飾北斎伝』 p133）。

注）卒中：『葛飾北斎伝』 p133 の脚注によれば「中風」とある。

※自家薬製法の図あり（p134）。

（図中の書き込み）「竹べらにてきざみ^{きざみ}候。庖丁、小刀、鉄、銅の類はきらひ申候」

「鍋、鉄銅はきらひ申候」（「どなべ」と書き入れた鍋が火にかけてある図あり）

※柚子は『新著料理 柚珍秘密箱』（器土堂著。天明 5 年：1785。柚子の料理本。国立国会図書館蔵）に「柚薬酒の仕方」など、柚料理の多くを書いた本が出るほど体に良いものと認識されていた。

※林綾野『浮世絵に見る江戸の食卓』（美術出版社 2014 年）には「北斎のきつちうのくすり」として、作り方を解説している（p86）。

「材料（約 4 杯分）酒 3 合、柚子 3 個

1、竹べらで柚子の皮をむき、細かく刻む

2、柚子の果汁を絞っておく

3、土鍋に酒と 1 の皮、2 の果汁を入れ、弱火で 3 時間程煮詰める。途中、焦げつかないようにかき回しながらゆっくり煮詰める

4、白湯に3を適量入れ、かき混ぜていただく

「煮詰めやすいように酒3合とした。甘みの強い酒であれば柚子の強い香りとなじみやすい」

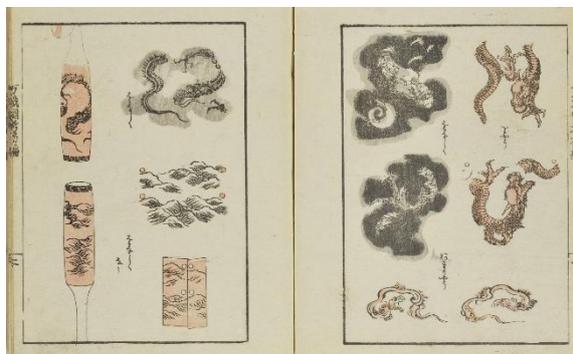
●俳書『安詞廼比斗茂渡』（「安詞乃比斗茂渡」とも。後摺では『あしのひともと』。内題は「芦の一もと」とある。一冊。田喜庵護物輯。無款。英大助・須原屋茂兵衛等版。早稲田大学図書館蔵）

※松尾芭蕉の『幻住庵記』（元禄3年：1690）の注釈書。巻頭の3頁に勢多の唐橋など湖南の風景（2図）を描くが、北斎かどうか未定。

※『年譜』では、「本書中「田喜庵著述目録」に「記中名所之図 芭蕉翁肖像 北斎為一画」とあるが、画風よりみて名所図は北斎か否か未定」としている。

●絵手本『万職図考』初編（葛飾戴斗先生画。半紙本淡彩一冊。河内屋茂兵衛（群玉堂）、須原屋新兵衛他版。大英博物館/国立国会図書館蔵）

※染色・根付け・煙管その他の職人のためのデザイン集。二編・三編は天保6年（1835）刊。四編・五編は没後の嘉永3年（1849）刊。為一期であるが、落款の「葛飾戴斗先生」は版元がつけたものか。



1035 万職図考初編（大英博物館）

●俳諧本『繡像 俳諧三十六句仙』（淡彩一冊。吡仙齋松雨撰。東都葛飾為一画）巻末に「文政十丁亥年刻成」とある（『年譜』による）。

繡像とは、肖像画と同義。

●肉筆画「歌占図」（「新年の歌売り」とも。紙本着色掛物一幅。文政十丁亥正月二日筆始 北斎為一敬画。印 葛しか。124.0×50.5 大英博物館蔵）



※歌占は、和歌を書いた短冊を弓に付けて、客が引いた短冊によって占いをして歩いた者。神の託宣は和歌の形をとると考えられていた。和歌は伝統的なものではなく、民間伝承的な和歌であったという。この図は、伊勢安濃津で客死した世阿弥の長男、観世元雅（1394頃～1432）を題材にしたものとの説あり。手に弓を持ち、和歌を書いた短冊を付けて占いをする狩衣姿の男が立っている図。

1036 歌占図（大英博物館蔵）

●摺物下絵「月宮殿嫦娥之遊 報条」（墨摺。北斎改為一画。森屋治兵衛版。ボストン美術館蔵）

※浅草奥山（浅草寺の裏一帯）の見世物摺物の下画を描く。中央に、雲の上を行く牛車、その脇で、うかれ星（北斗七星か）の形を作って、傘を被って踊る七人。中央下には、糸繰り機械と仙女二人が描

かれる。 1037 月宮殿嫦娥之遊 報条 (ポストン美術館)

●肉筆画「花和尚図」 (文政 6 年～9 年説もある。



「花和尚魯智深図」とも。
絹本着色一幅。葛飾北斎為一筆。印葛しか。105.5×42.4
個人蔵)

※鉄棒を両手で振りあげ、
隆々たる右足を上げ、上半身
裸の男は、『水滸伝』に登場する

僧魯智深である。義賊 108 人の一人。魯智深の友人の暗殺を企てた男
二人を脅かすために鉄棒で松の木をなぎ倒すという『新編水滸伝』初
編卷之八の一場面を描いたもの。図の上には千鳥が三羽が驚いて飛び
去っている。



1038 花和尚図 (『2007 北斎展図録』より転載)

文政11 (1828) 戊子 69 歳 (北斎戴斗老人)、月痴老人為一、(前北斎為一先生)、 前北斎為一写、為一、印一人人形、二人人形：こと (58 歳)、阿栄 (31 歳)、孫 (19 歳)

◇1 月 13 日、狩野芳崖生 (～1888)。

◇4 月 16 日 (西洋暦)、ゴヤ没 (83)。

【シーボルト事件勃発】

◇8 月 9 日、帰国の際、先発したオランダ船が難破、暴風で飛散したシーボルトの荷物の中に日本地図があったことにより、10 月 10 日、シーボルトに日本地図を渡した書物奉行高橋景保ら 38 名が投獄となった。幕府が返還要請したが拒否したため出国停止処分になり、11 月に商館長預かり、12 月に長崎出島に幽閉された。翌文政 12 年 9 月、帰国命令。12 月 5 日、退去となる。

シーボルトは、北斎から直接受け取った『北斎写真画譜』(文化 11 年：1814) や同時期の『北斎漫画 初版』等を持ち帰り、ウイーンとパリの図書館に 4 冊寄付する。これら以外にも北斎の『武器・武具帖』注(東京国立博物館鑑定)があり、北斎の信州小布施行き
の理由として、幕府からの追及を逃れるためという説がある(荒井勉『北斎の隠し絵』)。
注) 『武器・武具帖』：北斎工房の大塚八郎によると推定されている画図帖か。

◇永楽屋東四郎、角丸屋甚助から『北斎漫画』の二編～十編の版木を購入、初編の全部を彫り直して「初編」の文字を入れ、改めて従来の十冊に更に十冊を加えた二十冊とする計画を立てる。その旨を十一編の序文で柳亭種彦が記している。

◇11 月 7 日、本居春庭没 (66)。

◇11 月 29 日、酒井抱一没 (68)。

- ★1・2月頃に川柳の号に「万字」を用いる（『年譜』による。⇒文政6年記事参照）。
- ★1月12日、川柳の会（小舟初会。金成評）に出席、2句詠む（『年譜』による）。
- ★1月28日、川柳の会（王子稲荷奉納額面。綾丸評）に出席、1句詠む（『年譜』による）。
- ★2月28日、川柳の会（吉例相撲武蔵野会。成安評。催主：風松）に出席、2句詠む（『年譜』による）
- ★『柳多留』97編に2句、98編に4句、99編に6句、100編に3句、101編に10句、104編に6句、105編に12句載る（『年譜』による）。

【柳多留 97 編】

☆皮切りといふ面ヲで見る遠眼鏡 卍（宿六心配『謎解き北斎川柳』では「面」。遠眼鏡を除く顔は、灸を据える時のような顔をしている）

☆明德の道捨仮名の拾ひ読ミ 卍（明德の道者が、実は漢文の捨て仮名だけ読んで分かった振りしている）

【98 編】

☆あつたら富士を宿なしの夢に見せ 卍（田中聡『北斎川柳』では文政10年。めでたい富士をあたたら宿なしが夢にみるなんて）

☆留女金剛杖をシャにかまへ 卍（田中聡『北斎川柳』は文政10年。宿の客引き女が修験者の杖を奪い合って客引きをする）

☆アツタラ不二を宿なしの夢にみせ 卍（他者評により前出。但し、表記の異同あり）

☆除夜更てなが雪隠の二年越シ 卍（田中聡『北斎川柳』では文政10年。暮れの長雪隠で年をまたぐ。掛け取り通れか）

【99 編】

☆立ちながらこそ細布ハおつぱづれ 卍（奥州の名産・小さい細布のように立ち仕事では六尺褌が外れる。能因「錦木はたてながらこそ朽ちにけれ けふのほそ布胸あはじとや」を踏まえる）

☆摺子木をぬきたに寺の秋牛蒡 卍（寺では、すりこ木で砧打ちのように秋の牛蒡を 俎 の上で叩いている）

☆皮きりといふ面でみる遠眼鏡 卍（他者評により97編に前出。但し表記に異同あり）

☆附びんの綱わたりする土用干 卍（鬢付け油の匂いがする若妻が、土用干しの綱の前を行ったり来たり）

☆寺の風呂敷にあはれな子もち筋 卍（祝いで使う子持ち筋模様の風呂敷を持って亡き人の供養はあわれだ）

☆御宝紛失と褌 たつねてる 卍（歌舞伎の「だんまり」の仕草同様、自分の褌はどこかと探す風呂上がり。別解：吉原帰りに、夕べの立派なお宝はどこへ行つたと褌が訊ねている）

【100 編】

☆秋の蠅しきりに拝ム蓮の飯 卍（田中聡『北斎川柳』では文政10年。盂蘭盆に備える蓮飯にしきりに手を合わせている秋の蠅）

☆継子ハ寐させぬ礎の片手うち 卍（夜まで寝させずに、砧で重い木槌を片手で打たせる継子いじめ）

☆唐の下女ハルシヤ革ほどひゞがきれ 卍（外国の下女はペルシヤ革の巾着のようにあかぎれているか）

【101 扁】

☆山吹は目の一ツだになくて貸し 卍 (山吹色の小判を貸す金貸しには目のない盲人が多い。太田道灌の故事にある「七重八重花は咲けども山吹の 実の一つだになきぞかなしき」を踏まえる)

☆月並ハ浚ふ天狗に引ク河童 卍 (一般に、天狗は人を攫い河童は池に引きずり込む。お復習いごと三味線など弾くものから始めるが普通)

☆残念だのんしと巴生捕られ 卍生 (巴御前を生け捕ったが「残念だのんし、わちきは女でありんす」と)

☆山吹は目の一ツだになくてかし 卍 (他者評により前出。但し、表記の異同あり)

☆墨壺の口も干上ル下手大工 卍 (下手な大工に仕事がなく墨壺の墨も干上がってしまう。墨壺は女陰の意)

☆瘡森ハ花へかけての願ほどき 卍 (梅毒から守るといふ笠森稲荷に花見にかけて鼻が欠けぬよう願掛けに)

☆兀ツテウ髪なしの月の余しもの 卍 (禿の者は、髪がないので神無月の利益もない余計者だ)

☆御法便蟹の目玉の仕舞い所コ 卍 (蟹の目玉の収め所は、出たり入ったりにより便利よく出来ている)

☆チャンパカと言ふ唐のはげあたま 卍 (意味不明。『年譜』見られる句)

☆真青な人形遣ふ六夜まち 卍 (田中聡『北斎川柳』は「まち」が「待」。正月と7月の26日の月に阿弥陀・観音・勢至の三尊が現れる。その日の酒宴に紺屋の職人が踊り、突き出した指が青い人形のように)

【104 扁】

☆秋津島とんぼてかつぐ関手前 卍 (日本一の吉原の門前まで、前二人、後一人のトンボの籠で見栄をはる)

☆河童の皿に豆蟹の居候 卍 (河童の皿に小さな蟹が居候のように乗っている)

☆つれぐに焼き芋を喰ふよし田町 卍 (場末の本所吉田町の夜鷹は暇に任せて焼き芋を食う。吉田兼好『徒然草』を踏む)

☆山伏の野屎梵字のやうにたれ 卍 (山伏は有難い梵字のような形の野糞を垂れる)

☆土佐駒も附ケ太鼓程たゝいてる 卍 (土佐馬は大きな腹を、大きな鼓のように自分の逸物で叩いている)

☆蛇晝寐煙筒(筒)のやうな欠びする 卍 (蛇が昼寝から冷めて煙筒：円い筒のような大あくびをする)

【105 扁】

☆泥水で白くそだてたあひるの子 卍 (泥水のような岡場所でも田舎娘も垢抜けた遊女に育てられる)

☆龍王の石痲蝟に吸ひださせる 卍 (龍王は結石を蝟に吸い出させる。蝟は遊女のも意味する。「勾踐の会稽の恥」を踏む)

☆龍王の石痲蝟に吸ひ出させ 卍 (他者評により前出。但し、表記の違いあり)

☆百人一首下女さねかづら嘘だく 卍 (「名にし負はば逢坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな」の意味も知らない下女が女性器の陰核を示す「さね」を聞いて、高貴な女性がそんなことを言うはずがない、嘘だ)

☆蔭清くその儘繪がくまどの梅 卍 (蔭さえも清く見える窓の梅をそのまま絵にしたことだ)

☆繰り出して打法蔵寺繩轆轤 卍 (法蔵寺では轆轤に使う縄を繰り出しては打って強くする)

☆人が見たなら蛇になれくすね銭 卍 (くすねた銭を藁縄に通した指し銭を、人が見つけたら蛇だと言え)

☆ヘンペンヒヤヘタ三ツ口のほとゝぎす 卍 (初夏の時鳥がヘンペンヒヤヘタと鳴くのは三ツ口だからか。宿六心配『謎解き北斎川柳』では「ヘッペン」)

☆尻でひり口でまねする鸚鵡の屁 卍 (鸚鵡は尻で屁をひり、口でその音を真似する)

☆梅若の土手を惣太の塩かつお 卍 (梅若忌には梅若を攫った惣太と同じ名の塩漬惣太鯨の切り身で供養)

☆ほんねどふしると松戸の大茂り 卍（「ほんとにどうするの」と松戸の田舎言葉で、松戸の松の大茂りのように情深く言われても）

☆行戻り五百里虎の病ミあがり 卍（一日千里を行く虎でも病み上がりでは往復五百里ぐらいだろう）

【妻こと没す】

★6月5日、後妻こと没す（58歳）。「性善院法屋妙授信女 文政十一年戊子歳 六月五日」と関東大震災前の北斎の墓碑銘にあるという。また、誓教寺過去帳に、施主「川村北斎」とあるという（『年譜』による）。

川村家はこと女の実家で「施主が川村北斎となっているのは、葬式を金銭的に川村家が出したために、寺の方で間違っって川村北斎としたのではないだろうか」（田崎暘之助『浮世絵の謎』p156）という。一方で、川村家は北斎の実家とする説もある⇒宝暦10年条参照。

★本稿では、娘阿栄は文政3年（1820）に南沢等明と離婚としているが、あるいは本年に離婚して、ことの没後北斎と同居したか。⇒文政3年条参照。

【ドラ孫を永寿堂に奉公に出す】

★ことの49日の法要後、一時預かっていた孫を永寿堂（西村屋与八）に奉公に出す。鳶の者になるといって父柳川重信の家を飛び出したドラ孫が北斎の家に住みついていたらしい。「（長女阿美与）この女子のうミたる外孫を、北斎寵愛して養育するか、人と成るに及び放蕩によりてこれを重信に返せしに、鳶の者にならんを欲して、父の家にもあらずなりにき」（曲亭馬琴『後の為の記』「国立国会図書館デジタルコレクション」より）

【『水滸画伝』は北斎の画で売れる】

※『馬琴書翰集成』文政十一年正月十七日 殿村篠斎宛書簡

「水滸画伝著述之事、去冬あらまし得貴意候通り、板元并ニ画工へも意味合有之、其上水滸伝ハ勸懲之為、愚意ニ応じ不申もの故、堅くことわり、繰り遣し不申候。依之、板元英や、高井蘭山ニ訳文ヲたのみ、画ハ北斎ニかゝせ、彫立候よしニ御座候。けいせい水滸伝より通俗水滸伝も引立られ候而、はやり出し候事故、出板候ハズ、画伝も多くうれ可申候半哉と存候。但し蘭山ハ、相識ニなどハ一向疎く、且戯作之才ハなき老人のよし、及承候。この人の訳文、いかゞ可有之哉、心もとなき事ニ候へ共、切落しの見物ハ、文之巧拙ニも斯拘り不申もの、多く御座候故、北斎の画ニてうれ候半と被存候」（読点、ルビは筆者による）

【挿絵は、さすがに北斎なれば評判よろしく】

●読本『新編水滸画伝』二編前帙（1月。五冊。高井蘭山訳。北斎戴斗老人画。英平吉版）

※文化3年刊の『新編水滸画伝』初編では北斎の挿絵を非難した曲亭馬琴であったが、二編の挿絵については褒めている。二編からは馬琴に代わり高井蘭山の翻訳となる。

この年の冬に二編が完成。出版は翌文政12年（1829）正月か。

※同書について翌年の馬琴の感想（『馬琴書翰集成』文政十二年二月十一日条殿村篠斎宛）

「（略）高井蘭山あらはし候水滸画伝第二編、旧冬出板、当早春借りよせ候て、

致一覽候。貴兄ハ未被成御覽候よし。如貴命、画ハさすがに北齋に候へバ、不相替よろしく候。乍去、作者より画稿を出さず、画工の意に任せ、かゝせ候と見えて、とかく画工のらくニ画れ候様にいたし候間、初編にハ劣り候様に被存候。(中略)この出像の巻ハ、さすがに北齋なれば評判よろしく、屹度売れ可申候と存候。出板之節見候て、いよく出来候ハゞ、その所斗求置可申存候事ニ御座候(略)」(読点、ルビは筆者による)

※二編後帙は、天保4年(1833)頃か。

●狂歌本『花鳥画賛歌合』(この頃か。天保年間とする説もある。色摺半紙本一冊。錦鳳堂永雄・春秋庵永女・秋長堂撰。島根県立美術館：永田コレクション/ボストン美術館蔵)

☆〈梅に鶯〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

☆〈桜に雉〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

☆〈藤に燕〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

※七羽の燕が藤をかすめるように飛び回っている。

☆〈垣に鳥〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

☆〈松葉に浅蜷〉(無署名)

☆〈水仙に鴛鴦〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

☆〈鷹〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

☆〈千鳥に枇杷の木〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

☆〈菊花に鳥〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

●絵本『絵本庭訓往来』(前北齋为一写。西村屋与八版〈序文あり〉と永楽屋東四郎版の二種類ある。23.7×16.0 すみだ北齋美術館：ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館/フリーア美術館：ブルヴァー・コレクション蔵)

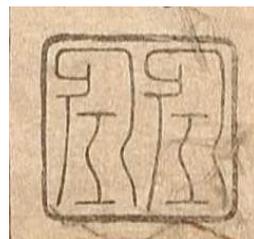
☆初編(秋。『絵入庭訓往来』とも。一冊。墨摺 西村屋与八版)

※初編の六樹園序文に、北齋を「月痴老人」としている。巻末に「画工 前北齋为一写 印二人人形」とある。54図。

1039 初編 西村屋版・奥付と印影：二人人形(立命館 ARC)

☆〈街頭の情景〉

※僧侶、相撲取り、鈴を鳴らす占い師、獅子



舞と足元の犬等が仏師の工房の前にいる。

1040 初編 街頭の情景(日本浮世絵博物館)

☆〈永寿堂の店頭〉

※西村屋の店頭の様子。店頭には侍や婦人、輪を転がして遊ぶ子供の側には犬。「永寿」と染め抜いた大風呂敷の荷物を担ぐ男。山形に



三つ巴の商標や「問屋西村与八」と書かれた大きな箱看板などが描かれる。

1041 永寿堂の店頭（日本浮世絵博物館）

☆合巻（一冊。嘉永3年頃。永楽屋東四郎（東壁堂）版）。

※武家の生活に必要な用語を用いた往復書簡集。僧玄恵作といわれる。北斎は内容に関わらず幅広い図を描く。

●絵手本『盆画独稽古』（文政10か 角書「光悦正流」。初編一冊。淡彩色摺。月花永女作。横本。口絵に为一筆。他に存斎光一筆。17.3×21.3 西村屋与八他版。大英博物館蔵）

※座敷で、女先生の前で盆画で富士山の絵を描く娘の図。盆画は、砂や小石を使って、黒塗りの盆の上に山水などを描いたもの。画中の衝立に四方真顔の狂歌と「为一筆」の文字が記される。後編は未刊。



1042 盆画独稽古（大英博物館） 右：屏風の落款

●絵手本『伝神開手 北斎漫画』初編の再版本（永楽屋東四郎版）袋に「文政戊子春再板」とある（『年譜』による）。

※初編の版木の摩耗による再版で、画中の人物に名前が入る。袋がある。

●教訓書『眼前教近道』（立春。半紙本一冊。六合亭著。無款。永楽屋東四郎版 23.0×15.0。立命館大学 ARC 蔵）

※考証随筆的な教訓書。種々の事物・諸制度の起源や故事、正しい語義等を示し、関連する教訓的な話を添える。漢字かな交じり。（西尾市岩瀬文庫／古典籍書誌データベースより）

1043 『眼前教近道』（立命館 ARC：5丁裏・6丁表）

北斎は5丁裏・6丁表、9丁裏・10丁表の図を画いたか。他の絵は北斎とは思われない。巻末に「文政戊子立春」とある。弘化4年（1847）、銭屋惣四郎版の後摺がある。



●『襲名披露冊子挿絵』（標題不明：中本一冊着色。月痴老人为一筆）

☆〈野馬〉

※二世烏亭焉馬がこの年に襲名披露を行った折に配布した冊子の挿絵。見開きに三頭の馬が描かれ、一頭は横になって嘶いている。

文政12(1829)己丑70歳卅、万字、葛飾前北斎為一老人、葛飾前北斎為一、北斎改為一、(北斎戴斗老人)、先北斎為一、老為一写意、葛しか、ふもとのさと：孫(20歳)。阿栄(32歳)

◇春、永寿堂(西村屋)は三代目与八となる。

◇1月、柳亭種彦、合巻『修紫田舎源氏』(初編)。三代目歌川国貞の絵。

※徳川家斉の享楽生活、大奥の描写説が生じ、天保13年(1842)、38編の刊行後に絶版を命じられる。種彦は200俵取の旗本。本名、高屋彦九郎知久。

◇1月6日、仮名垣魯文生(～1894)。

◇3月21日、神田佐久間町の河岸の材木屋より出火。西村屋を含む下町(日本橋、京橋、芝等)は焼失。江戸芝居三座も類焼。焼死・溺死者など3000人といわれる(己丑の大火。佐久間町火事とも)。『武江年表』では焼死・溺死者1900余人。

※『馬琴日記』には「懇意の版元、つるや・西村や・もりや・山口や・大坂や半蔵等、皆、類焼なるべし」とある(『HOKUSAI 画狂人北斎』緑青VOL2 p35)。

◇5月13日、松平定信没(72)。

◇6月2日、著作取締令。為永春水(風俗壊乱罪)処罰される。柳亭種彦(風俗壊乱罪)も注意を受ける。

◇6月6日、狂歌堂真顔(四方真顔・鹿津部真顔)没(77)

◇7月2日、烏文斎栄之没(74)。

◇7月19日、菅江真澄没(76)

◇9月、シーボルトに帰国命令。12月5日、出帆退去。

◇11月27日、四世鶴屋南北没(75)。

◇12月21日、歌川豊広没(66?)

◇富岡八幡宮裏に小富士建立。

◇11代将軍徳川家斉、百花園注(現向島百花園。東京都墨田区東向島3-18-3)に立ち寄る。注)佐原翰塙が文化元年(1804)に開園した。360本もの梅の木を植えたことから亀戸の「梅屋敷」に対して「新梅屋敷」とも、「花屋敷」とも呼ばれていたが、1809年文化6年(1809)頃より酒井抱一が「梅は百花にさきがけて咲く」といい「百花園」と呼ばれるようになった(「Wikipedia」による)。

【ベロリン藍が輸入され使用される】

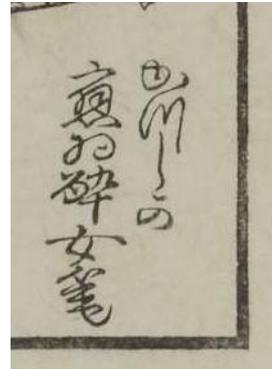
◇この頃よりベロリン藍が輸入され使用される。

◇溪斎英泉、ベロリン藍注で風景画の団扇絵を描く。

注)ベロリン藍：ペルシャンブルー(Prussian Blue)。1704年、ドイツのベルリンで、J・K・ディッペルが発明。ドイツの旧名プロシャからベルリン青(ベロリン青)、ベロ藍と呼ばれ長崎にもたらされた。

○曲亭馬琴、読本『近世説美少年録』刊行開始(天保3年：1832まで。未完)。

○阿栄、『女重宝記』（往来物。大本。高井蘭山著。葛しか応為酔女筆。奥付には「応為栄女筆」とある。大英博物館蔵）



（刊行は弘化4年：1847）を描く。
1044 女重宝記
（大英博物館）
落款（拡大）

★春頃、孫の放蕩の尻拭いに苦しむ。

★1月1日、「さくしやすいこでん」（作者水滸伝）という番付に「葛飾前北斎為一老人」は別格扱いとされる（『年譜』による）。

★8月4日、川柳の会（武蔵野会。魚交評。催主：風松）に出席、2句詠む（『年譜』による）。

★『柳多留』106編に2句、107編に8句、108編に5句、109編に8句載る（『年譜』による）。

【柳多留 106 編】

☆杓子めを摺子木野郎連れて逃げ 卍（飯盛り女を連れて逃げたのは、価値のない摺子木野郎だろう）

☆無理口説キ大根おろしで引こすり 卍（下女を無理に口説いても、嫌な男には大根おろしで引きこする）

【柳多留 107 編】

☆この翁とうくたたり水ッ鼻 卍（田中聡『北斎川柳』は文政11年。能「翁」もたたりと水つ鼻を垂らした。「とうとうたたりたりら。たたりあがりいらりどう」の詞章から）

☆京鹿の子娘ひのしハキイタカく 卍（田中聡『北斎川柳』では文政11年。京鹿の子絞りの着物に皺伸ばしに「ひのし」をかけて「効いたか、効いたか」と言っている。「京鹿子娘道成寺」での「聞いたか、聞いたか」のセリフを踏まえる）

☆浪幕の中ころりと寐左衛門 卍（舞台の後の外した浪幕に寝ている男は、土左衛門ならぬ寝左衛門だ）

☆盆カタくち、、、升てしめ 卍（盆の餌を食べようとした鼠が鼠取りで捕らえられたまでを歌舞伎の下座音楽の音色で表現。チチは鼠の鳴き声。以上は田中聡『北斎川柳』（p76）による）

☆桐山の文字はおかしく書が山 卍（「山」は図案化。桐山三了の書く字は変わった字で「山」もこんな字）

☆血汐の穢れに立去りし淋病 卍（月経の女との交接は淋病を治すという。穢れでもいいこともあるか）

☆千ん人の枕にくい一字命 卍（千人と枕する遊女の「一字命」の刺青は嘘っぱち。「ヒコサマ命」の類）

☆立ちかぬる鑠子へ母のギンオクリ 卍（祇園に勤める長女が未練で立ちかぬるのを、気丈に送り出す母親）

【柳多留 108 編】

☆山吹のかわせに届くかし座敷 卍 (田中聡『北斎川柳』・宿六心配『謎解き北斎川柳』では文政 11 年。山吹が川瀬に届くほど咲いている貸座敷。そこで山吹色の金が届くのを待っているか)

☆背と腹とのあはひに蟹面ヲを出し 卍 (蟹は背と腹の間から、目と口のある顔を出している。宿六心配『謎解き北斎川柳』では「面」)

☆山ノ谷鳴動大イ風雨龍つるみ 卍 (山や谷を揺るがす大風雨は、天空での龍の雌雄の激しい交尾のせい)

☆生国は越中としらみの由緒書 (『年譜』では「生国越中」と。江戸に多い虱の生まれた国は越中禪だった)

☆びんづるのきん玉らしい木魚なり 卍 (つるつる頭のびんずる尊者のキンタマに見える木魚だ)

【柳多留 109 扁】

☆下々反りの鼻で離縁の婿天狗 卍 (鼻の垂れ下がった婿の天狗では離縁されてもしかたがない。宿六心配『謎解き北斎川柳』では「下多反り」)

☆御老躰八十八を御荷ひ 万字 (意味不明)

☆御老躰八十八を御荷ひ 万字 (他者評により前出)

☆狸穴凡夫油揚二枚損シ 卍 (狸は穴が二つあり、物を知らない男は油揚げを二枚あげて「損をした」と。「一を呪わば穴二つ」を踏む)

☆神力に東で四海握り無事 万字 (意味不明)

☆兼好先生御在庵かと伴内 卍 (塩谷判官の妻に懸想した高師直が鷺坂伴内を通して恋文の代筆を依頼する。『仮名手本忠臣蔵』初段を踏む)

☆耳筋が通り兎の器量よし 卍 (鼻筋を通った男前ならぬ、耳筋を通った器量よしの兎)

☆兼好先生御在庵かと伴内 卍 (他者評により前出)

●絵手本『忠義水滸伝画本』(1 月。内題に『百八星誕肖像』とある。半紙本一冊。全 32 丁。見返しには葛飾前北斎為一筆 印ふもとのさと。自序では「葛飾前北斎為一老人 印葛しか」とある。万極堂(英屋平吉)版 22.6×15.5 島根県立美術館:永田コレクション/すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館/東洋文庫蔵)

※改題本『忠義水滸画伝』(刊年未定:永田生慈『北斎 世界を魅了した絵手本展』p 114 による)

※『水滸伝』に登場する 108 人を集める。

☆自序「和漢ノ画図、之ヲ経験スルコト年有リ。元明ノ画最細微ニ画クト雖モ、英雄士ノ形像ヲ画クニ至リテハ、則チ其体自ラ優弱備リ、而シテ未ダ神機ニ及バズ。本朝ノ画ハ則チ田婦女子其体自ラ備ハルト雖モ、剛氣而シテ亦タ未ダ神機ニ及バズ。然レバ則チ元明ノ画、優弱ノ癖有リ。本朝ノ画剛氣ノ癖有リ。之ヲ画学ブ者、焦心殫思益スナリ、指ノ嚮オウコト悲シキカナ。今ヤ愚ヲ去ルコト過ギタルハ及バズ、癖ヲ折衷シ以テ戯レニ水滸伝ヲ画ク。載セル所ノ百八英雄ノ形象、遂ニ一小冊ト為シ、之ヲ梓(版木)ニ鐫ミ弘ク弟子ニ授ケテ、聊カ伝写ノ勞ヲ省クノミ。文政十貳歳次巳丑春正月 葛飾前北斎為一老人」(原文は漢文。訓下し・句読点・ルビ・注は筆者による)

【またまた馬琴の批判】

※「馬琴日記 6 月 21 日条」

「(略)百八人^{ひやくはちにん}像、林冲^{りんちゆう}図像なし。公孫勝^{こうそんしょう}注1羅真人^{らしんじん}注2袈裟^{けさ}かけてをる^と処^{ところ}などいかず。画ハよく出来候へ共、杜撰^{とせ}甚^たし。只一覽^{ただいちらん}に充^あるのミ」(『ピーター・モース・コレクション北斎図録』より。ルビは筆者による)。

注1) 公孫勝：『水滸伝』の登場人物。百八星の一人。修行中の道士。梁山泊の副軍師。

注2) 羅真人：『水滸伝』の登場人物。百八星の一人。仙人に達した道士で、公孫勝の師。

※林冲の画がなく、公孫勝と羅真人が坊主の袈裟を掛けている等、画はうまいが杜撰なもので、たださっと見るだけのものだ、というニュアンス。但し林冲は「豹子頭林仲」として描かれている。『ピーター・モース・コレクション北斎図録』では「馬琴の見落としてであろう」としている。

また、同書では「二仙山に羅真人長生不死(不老か)の法を説」と題して峨々たる山の

景色を描き、羅真人の描写はないとしているが、袈裟を着ているのは別図に描かれている「嗣漢天師 張真人」であるので、馬琴はこの絵を羅真人と見間違えたか。

1045 『忠義水滸伝画本』 嗣漢天師 張真人 (新日本古典籍データベースより)



●狂歌絵本『狂歌列仙画像集』(三冊。五車亭亀山撰。見返しに、画図先北斎為一とある。北斎は一図のみ描く。他に北雅が描く。スミソニアン図書館蔵)

☆〈蝦蟇仙人〉(北斎改为一筆)

※蝦蟇を手に乗せた少年。腰に瓢箪^{ひょうたん}を結びつけている。

●摺物「七里ヶ浜ヨリ腰越ヲ眺望」(老为一写意。色摺。20.6×18.5 すみだ北斎美術館/ベルリン東洋美術館蔵)



※注文主は鹿寿庵蝠麿と穉長堂。図は、牛に乗って煙管を持っている江ノ島参詣の女と牛を牽く子どもの牛飼い。その脇には煙管の筒をこよりで掃除しながら歩いている女がいる。

「我やどは黄がねの亀に鶴が岡 蓬萊山もよそならぬ春鹿寿庵蝠麿」、「江の島を霞もしきる去年ことし 行合川に春や立つらむ 穉長堂」の狂歌が記される。

1046 七里ヶ浜ヨリ腰越ヲ眺望(すみだ北斎美術館)

【新発見の下絵集】

●下絵集『万物絵本大全図』(9月。葛飾前北斎为一老人画 墨絵 各ページ平均 11.2×15.3 大英博物館蔵)

※2020年9月5日読売新聞記事。

「ロンドンの大英博物館は3日、江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎の未公開の下絵約100点を手に入れたと発表した。(略)作品は103点で、1829年に北斎が『万物絵本大全図』という本のために制作した。生き生きとした鳥や人物、風景など様々な絵が描かれたが、

本は未出版となっていた。作品は 1948 年にパリで競売にかけられた記録があり、昨年にパリで再発見されていた。

作品が制作されたのは、妻の死去や体調問題で北斎の創作が滞ったとみられていた時期で、北斎は数年後に代表作『富嶽三十六景 神奈川沖浪裏』などを制作している。大英博物館は『なぜ作品が出版されなかったのかは明らかではないが、北斎の経歴では転機になるもので重要な発見だ』としている（略）」



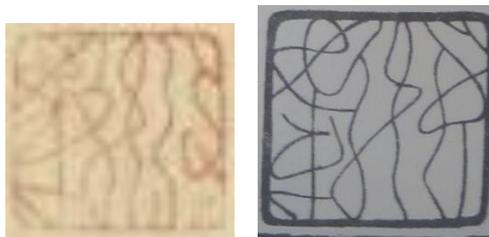
1047 『万物繪本大全圖』 (大英博物館)



【為齋の作画か】

※一方で、「為一」の落款が北斎のものと違っていることや、蓋の裏の、江戸時代にはあり得ないマールペーパーの装飾などから、『為齋画式』二編・三編（未刊）のスケッチを明治の誰かが為齋注の作品を為一に偽装したものとする見方もある（酒井雁高「浮世絵学 04/外題（萬物繪本大全圖）」による）。また、印影「ふしのやま」を「よしのやま」と誤読していることも指摘されている。

注) 為齋：葛飾為齋。1821～1880。北斎門人。本姓：清水。酔桜軒。酔桜楼。『万物図解為齋画式』(1864) など北斎風のスケッチ画を描く。



1048 印影「ふしのやま」

【以下、文政年間】

東都北斎戴斗	北斎為一	万字	北斎改為一席上	前北斎戴斗	前北斎為一
葛飾為一	葛飾前北斎為一	北斎改為一	北斎改葛飾為一	独流北斎為一	東都北斎為一
葛飾為一	葛飾為一老人	独流北斎改為一	一揮写	●●人為一	為一
印：ふしのやま	葛	しか	富士の形	一人人形	二人人形

●絵手本『**絵本両筆**』(文政年間〈1818～30〉)。大本一冊墨摺。人物と鳥獣部分は東都北斎戴斗筆。山水草木部分は浪花立好斎筆。永楽屋東四郎版。国立国会図書館/大英博物館蔵)

※絵本『両筆画譜』名の色摺版もある。文政元年(1818)の俳書『**泔水奇画**』(暮雨巷三世帯梅撰、浪花立好斎、葛飾北斎画)の改摺本『**藐姑射山**』(文政4年:1821)に、さらに狂歌を削り絵本化したもの。

※巻末の丸枠の中に描かれた二人の人物が対座している絵について、『**泔水奇画**』にはない絵なので、改摺に当たって新たに北斎が書き加えたのではという鈴木重三の考察がある(「『**画本両筆**』の巻末図について」)。同氏は、この絵で筆を舐めている人物は北斎自身であるという高橋誠一郎の見解(『**随筆浮世絵**』昭和26年)をも紹介している。



1049『**画本両筆**』巻末図(大英博物館)

●艶本『**會本佐勢毛が露**』(文政10年～13年〈1827～30〉)。十二枚折帖。『**富久壽楚宇**』(文化12年・1815)の書入れを省き、絵の添景と恥毛の毛彫を省略した改板本。恥毛は毛彫の代りに黒褐色の薄いボカシ摺になっているが、全十二図中、三図だけはボカシの上にパラパラと太い毛を肉筆で描いている。これは北斎独自の案出という(『**芸術新潮** 1989年3月号「北斎」特集所収、林美一「北斎艶本への挑戦」)。



1050『**會本佐勢毛が露**』(部分: <https://media.thisisgallery.com/>より転載)

●肉筆画「**牡丹鍋と男**」(文政元年～4年〈1818～21〉)。紙本着色一面。もと掛軸。北斎改葛飾為一筆。印 葛しか 127.3×54.4 フリーア美術館蔵)

※「**野人对花瓶図**」(文化6年～10年〈1809～13〉北斎館蔵)と同趣図。⇒【文化年間】の同図参照。大きな鍋に植えられた牡丹の花を、漁師が片膝を立てて腰を下ろして見上げている図。



●肉筆春画「**春愁図**」(文政年間〈1818～30〉)。絹本着色一幅。無款。個人蔵)

※『**週刊ポスト**』(2020/2/7号)で紹介掲載される(寸法不明)。もとは12図の巻物か画帖であったものが、一枚絵になったものではないかと評論家の言を紹介しているが、真贋は今後の考察を待ちたい。

1051 春愁図(部分:『**週刊ポスト**』2020/2/7号より転載)

●肉筆画「**鶏図**」(文政元年～4年〈1818～21〉)。前北斎戴斗筆。印 葛しか。絹本着色一幅。27.0×35.1 島根県立美術館:永田コレクション蔵)

※雌雄の鶏が寄り添うようにしている。頭と背の羽が淡い朱色、羽先は墨摺で、全体に



つけたて
付立の描法である。文化元年（1804）11月の「鶏図」
（摺物）もある。

1052 鶏図（島根県立美術館：2005『北斎
展図録』より転載）

●肉筆画「**団扇と美人図**」
（文政元年～4年〈1818～21〉）。
絹本着色一幅。北斎為一筆。
印 ぶしのやま。74.0×32.4

個人蔵）

※大きくのけぞって、背中に手を回し帯を結ぼうとする女。着物の
ちりちりの描線と赤い襦袢は應為の特徴とも言われる。

1053 団扇と美人図（<https://bijutsutecho.com/>より転載）



●摺物「**漁師図**」（文政5年～13年〈1822～30〉）。色紙判色摺。
自画賛。酔・万字。20.6×17.4 すみだ北斎美術館/日本浮世絵博
物館/大英博物館蔵）

※「「此春は月のかつらをおるはかり 酔」 「はま砂に面めづらしき嫁菜かな 万字」の



付け句の書き込みがあり、「酔」は応為のもの、「万字」
（卍）は北斎のものであるので、応為が描いて北斎の作品と
したものか。波打ち際の岩に腰を下ろし煙管を銜えて休む漁
師。腰囊を付け、右手に煙草入れを持ち、釣竿を抱えている。
脇には大きな魚籠が置かれている。「自画賛」と画題がある
ところから自画像説があるが疑わしい。

1054 漁師図（日本浮世絵博物館）

●肉筆画「**月下猪図**」（文政3年～6
年〈1820～23〉紙本着色一幅。前北斎
為一筆。印 葛しか。138.4×58.9 ポストン美術館蔵）。

※満月の月光に照らされて雪山をさまよう猪の図。空は琳派の「た
らしこみ」注の画法が使われているという。

注）たらしこみ：俵屋宗達が意識的に用いた画法で、色が乾かな
いうちに他の色を垂らして滲ませる画法。1055 月下猪図（ポストン美術館）

●扇面画「**嵐中茅屋図**」（文政3年～13年〈1820～1830〉）。紙本墨
画淡彩扇面一面。北斎為一筆。印 一人人形注。上弦 49.5、下弦
22.2×17.2 フリーア美術館蔵）

※嵐の中に二件の茅屋が立っている図。

注）一人人形：縦角枠に杖をついた人形の線描が書き込まれた印。

●肉筆画「**七福神図**」（文政6年～7年〈1823～24〉）。北斎一門の
合筆。絹本着色一幅。葛飾為一筆。印 一人人形 49.9×71.3 日本浮世絵博物館蔵）



※北斎は「葛飾為一筆」の落款で人物を描かず、松の老木の枝に兜をぶらさげ、幹に槍を立て掛けて毘沙門天に見立てている。図の右から、(二代)戴斗：前北泉（大黒天）、北秀（恵比須）、北溪（福祿寿）、北山（布袋）、二代目北斎（弁財天）、北岱（寿老人）の7人の門人が描く。

●屏風画「松下群雀図」

（文政元年～4年〈1818～21〉頃。紙本着色六曲一隻。北斎改為一席上。印ふしのやま。85.0×256.0 個人蔵）

※屏風の右から左に掛けて老松の枝が伸び、その下に向かって十数羽の雀が飛んでくる様子を描く。



1056 松下群雀図（「愚意鑿」BINBOU コレクションIIより転載）

●肉筆画「巖頭の鶉図」（「雪中鶉図」とも。文政5年～10年〈1822～27〉。文政10年～天保4年〈1827～33〉説あり。絹本着色一幅。葛飾前北斎為一筆。印葛しか。41.3×71.3 林原美術館蔵）

※岩に止まり首を伸ばして前方を見る鶉。羽の一部は日の光に当たって輝いている。図の左は何も描かず薄い色合いで空の広がりを見せている。



1057 巖頭の鶉図（林原美術館）

●肉筆画「女三の宮図」（文政6年～8年〈1823～26〉。絹本着色一幅。北斎改為一筆。印葛しか。98.4×36.9 個人蔵）

※『源氏物語』「若菜」の巻。蹴鞠を見ていた女三宮の手元から猫が逃げ出し、その手綱で御簾が上がり、柏木に見そめられた場面。

●肉筆画「蓮上釈迦図」（文政6年～9年〈1823～26〉。紙本着色一幅。独流北斎為一揮写。印葛しか。118.1×52.5 個人蔵）

※蓮華座の上に釈迦が線香を手にして、足裏に灸をすえるのか、小首を傾げて座っている。足元の香台には「蓮上しゃか」と画題が描かれている。席画と思われる。

●肉筆画「蟹づくし」（文政9年～13年〈1826～30〉。絹本着色額装一面。北斎改為一

筆。印一人人形。47.6×60.1 フリーア美術館蔵)

※無数の大小の蟹が薄く描かれた水草の上を動いている。手前には甲蟹も描かれる。



1058 蟹づくし (フリーア美術館：すみだ北斎美術館：綴プロジェクト復元)

●肉筆画「豫讓」(文政10年～11年か〈1827～28〉)。紙本着色軸装一幅。北斎為一筆。印葛しか印富士の形。135.7×62.5 個人蔵)



※隆々たる体躯の豫讓が刀を頭上に振りかざしている図。2016/9月のMAINICHIオークションに出品されたもの。落款印は従来「印文不明」とされていたものだが、オークションでは「葛しか」印を以前使用された呼称「天狗印」としている。

1059 豫讓 (モノクロ：ARC所蔵・寄託品 浮世絵データベースより)

●肉筆画「堀川夜討図」(文政5年～8年〈1822～25〉)。文政8年～天保4年〈1825～33〉説あり。絹本着色一幅。北斎改为一筆。印葛しか。106.3×37.6 岡田美術館蔵)



※源頼朝は文治元年(1185)、京都六条堀川の館にいる源義経を攻めた。図は応戦の準備をする義経と刀を差し出す静御前を描く。図の下では、烏帽子と直垂の中に鎧を付けた弁慶が座って刀に手を掛け、前方を睨んでいる。図の上部に国学者の本居大平の歌「鎌倉の松の末枝の山風ぞ いちの谷よりいちはやくして」が書き込まれている。

1060 堀川夜討図 (<http://bluediary2.jugem.jp/>より)

●肉筆画「手踊図」(文政年間〈1818～30〉)。絹本着色一幅。東都北斎为一筆。印二人人形。86.5×32.2 北斎館蔵)

※左足を上げ、袖から突き出した左手を前に差し出し、右手を上を上げて踊る遊女。着物の流れと女の動きがダイナミックに表現される。応為の手が入っているかもしれないともいわれる。

尾崎周道は『北斎 ある画狂人の生涯』で次のように述べている。「片足で立った女の不安定な一瞬をピタリと定めて、いささかの破綻のないのは、「神奈川沖浪裏」にかような不安定の安定であり、しかもその女の健康的な顔は内的な深さをもつものの美を描き(略)」(p167)。

※落款の「為一」「為」は「ゐ」とも読める字体。また、「東都」とあるので、地方からの注文で、北斎の代わりに応為が描き、北斎の著名をまねて北斎画として地方に送られた

ものではないかとの説もある（久保田一洋『北斎娘 応為栄女
集』 p 80）。

1061 手踊図（北斎館）



●肉筆画「蚊帳を吊る美人図」（文政年
間〈1818～30〉。絹本着色一幅。無款。
130.0×42.0 大谷コレクション蔵）
※伝北斎とされるが応為の作か。文化3年
にも「蚊帳美人図」（絹本着色一幅）があ
る。本図は、緑の蚊帳を釣るために紐を鴨
居にかけようと腕を伸ばしている女を描く。
足元には下着と足が覗き、大きな団扇が置
かれている。衾を明けた夜空には月が薄く浮かんでいる。襟元や
襦袢の裾はチリチリに描かれるのは、北斎の特長でもあるが、娘の応
為の特徴でもあり、女性の顔も応為の特徴が顕著である。



1062 蚊帳を吊る美人図（大谷コレクション）

●肉筆画「お福図」（文政5年～10年〈1822～27〉。絹本着色一幅。
北斎改为一筆。印葛しか。87.2×28.0 北斎館蔵）

※草色の大袖を着て、長緋袴を履き、ふっくらした顔で神楽鈴を持ち、
御幣を担いで楽しそうに踊るお福。お福は、天岩戸に隠れた天照大神を
誘い出すために岩戸の前で踊った天鈿女命をモデルとしていて、神楽
や舞踊の神とされる。『北斎漫画』五編〈天白女命〉とほとんど同じ図
柄。

1063 お福図（北斎館）

●肉筆画「母子図」（文政9年～13年〈1826～30〉。着色一幅。为一
筆 印：ふしのやま）



※胸をはだけた豊満な母親
が横坐りで足元にいる芥子
坊主頭の赤子を見ている。
母親は小さな虫籠を持って

いる。2024年5月、国際北斎学会で未公開
図として展示された絵だが真贋の確証はない。

1064 母子図



●屏風絵「海浜富士遠望図」（文政9年～13年〈1826～30〉。紙本着色二曲一双屏風。
葛飾前北斎为一画。印葛しか。各163.2×157.2 フリーア美術館蔵）

※図の手前には海浜の砂が流れるように描かれ、松林の背後に富士が見える。

●摺物「正月料理の器」（文政元年～8年〈1818～25〉。色摺。北斎改为一筆。19.9×
18.1 すみだ北斎美術館蔵）

※鶴や亀や松の絵柄をあしらった黒塗りの器が三つ。その前に黒豆とカタクチ鱒が置か

れ、椀に箸入れが添えられている。

●摺物「寺島法泉寺詣」（文政5年～8年〈1822～25〉）。色摺狂歌。前北斎為一筆。20.5×27.0 東京国立博物館/すみだ北斎美術館蔵・ピーター・モース・コレクション蔵

※向島寺島の法泉寺注1に参詣する人々。「開運金勢大明神」注2の幟と赤い鳥居があり、左の門から参詣に入る婦人たちの図。賛には「金勢へ春はまふてよ（詣でよ）縁遠きおと



1065 寺島法泉寺詣（すみだ北斎美術館）

こ女の中むすふ神」、「庭守かしまんのはなと梅か香の にほひも高き金勢の宮 蜀都園序文」とある。

注1) 法泉寺：現東京都墨田区東向島3-8-1。曹洞宗晴河山法泉寺。

注2) 金勢大明神：本来、現岡山県赤磐市西勢実840にある神社で、男性器を祀り、縁結びや子孫繁栄を願う神社。

●摺物「五歌仙」（文政5年～8年〈1822～25〉）。色摺狂歌。北斎改为一筆。すみだ北斎美術館蔵

※五人の歌仙を描いた、為一期の数少ない美人画。

☆〈月〉（21.2×18.9 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション）

※月を手をかざして見る十二単の官女の図。かぐや姫のイメージか。「朧夜も伊達な姿やたをやめの さて色白な月の丸顔 鷺毛亭筆持」などの狂歌が記される。

☆〈香〉（20.5×18.9 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション）



※十二単の官女が香をきいている図。「はる風にとめ木のかをりさそひ来て きくもゆかしき鶯のこゑ 対山楼坂上高道」、「花ひらの数にひとしき五つ衣 袖にとめ木ハ梅かゝそする 芍薬亭」狂歌が記される。

1066 香（すみだ北斎美術館）

☆〈衣〉（21.0×18.5）

※緋袴を履いた官女の垂髪が床まで届いている。紅の紐がからまる大きな桧

扇が置かれている。千羽亭手踊、芦の屋遊雀、春衣亭袖成の賛が記される。

1067 衣（すみだ北斎美術館）

☆〈桧扇〉（20.9×18.5）

※垂髪の官女が桧扇を持って鳥籠の脇に座っている。流芳清風、聚芳園の賛がある。

☆〈梅花〉（21.0×18.5）



※垂髪すいぱつの官女が、紅の紐の絡まる扇を右手で持っている。脚付きの簀すいの子台こだいに梅の小枝が数本置かれている。

●摺物しりもの「神農」(文政年間〈1818～30〉)。角判色摺。北斎改ちやうこうひだりかため為一筆。彫工左片眼。ウイーン国立工芸美術館蔵)

※薬壺を前に薬草をくわえ、印を結ぶ神農しんのうの姿を描く。同画趣は『北斎漫画』三編にも描かれる。神農は、古代中国の伝説上の天子。人身牛首じんしんぎゆうしゆの姿で、火の徳をもって帝となったので炎帝とも呼ばれる。百草を嘗めて薬草を発見し、農耕を教えたとされるので、江戸時代に漢方医や薬商などが冬至の日に神農祭を行った。

●下絵「疱瘡翁ほうそうおうを懲らしめる為朝ためとも」(文政9年～13年〈1826～30〉)。伝北斎とされる。下絵。紙本墨画。38.3×26.0 英国・個人蔵)

※八丈島たためとも為朝ためともが弓を杖にして疱瘡翁ほうそうおうを馬乗りに押さえつけ、被害を加えないという証書一通に手形を捺させている図。文化8年(1811)の「鎮西八郎為朝図」や弘化2年(1845)の「須佐之男命厄神退治之図」(牛嶋神社旧蔵)の構図に繋がる。

【以下、文政後期～天保前期】

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 十一編』(文政6年～天保1年〈1823～30〉)。半紙本一冊。無款。22.8×15.8 すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション/山口県立萩美術館/フリーア美術館：ブルヴァエラ・コレクション)

※十巻で終了のはずが、好評に応じて出された巻。

※奥付には、永楽屋のみが版元として記され、刊行年なし。この編から初編に続き、実質永楽屋東四郎えいらくやとうしろうの刊行となる。



※二十編まで継続する計画を示しているが、実際には十五編まで刊行された。



1068 北斎漫画十一編

☆口絵：墨・巻物・扇子が描かれ「すみ・ま・せん」をもじり、10編で終わりではないことを断わっている。さらに、寿老人じゆうろうじんの頭に乗った男が筆を持って「新」の字を途中まで書いている。即ち「新北斎漫画」を表している。

【酒を嗜なまず、茶を好まず、絵に似たる絵を書す。真をはなれて真を写す】

☆序文「画論に凝て筆のうごかざるは、医案正しく匙こりのまはらざるにひとし。古人こじんの説を活動し、疾やまいを愈すぞ良医なるべき。されば、画人も亦然り。古法の縛繩ばくじゆうをぬけいで、花はなを画えがはうるはしく、雪ゆきを画えがば寒く見ゆるを、上手じょうずとこそはいふべけれ。其人そのひとは誰だれ。独ひとり此この翁おきなにとどめたり。酒を嗜たしなまず。茶を好このままず、五十年来、画三昧風骨雅致の迹道がざんまいふうこつがちを嫌にげひて、山

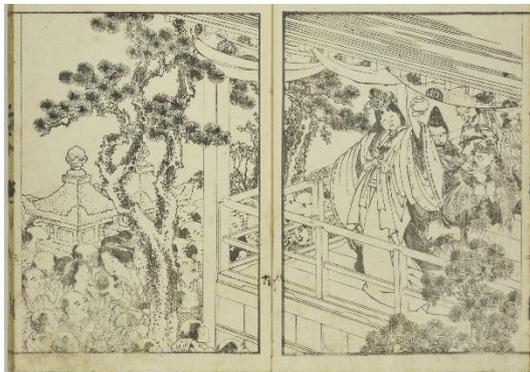
か雲かのわかちも知れぬ絵に似たる絵を書す。真をはなれて真を写し、実に一家の画道を開けり。往る文化その年より意にまかせ、筆に随ひ、何くれとなく画たるを既に十巻刊行なし、か、それにさへ飽たらず、需者しげきにより、翁ふたゝひ筆をくだし漏たるを拾ひて、速に此巻成ぬ。当編を次て甘編をもて全部となすこと近きにあり。嗚呼、老練の奇功、前に勝れて尤興ある絵本になん。柳亭種彦（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎より。ルビは筆者による）

●絵本『繪本女今川』（文政5年～天保5年〈1822～34〉）。後に『北斎女今川』（弘化元年頃：1844 永楽屋東四郎版）に改題される。半紙本一冊。葛飾為一老人画。22.5×15.6 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館/東京国立博物館/フリーア美術館：プルヴァエールコレクション蔵

※貞享4年（1687）て今川了俊の「今川帖」に擬して書かれたものが古く、江戸時代中期以後、同趣の教養本が普及した。北斎もそれに倣い女性の守るべきことを絵で示した教訓本。



沢田きち著『女今川』が女の教養書として



1069 繪本女今川口絵（立命館 ARC より）

●肉筆画「美人と蚩狩図」（文政3年～天保4年〈1820～1833〉）。紙本着色一面（扇形）。北斎改為一筆。印一人人形。16.9×46.3 すみだ北斎美術館蔵

※あやめの絵柄の団扇を持って、萩模様の藍染めの浴衣を着て、蚩狩の人々を思い描いている。図の左上に、蚩狩りをする人々を薄くシルエットで描き、美人の思いを表現している。

●肉筆画「品川御殿山の花見」（文政3年～天保4年〈1820～1833〉）。絹本着色横長判一幅。北斎改為一筆。印ふしのやま。23.1×151.0 北斎館蔵

※横長判の絵。御殿山の上で花見の宴をする人々。左下の眼下には品川の海が広がる。

●扇面画「釣鐘に商人」（文政5年～天保5年〈1822～34〉）。紙本墨画淡彩扇面一面。北斎改為一筆。花押（∞に似る）。上弦46.5、下弦22.6×14.7 フリーア美術館蔵

※北斎の作か疑われる（『2005 北斎展図録』p42）。図は、下ろした釣鐘の前で、荷物を下ろして休む商人を描く。

●肉筆画「軍鶏図」（絹本着色一幅。文政9年～天保5年〈1826～34〉）。前北斎為一筆。印葛しか。134.0×46.4 MOA美術館蔵

※軍鶏二羽の図。手前の雄の軍鶏の肩越しに、雌の軍鶏が挑むような目つきでこちらを見ている。図の上部に笹の葉を墨画風に描いている。

●肉筆画「朝顔に鶉図」(文政 9～天保 5 (1826～34))。絹本着色一幅。葛飾前北斎為一筆。印葛しか。36.5×55.8 大英博物館蔵)



※一羽の鶉の向こう側に、図の左下から右上に朝顔の蔓を描く。背景は金の地潰し。文政 5 年～10 年 (1822～27) にも「巖頭の鶉図」を描いている。

1071 朝顔に鶉図 (大英博物館)



●肉筆画「牧童」(文政 3 年～天保元年 (1820～30))。紙本着色一幅。21.0×29.2 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※髪が豊かな子どもが二人いる。一人は片膝を立てて、一人はうつ伏せになって頼杖をして話し合っている。側に草の入った籠が置かれている。

●肉筆画「潮干狩」(多人数判) (文政 3 年～天保 5 年 (1820～34))。絹本着色一幅。掛幅。前北斎為一筆。印富士の形。掛軸部分 111.5×41.2 北斎館蔵)

※干潟で多くの男女が潮干狩りをしている光景。図の手前では、男が箆を頭上に持ち上げ、もう一人の男は貝の入った箆を抱えるように持っている。水辺に男の子が二人入り、貝を漁っている。そばには三人の女たちが立っている。画面奥の干潟でも多くの人が潮干狩りをしている。図中央に弁財天船の帆か数艘が描かれ、背景には富士山が描かれる。

※北斎は「潮干狩」を多く描いているが、この絵はもっとも人数が多い。

●肉筆画「梅樹図」(文政 11 年～天保元年 (1828～30))。紙本淡彩一幅。北斎為一筆。印二人人形 91.5×28.7 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※たらし込み注画法で漢画風に描かれた梅の古木の所々に咲く白梅。六樹園(石川雅望)の賛には「名木の江南所無は世のたくひ にはのうらにゆひをりの梅」とある。

注) たらし込み：絵の具が乾かないうちに他の絵の具の色をたらず技法。にじみの技法。俵屋宗達に始まり、尾形光琳ら琳派が多く用いた。

●肉筆画「山水図」(文政 3～天保 5 (1820～34))。絹本墨画淡彩一幅。北斎改為一筆。印印文不明。31.1×53.1 フリーア美術館蔵)

※漢画墨画風の絵。入り江の左右の崖の間にある民家の前に小舟が数艘浮かび、遠くの山の頂上付近は薄い藍色が施される。

●肉筆画「南瓜に虻図」(文政 9 年～天保 5 年 (1826～1833))。絹本着色一幅。前北斎為一筆。35.0×54.4。フリーア美術館蔵)

※浅黄の花と薄緑の葉。その上に羽ばたいている虻。全体に墨絵風の絵。弘化 2 年 (1845)

の「南瓜花と虻」とは別作。

●肉筆画「白椿に錦鶏図」（文政元年～天保5年〈1818～34〉）。掛幅絹本着色。北斎為一（?）。印不明。103.0×35.3 ポストン美術館蔵

※頭部が白、腹部が鮮やかな赤、背中が緑の羽で尾羽が鋭く下を向いている金鶏が、白椿が咲いている緑の幹に止まっている。全体に色彩鮮やかな図。金鶏は、中国の岩山や竹藪などに生息する雉子の仲間。

1072 白椿に金鶏図（ポストン美術館）



●肉筆画「六歌仙図」（文政3年～天保元年〈1820～30〉）。絹本着色一幅。縦長判。北斎為一筆。印葛しか。116.0×33.2 個人蔵



1073 六歌仙図 (<https://edo-g.com/>より)

※縦長図面に六歌仙を収めている。上から、正面を向いた大友黒主、後ろ向き（おののこまら）の僧正遍照、左を向いた小野小町、右を向いた在原業平、下を向いた文屋康秀、正面を向いた喜撰法師（ありわらのなりひら）を流れるように収めている。図上部に六樹園（いしかおまきま）の賛が記される。

●肉筆画「水滸伝絵巻」（文政12年～天保5年〈1829～34〉）。絹本一部着色。未完。フリーア美術館蔵

※一枚絵に『水滸伝』の英雄108人を所狭しと描き、人物の側に短冊状の書き込み枠に人物名を記す。あるいは未記入や黒で塗りつぶしもある。人物も着色や無着色がある。文政12年（1829）「忠義水滸伝画本」（すいこでんえほん）（葛飾前北斎為一筆）を典拠にしたもので、北斎を含む数人の作とも見られている（『北斎の肉筆画』p149 青幻舎 2018年）

●屏風絵「十二か月花鳥図」（文政9年～天保5年〈1826～34〉）。

紙本着色六曲一双押絵貼屏風。無款。第一・六扇：146.4×51.8、第二～五扇：146.4×56.5 フリーア美術館蔵

1074 十二か月花鳥図（フリーア美術館：綴プロジェクト複製）



※1月～6月までを六曲にした右一隻と、7月～12月を六曲にした左一隻に仕立てた一双

屏風。1月には木にとまる鶴、2月は梅、3月は狐と蝙蝠、4月は菖蒲、5月には泳ぐ亀、6月は蓮に鷺、7月は鶏、8月は草樹にとまる雀、9月は菊に鴨、10月は紅葉に雉、11月は雁、12月は2匹の小犬等を描く。

●下絵集『未完絵手本版下絵』（文政6年～天保4年〈1823～33〉）。綴本三冊。墨摺。無款。各14.0×21.0 ポストン美術館蔵

※『2019 新北斎展図録』（p336）の解説によれば、後に刻板し、版本とすることを目的とした版下絵を集めたもので、3冊に分けられ、いずれも紙縫で綴じられただけの仮綴で、表紙などを含めると一定ではないが、上冊38丁、中冊25丁、下冊26丁としている。また、版元は西村屋与八ではないかと推測している。詳しくは、永田生慈『ポストン美術館 浮世絵名品展 北斎』（2013～2014）か、同書より抄録した『新北斎展図録』解説（p336）を参照のこと。九曜星や仕事師など、多くのジャンルを扱っている。

●画稿『日本名将伝』（仮題。文政9年～天保5年〈1826～34〉）。画稿三帖。見開き32図。無款。23.5×16.4 ポストン美術館

※各巻の題簽に「北斎画」と墨書され、見返し部分の表から隠された部分に「日本名将伝」、上巻扉に「北斎板下草画」「未夕此図者板ニ不成古今之名画ナリ」と墨書されているという（『2017 北斎一富士を超えて』図録p227）。

『大日本将軍記初輯』の画稿とされる。「義経迫つて船八艘を踊越る」の絵には義経が船から八艘跳びをする姿が動画のようにスケッチされている。

●版下絵『大日本将軍記初輯』（文政9年～天保5年〈1826～34〉）。『日本名将伝』を基にした版下絵だが1図多い33図。無款。28.0×20.0 ポストン美術館蔵

※源頼朝挙兵から奥州合戦迄の源平物だが未刊。

●摺物「鶯宿梅」（文政9年～天保5年〈1826～34〉）。色紙判色摺。前北斎為一筆）

※村上天皇は清涼殿前の梅が枯れたので、紀内侍の家の紅梅を掘り取らせることにしたが、紀内侍は「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へむ」の一首を梅の枝に添えて差し出したので、紀内侍の家の梅の木はそのままとなったという故事からの着想。

紀内侍が梅の木のある庭で、座って右手を持ち上げ、和歌を盆に載せて差し出す図。「花の王に口をあかさで鶯にものをいはする宿の梅枝 春亭服成」の狂歌が、左から右に縦書きで記される。



1075 鶯宿梅 (plaza.rakuten.co.jp より)

●摺物「江の島詣り」（文政5年～天保5年〈1822～34〉）。横中判色摺）。●●人為一筆。19.2×26.5 千葉市美術館蔵

※牛の背に荷物を乗せて江ノ島詣りに来た、揚げ帽子を被った二人の女が浜辺にいる。一人はしゃがんで江ノ島のほうを指差し、一人は立って手をかざして江ノ島を見ている。江ノ島は描かれない。

1076 江の島詣り (千葉市美術館)

●摺物「箱根芦ノ湖の富士」(文政5年～天保5年〈1822～34〉)。色摺句。北斎改为一筆。21.0×18.1 (チェスター・ビューティ図書館蔵)

※富士は輪郭線を用いないカラ摺。雲や砂子部分は金摺、湖面は銀摺で、北斎の木版富士中で最も豪華



な作品といわ

れる。桂花と二橋の句が書き込まれている。

1077 箱根芦ノ湖の富士 (チェスター・ビューティ図書館蔵)

●摺物「紅の玉」(文政9年～天保5年〈1826～34〉)。色摺。北斎改为一筆。19.6×17.6 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵)

※牡丹の絵柄のある更紗の袋からこぼれ出る紅の玉が描かれ、めでたい正月を表す。

賛に「紅の玉なす梅にともなふて ひかりに句
ふ鶯のこゑ 春亭服成」とある。「紅」は賛の語調から「くれない」と読む。



文政13/天保1 (1830/12/10～) 庚寅 71 歳 画をかく坊主、卍、北斎為一、前北斎為一、
七十一翁北斎為一、七十一翁為一、北斎改为一：孫(21 歳)、阿栄(33)

【為一後期 錦絵の時代】

◇天保の大飢饉。

◇天保の改革 (1843 迄)。江戸三座 (中村座・市村座・守田 (森田) 座) が浅草に移される。

◇この頃 (天保初期)、三輪伝次郎 (元武士、山口伝次郎) の藪蕎麦が駒込団子坂に進出 (三輪は親戚の名を継ぐ)。

※江戸後期の蕎麦の値段：二八蕎麦 (16 文=約 400 円、1 文=約 25 円で計算)、あられ (旬の素材を用いる蕎麦)、天麩羅、花巻 (もみ海苔を散らしたかけ蕎麦)、しっぽく (煮込んだ具材を乗せた蕎麦)、玉子とじ、鴨南蛮=24 文～32 文 (約 600 円～800 円)。蕎麦切手 (必要に応じて蕎麦に引き換えることのできる商品札) =216 文 (約 5400 円)。

◇閏3月、おかげ詣り流行。この年、100 万人以上が伊勢参りをしたという。6月20日までの間に 427 万 6,500 人が伊勢神宮近くの宮川の渡しを渡ったという。

◇閏3月24日、石川雅望 (宿屋飯盛・六樹園飯盛) 没 (78)。

◇パリ、七月革命。

◇8月4日、吉田松陰生 (～1859)。

◇9月頃、富突き (富くじの一種。箱の中の札を突いて当たりを決める) が流行。

◇十辺舎一九、文政5年(1822)以来の中風が重くなる。

【どら孫の尻拭いと窮乏生活】

★1月12日、孫を父親(柳川重信)に引き渡し、上州高崎より奥州に連れて行かせて働かせるも、北斎の予想通り途中で逃げ帰る。

※文政13年(天保元年)1月28日の英平吉・英文蔵宛書簡には、「(略)孫の借金の取り立てなどでひどく窮乏していて、2月中旬にならなくては春は来ない」と記している。版元に2月の救済を願っているか。「北斎為一九拜」と書いている。

文政13年(天保元年)1月28日の英平吉・英文蔵宛書簡。

「(略)去春より孫放蕩に付、数々悪法をかゝれ、殊に下品のドラもの、始末屋よりのかけ合等にて、いろく尻をぬぐひ、勘当も度々申出候処、幡随院長兵衛注、折々出現仕、ヤレ、月迫(月末)の、今一応のと、難儀は、老人一人にて、漸々当正月十二日、当人父柳川重信へ引渡し、当時は上州高崎より奥州へ連れ参候得共、今にも余中より逃げ帰り候哉と、末不案心(不安心)に候得共、まづしばらくは、ホット息をつき罷在候、右に付曾我物語之御礼にも不参候。当春ハ、銭もなく、着物もなく、口を養ふのみにて、二月中旬に不相成候てハ、春になりかね候(略)」(『葛飾北斎伝』p228 ルビは筆者による)

この時、孫は21歳ぐらいと思われる。

注)幡随院長兵衛：江戸初期の侠客。町奴の頭目で、講談・歌舞伎で有名。北斎と年代が違うので、ここでは取捌役(借金等の取立て役か)の人をこう呼んだか。

★1月頃、浅草藪の内明王院注内五郎兵衛店に住む。

1月18日の書簡「浅草藪の内、明王院地内家主五郎兵衛店、此頃引越候。画をかく坊主と御尋可被下候。北斎にてハ如何哉」(句読点・ルビは筆者)による。尋ねるときは「画をかく坊主」と言ってください。「北斎」と言っで尋ねるのは控えてくださいといったニュアンス。

注：現元浅草辺にあった明王院であろう。藪の内は「藪之内の馬市」として『新撰東京名所図会』第56編「浅草区之部」其三で次のように紹介している(『風俗画報』増刊 東陽堂。明治41年6月20日刊)。

「藪之内は昔時年毎に南部駒の市を開きし地なりしが。文化元年より止みたるよし此地俗間には単に藪とのみ唱へ居れり」(句読点原文のママ。ルビは筆者による)。

★3月6日、川柳の会(浅草奥山千代田額面会。柳亭評。催主：花菱)に出席、1句詠む(『年譜』による)。

★3月28日、川柳の会(於浅草奥山開巻。柳亭評)に出席、2句詠む(『年譜』による)。

★この頃より天保4年(1833)にかけて錦絵に傾注(風景画家の趣が形成される)。但し、この年は画作は少ない。

★『柳多留』110編に4句載る(『年譜』による)。

【柳多留110編】

☆鳥さしハ生きた雀の帯をしめ 卍(85編に他者評で前出)

☆芋は今喉元あたりろくろ首 卍 (ろくろ首が食べた芋は今喉元あたりか。吉原・三浦屋の遊女、二代高尾太夫の「君は今駒形あたりほととぎす」を踏む)

☆供にやとはれ餌 (紺か。田中聡『北斎川柳』による) の形りになられた 卍 (侍の供に雇われ紺の法被を着た姿になった)

☆亭主ハ麩女房がこぼす水醬麩 卍 (近頃の亭主は麩のように頼りないと女房がこぼすが、お前だって水を含んだ正麩のようだ)

【北溪の絵手本を北斎名で出版】

●絵手本「(北斎)道中画譜」(〈戸塚〉の画中の道標に「文政十三」〈天保元年〉とある。色摺一冊。高井蘭山序。前北斎為一画。永楽屋東四郎(東壁堂)版。大英博物館/国立国会図書館蔵)



1078『北斎道中画譜』(口絵:大英博物館)。右図:程谷・戸塚(メトロポリタン美術館)

※魚屋北溪の狂歌本『狂歌東関駅路鈴』(文政13年:1830)を改題し、北斎画として再摺したもの。

※「東海道五十三次」の各宿駅に沿っているが、絵手本風に描線を主体に描く。〈東壁堂書齋〉として永楽屋の店頭風景に続き、45宿が見開き頁、または半頁、あるいは見開き頁に3宿(袋井・見附・浜松)が書き込まれている。〈〉は見開き頁(一丁の裏表)を示す。

☆〈日本橋〉〈品川〉〈川崎・神奈川〉〈程ヶ谷・戸塚〉〈藤沢〉〈平塚・大磯〉
〈小田原・箱根〉〈三島〉〈沼津〉〈原〉〈吉原〉〈由井・興津〉〈江尻・府中〉
〈鞠子〉〈岡部〉〈藤枝・島田〉〈金谷〉〈日坂・掛川〉〈袋井・見附・浜松〉〈舞坂〉
〈白須賀・二川〉〈吉田〉〈御油・赤坂〉〈藤川・岡崎・池鯉附〉〈鳴海・宮〉〈桑名・四日市〉
〈石薬師〉〈庄野・龜山〉〈関〉〈坂ノ下〉〈土山〉〈水口・石部〉〈草津・大津〉〈京〉

【文政4年に続き落款に年齢を記す】

●下絵集『工藝職人用下絵集』(「下絵帖」とも。色摺。2帖。七十一翁北斎为一筆(前編)。七十一翁为一筆(後編)。13.3×19.7 メトロポリタン美術館蔵)

※根付、目貫、煙草入れの金具など、職人のためのデザイン集。2冊に348図が収められているという(『2019 新北斎展図録』p336)。動物・虫・植物・人物・風俗等、たくみにデザイン化した下絵を1ページに4枚~9枚コマ割りに貼り付けたもの。

●摺物「汐汲み」(3月。大奉書全紙判色摺。「一世一代会」と題されている。北斎改為

一筆。42.5×55.6 東金屋版。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※長唄の唄方である芳村家の家元芳村伊三郎を中心とする常盤津発表会「一世一代会」のプログラムとして作られた摺物という。図の大半が演目と演者の指名で埋められている。謡曲「松風」を基とする歌舞伎舞踊「汐汲」を舞う図。天秤の汐汲桶を担ぎ、花簪を挿した髪に烏帽子を被り、美しい衣裳に腰蓑をつけている。天保期以降摺物は激減している中での北斎晩年の唯一の大型摺物。図の左端に「文政十三年寅年三月」とある。

1079 汐汲み (部分：太田記念美術館)



天保2(1831)	辛卯	72 歳	卅、前北斎為一、七十二翁前北斎為一、北斎改為一、前北斎
印	葛しか、	二人人形、為一、七十二翁、瓢箪の形、ふしのやま、為弋、	みのん：孫
(22 歳)	阿栄 (34 歳)		

- ◇この頃、江戸で、屋台ではない店構えの天麩羅屋ができる。
- ◇1月6日、良寛没 (75)。
- ◇2月、女浄瑠璃禁止令。
- ◇2月、江戸の米高騰ともなう窮民 27 万 8 千余人に施米が 5 月まで行われる。
- ◇4月7日、河鍋暁斎生 (~1889)。
- ◇7月26日、二世森羅万象 (七珍万宝) 没 (70)。
- ◇8月7日、十辺舎一九没 (67)。辞世「この世をぼどりやお暇と線香の煙と共に灰左様なら」。曲亭馬琴は「著作料で生計を立てた最初の人物」と評した。
- 歌川広重、『東都名所』(ペロ藍を使う)。
- ★『柳多留』113 編に川柳 1 句、115 編に 12 句載る (『年譜』による)。
- 【柳多留 113 編】
- ☆白日鼠横町唐の女医者 卅 (横町の唐の女医者は水子を扱うので、「水滸伝」の盗賊・白日鼠のようだ)
- 【柳多留 115 編】
- ☆御寺の方歳年若に御短命 卅 (若死にが増えれば、その法要でお布施が増える。万歳、万歳)
- ☆さうづかのヲツカア撫と二才鬼 卅 (吉原の店先の遣り手は三途の川の鬼だと、青二才の客が言う)
- ☆御膳汗付枕飯六文屋 卅 (一泊二食六文の飯盛宿では、山盛りの飯に箸が刺さって仏前の飯のようだ)
- ☆お寺の方歳年若の御短命 卅 (他者評により前出。但し、表記の異同あり)
- ☆閻王の口へ小僧をおつばめる 卅 (太宗寺の閻王は小児を食べるといふ。悪い小僧は口に入れるぞと脅す)
- ☆誰が為に櫓の春の縁する 卅 (宿六心配『謎解き北斎川柳』では「縁する」。いったい誰のために春の櫓は育つのか)
- ☆張子でも浅草紙の都鳥 卅 (落とし紙に使う安い浅草紙で作った張り子の都鳥でも立派に見える)

☆抜ケと水かける犬さぐら 卍 (宿六心配『謎解き北斎川柳』では「抜ツと」。抜いてしまえと盛りの犬に水を掛けるように、植木の犬桜に水を掛ける。あるいは「バツと水を掛ける」か)

☆気違ひめ行平鍋へみやこ鳥 卍 (江戸の名酒「都鳥」を行平鍋に入れて呑む酒好きの気違ひめ。行平と弟の業平の歌を踏む)

☆はりこても浅草紙の都鳥 卍 (他者評により前出。但し表記の異同あり)

☆下からも屋玉と読と田舎者 卍 (花火は下から上がるので「玉屋」の掛声も下からと読めと田舎者が言う)

☆寄る鞆丸ハ伊勢やの銭田虫 卍 (ケチな伊勢屋は鞆丸の皮膚病・銭田虫まで落とさぬよう禱で締める)

【この年の信州小布施行き・高井鴻山宅に寄宿は疑問】

★『葛飾北斎伝』には、

「天保二三年の頃、信州高井郡小布施村(筆者注：現長野県上高井郡小布施町小布施805-1、高井鴻山記念館)に到り、門人高井三九郎(筆者注：鴻山。1808～83。信州の豪商にして教育家)の家に寓し、居ること一年、遠近、画を請ふ者多し」とある(p134)。

しかし、この頃、高井鴻山は京都にいて天保3年(1832：鴻山24歳)には江戸に出ているので『葛飾北斎伝』の記述を否定する見解がある(岩崎長思『高井鴻山小伝』上高井教育会〈荒井勉『北斎の隠し絵』所収 p82))。『葛飾北斎伝』脚注(p134)でも「このころ鴻山は京都に居るので、誤りとされる」とある。⇒天保13年(1842)条参照(p682)。

※『葛飾北斎伝』(脚注p135)では、高井鴻山は、22歳の時、2度目の京都へ行ったとあり、本文中にも「嘗て京師に学び、岸駒注に就き、画法を学びしが、岸駒一日門生を集めて、謂て曰く、当時京板の画工多しといへども、蓋し我が腕に敵するものなかるべし。唯おそるべきは、江戸の葛飾北斎なりと。三九郎(筆注：高井鴻山のこと)これを聞き、岸駒が門を去りて、江戸に来たり、北斎翁に就き、画法を学ぶ。画名を鴻台(脚注：鴻山の誤り)といふ。後信州に帰り、翁を招きて家に居らしめたり」(p135～136 ルビは筆者による)とある。

注)岸駒：宝暦6年または寛延2年～天保9年(1756・1749～1839)。本名・佐伯昌明。京都の絵師。岸派の祖。

●錦絵「鎌倉 江ノ島 大山 新板往来双六」(この頃か。春。大大判。袋あり。柳亭種彦撰。前北斎為一図。西村屋与八・鶴屋喜右エ門・上州屋重蔵同梓。島根県立美術館：永田コレクション蔵)。

※北斎唯一の双六画(玩具図)。日本橋から江の島、大山までの52箇所(景勝地)を柳亭種彦が選ぶ。

☆〈袋〉(色摺。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※「鎌倉 江の島 大山 新板往来双六 柳亭種彦撰 前北斎为一筆」の表題の脇に、菊・萩・蝶の図柄の屏風、「文政辛卯春 新彫」と書かれた大山参りで奉納する大きな木の納め太刀、「相州鎌倉 風流政子形御櫛所 雪の下」と書かれた袋と櫛が描かれる。「文政辛卯」は文政14年(1831)にあたり、実際には天保2年のこと。袋の裏には柳亭種彦の「誌」と、版元の「通油町 鶴屋喜衛門 馬喰町二丁目 西村屋与八 合彫」の文字が記される。

1080 「鎌倉 江ノ島 大山 新板往来双六」(島根県立美術館)

●狂歌絵本『女一代栄花集』(3月。半紙本一冊。色摺。秋長堂老師・春秋庵婦人両撰。応需七十二翁前北斎為一筆 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※本書には三図のみ描く。

☆〈花見帰りの商家の女房〉

※二人の商家の女房が扇子を振りかざしながら陽気に歩いている行楽帰りの図。二人で持つ細い棒に括りつけた風呂敷には、摘んだ草花が包まれている。供の小僧が傘を持ってつき従う。堤の向こうに桜が咲いているのが薄く描かれる。



1081 花見帰りの商家の女房 (島根県立美術館)

☆〈短冊を持つ婦人〉

※短冊に歌を書こうとして、右手に筆を持っている向こうむきの女。

☆〈藤花〉

●錦絵「百物語」(この頃か。天保4年(1833)説あり。中判揃物。前北斎筆。鶴屋喜右衛門版)

※落款の「前北斎筆」の「筆」の最後が右に跳ね上がる書き方で、これは『富嶽三十六景』の天保2年に描かれた図の落款と同様である。また「しうねん」に「時干応天輔(天保)之革 御正月日待咄」とあり、天保元年は12月10日改元で10日しかないので、刊行は天保2年ことと思われる(『HOKUSAI 画狂人北斎』緑青 VOL2 日本浮世絵博物館 p56 参照)。

※明治26年(1893)、松井栄吉版の複製がある。

☆〈しうねん〉(26.0×18.9 すみだ北斎美術館：ヒーターモースコレクション/日本浮世絵博物館/東京国立博物館/中右コレクション/山

口県立萩美術館・浦上記念館/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※「時于応天輔之革 茂間翁院無嘘信士 空 御正月日待咄」と書かれた位牌と骨壺と卍印のある茶碗に絡みつく蛇を描く。

1082 しうねん (日本浮世絵博物館)



☆〈お岩さん〉 (26.2×18.7 文政 8 年 (1825) 初演「東海道四谷怪談」(鶴屋南北)



を題材にしたもの。ギメ美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館/中右コレクション/島根県立美術館/日本浮世絵博物館/ボストン美術館/大英博物館/ミネアポリス美術館/立命館大学/中右コレクション蔵)

1083 お岩さん (日本浮世絵博物館)

☆〈さらやしき〉 (26.0×18.8 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館/東京国立博物館/中右コレクション/山口県立萩美術館・浦上記念館/ミネアポリス美術館蔵)

※寛政元年 (1741)、大坂豊竹座初演「播州皿屋舗」で知られた話。お菊が皿を割った琴に腹を立てた主人の青山鉄山によつ

て斬殺され井戸に投げ入れられたが、お菊の怨念が井戸の中で皿の数を数えたという物語。図は、井戸から顔を出したお菊の体が皿を重ねるように描かれ、口から煙草の煙のような霊気を吐いている。オデュロン・ルドン「聖アントワヌの誘惑」第一集〈V.それから魚の体に人間の頭アントワヌを持った奇妙なものが現れる〉(1881年 国立西洋美術館蔵)に影響したとされる。



1084 さらやしき (日本浮世絵博物館) 右図：ルドン：(「聖の誘惑」1888) から (国立西洋美術館)

☆〈小はだ小平二〉 (26.1×18.6 大英博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館/日本浮世絵博物館/中右コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/山口県立萩美術館・浦上記念館/ギメ美術館/中外産業株式会社・原安三郎コレクション/ミネアポリス美術館蔵)



※享和 3 年 (1803) の読本「小幡小平二 死霊物語 復讐奇談安積沼」(山東京伝) 参照。初代尾上松助門下の役者小平二が、後妻のお塚とその密夫により安積沼で殺される話。ジャポニズムの一つとして、オデュロン・ルドン『ゴヤ讃』の〈1885 II 沼の花、悲しげな人間の顔〉などにも影響したとされる。

1085 左：小はだ小平次 (日本浮世絵博物館) 右：ルドン：沼の花 (国立西洋美術館)

☆〈笑ひはんにゃ〉 (25.6×18.8 大英博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館/中右コレクション/ギメ美術館/山口県立萩美術館：浦上記念館/日本浮世絵博

物館蔵)



※般若が子どもの首を持ち上げ、左手でそれを指さしている図。鬼子母神を画材にしている。赤子を奪い食う女を諭すため、釈迦が彼女の子を隠したため、子を失うことの悲しみを知った女は、後に子供を守る鬼子母神となったといわれる。

※日本浮世絵美術館所収の図は、瞳の周囲と歯が白と青の交互に塗られている。フリーア美術館には色指定を書き込んだ校合摺がある。

1086 笑ひはんにゃ (日本浮世絵博物館)

【真実の虚構か、虚構の真実か、『富嶽三十六景』】

●錦絵『富嶽三十六景』(秋。横大判揃物。表富士36景〈主にペロ藍や植物の藍による併用摺〉+裏富士10景の全46枚。前北斎為一筆。三代目西村屋与八(馬喰町・永寿堂。富士講の講元)版。以後4年間刊行)

※各図制作年は天保1年～4年の間だが、文化2年条に掲載する。

※江戸から見た富士の図は17景(『芸術街道』VOL.1 花美術館 2009年9月刊 小林忠談)。

※フランスのアンリ・リヴィエールは『富嶽三十六景』に刺激され「エッフェル塔三十六景」を描いている。

1087 アンリ・リヴィエール「エッフェル塔三十六景」1988～92年(川船 オルセー美術館)

※河村岷雪『百富士』(明和4年:1767)の画趣の多くを参考にしたとされる。

※上方の絵師・春婦齋北妙が、「富嶽三十六景」を忠実に写した豆判(天保元年～5年〈1830～34〉。平均8.5×12.2。35点が確認されているという)を描き「北妙写」と署名している。

1087 河村岷雪『百富士』4冊(明和4年:1767 ARC所蔵古典籍データベースより)



【富士36図】(所蔵館記載のない図はメトロポリタン美術館蔵)

☆〈江戸日本橋〉（前北斎為一筆。25.4×37.7 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館・フチコレクション/すみだ北斎美術館/ミネアポリス美術研究所蔵）

※透視図法(三ツ割の法)で早朝の江戸を描く。隅田川の西岸に魚河岸があり、図の下に描かれた日本橋上には魚売りで賑わい、兩岸には白壁の米蔵が並ぶ。遠景に日本橋川に掛かる一石橋、更に向こうに江戸城が描かれる。その背後に、本来ならここからは見えない富士山が見える。



1089 日本橋：2020 年より日本国旅券査証欄図案

☆〈江都駿河町三井見世略図〉（前北斎為一筆。25.8×38.2 メトロポリタン美術館/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/山口県立萩美術館・フチコレクション/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/奈良県立美術館/島根県立美術館：新庄コレクション/アレン・メモリアル美術館：マリエンス・ワース・コレクション蔵）

※富士や家の屋根による二等辺三角形の構図で、屋根より凧を揚げる図。越後屋（三越）は一日千両の繁盛といわれた。この店の大屋根では職人が正月飾りをしている。その動きの先には「寿」の文字が記された凧が揚る。駿河町（現東京都中央区日本橋通室町1～2丁目）には、道の両側に「現金 無掛値」の看板のある越後屋があった。

1090 江都駿河町三井見世略図：2020 年より日本国旅券査証欄図案

☆〈東都駿台〉（北斎改為一筆。26.5×38.4 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/江戸東京博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/山口県立萩美術館・フチコレクション/すみだ北斎美術館/島根県立美術館：新庄コレクション蔵）

※駿台は、現在の東京都千代田区神田駿河台。中央に神田川の支流と思われる川が流れ、その岸边から左側の坂にかけて人が往来している。その地点から武家屋敷のある駿河台を見る図。遠景に富士が描かれる。

1091 東都駿台



☆〈東都浅草本願寺〉（前北斎為一筆。25.2×36.5 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/江戸東京博物館/田記念美術館/すみだ北斎美術館/山梨県立博物館/MAO 美術館/山口県立萩美術館・フチコレクション/太田記念美術館/大田区立龍子記念館/東京国立博物館/島根県立美術館/北斎館/ホノルル美術館蔵）

※浅草本願寺は、浅草の東本願寺(現東京都台東区西浅草1-5-5)で、大屋根の上には五人の瓦職人が作業をして、そこからの視点で左側の街並みを低く描いている。家並の間には材木を高く組み合わせた建造物が描かれ、低い位置の町から鳶凧があがり、その中空の位置は大屋根の高さとなっている。



1092 東都浅草本願寺

☆〈深川万年橋下〉(北斎改為一筆。25.1×37.1 メトロポリタン美術館/島根県立美術館:新庄コレクション/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/太田区川端龍子記念館/山口県立萩美術館・チチコレクション/東京国立博物館/北斎館/ホノルル美術館蔵)

※太鼓橋風の万年橋の橋下の低い視点で遠くの富士を望み、橋上の人々を見上げる構図。橋下を通過する船や、橋下で釣りをする男も描かれる。万年橋は現東京都江東区常盤1丁目と清澄1丁目との間に流れる小名木川に架かる橋。小名木川河口の隅田川の向こうに富士山が見える。『洋風景画シリーズ』(文化元年~4年)の「たかはしのふじ」も同じ構図で描かれた。河村岷雪『百富士』中の〈橋下〉の画趣の影響が強い。



1093 深川万年橋下

☆〈五百らかん寺さざめどう〉(前北斎為一筆。25.4×37.3 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/大英博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/すみだ北斎美術館/山口県立萩美術館・チチコレクション/プルヴェラー・コレクション/ライデン国立民族学博物館/島根県立美術館:新庄コレクション/ミネアポリス美術館蔵)

※羅漢寺の展望台から富士を見ている図。羅漢寺は江戸・本所五つ目の大島村(現東京都江東区大島3-1-8)にあり、写実的な五百羅漢像を安置していた。三階建ての螺旋状の栄螺堂(正式には三匠堂)があり、富士を見る展望台もあった(小林忠『浮世絵ギャラリー2 北斎の美人』)。その後、明治42年に五百羅漢寺は目黒区に移転した(現東京都目黒区下目黒3-20-1)。元の地には奥多摩の曹洞宗祥安寺が移転し羅漢寺と改称したという(現東京都江東区大島3-1-8)。

図は富士を望む男女や子ども、右には荷物を背負った行商の男女が疲れたのか座りこんでいる。遠くの豎川の材木置き場と思われる先に富士がみえる。なお、本図の画題を「さざめどう」と表記しているのは誤り。



1094 五百らかん寺さざめどう

☆〈青山円座松〉（北斎改為一筆。25.1×37.0 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館/山口県立萩美術館/山梨県立博物館/MAO 美術館/東京国立博物館/江戸東京博物館/北斎館/大田区川端龍子記念館/島根県立美術館/ホノルル美術館蔵）

※笠松と呼ばれる青々とした巨松の葉が広がり、右手前の坂の上では三人の男が酒宴を催している。松の向こうに雄大な富士が描かれる。この松は、実際には芝・増上寺の「円座の松」との考察があるが（有泉豊明『楽しい北斎の 富嶽三十六景 富嶽百景 動植物画 他』目の眼 P29）、「青山」を画題にしているところから、青山の龍岩寺（現東京都渋谷区神宮前2-3-8）の松を意識していると思われる。図左の松を支える杭から掃除人の足が見える。



1095 青山円座松：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈隠田の水車〉（前北斎為一筆。26.0×38.5 メトロポリタン美術館/大英博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/東京富士美術館/千葉市美術館/島根県立美術館：新庄コレクション/江戸東京国立博物館蔵）

※田園を背景に、玉川上水の分流に掛けられた大きな水車が小川の流に任せて回っている。地元産の小麦や蕎麦を粉に挽いた。その前で亀に付けた紐を手にして母親に語りかけている子ども。籠に入れた野菜を小川で洗う農婦。小川の向こうでは大きな袋を担いで坂をのぼって来る二人の男など農民の生活が描かれる。現東京都渋谷区青山・神宮前辺りの田園風景といわれる。この辺りには低地には渋谷川が流れていた。高台に描かれた水車の上から水が流れて車を回す画図は、北斎の虚構とされる。



1096 隠田の水車：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈下目黒〉（前北斎為一筆。25.8×38.6 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/島根県立美術館/アレ・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵）

1097 下目黒：2020年より日本国旅券査証欄図案

※図の両脇に高台を描き、右の高台には空に伸びる松、左の高台を登る農夫。中央の低地には農作業をする人々が描かれる。中央には二人の鷹匠が立って



いる。近くの上目黒には、鷹匠の目付役の家があったという。富士の見える下目黒の行人坂からの富士山ではなく、場所が特定できない農村からの風景としている。

☆〈下目黒：校合摺〉（横大判。前北斎為一筆。27.5×37.6 太田記念美術館蔵）

※校合摺が一枚残され、それには朱筆で夏雲が描き加えられている（太田記念美術館蔵）。

（『名品揃物浮世絵8 北斎I』解説、及び『北斎美術館2 風景画』P64）。

※〈甲州三島越〉の校合摺同様、青色系統の彩色の部分に朱色で手彩色している。

☆〈礪川雪ノ旦〉（前北斎為一筆。26.3×38.8 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/大英博物館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/大田区龍子記念館/文京ふるさと歴史館/東京国立博物館蔵）

1098 礪川雪ノ旦：2020年より日本国旅券査証欄図案

※「三十六景」中、唯一の雪の風景。礪川は、現文京区小石川一帯をいうが、牛天神（現北野神社）

東京都文京区春日1-5-2)にあった茶屋からの風景を描く。降雪の翌朝、一面の銀世界を高台の座敷で男女がくつろぎながら景色を眺めている。遠景の空

には鶯が三羽羽ばたき、その下には雪を抱いた富士が見える。画面左端の部屋では男が二人談笑している姿が小さく描かれる。台地に流れる川は小石が多く「礪川」と呼ばれた。すなわち礪（小石）の川である。



☆〈御厩川岸より両国橋夕陽見〉（前北斎為一筆。26.0×38.6 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/大英博物館/山口県立萩美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館/すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館/島根県立美術館蔵）

※御厩河岸（隅田川西岸の浅草に幕府の馬小屋があった）の渡しは、現東京都墨田区本所1丁目辺と台東区蔵前2丁目辺を結ぶ船をいう。夕暮れの浅草の御厩河岸から対岸の本所

へ向かう渡し船に、按摩や武士、背中の風呂敷には永寿堂の定紋（山形に巴紋）が染められた物売り、舟端から手を伸ばして手拭を洗っている男、長い鳥さし棒を立てている男などが乗っている。鳥さしは、鳥さし棒の先につけた鳥もちで鳥を捕まえ、生きていけば「離し鳥売り」に売り、死んでいけば食用として御鷹係に売るそうである（平凡社『浮世絵八華5』）。



1099 御厩川岸より両国橋夕陽見：2020年より日本国旅券査証欄図案

画面中央から左にかけて両国橋が流れるように描かれ、その背景には夕方の藍色の富士山が小さく描かれる。渡し船の脇に停められているもう一艘の船尾から手を伸ばして洗濯

している女もいる。船の中央に乗る鳥さしの垂直に立てた棒が画面のアクセントになっている。渡し船は、「富士見の渡し」ともいわれ、町人2文(約50円)、武士は無料であったらしい。

☆〈隅田川関屋の里〉(前北斎為一筆。25.4×37.9 メトロポリタン美術館/大英博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/北斎館/山口県立萩美術館/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/島根県立美術館蔵)

※関屋の里は、寺島村辺から千住河原辺(現東京都足立区千住仲町から千住関屋町付近)までの隅田川一帯をいう。隅田川を挟んで北側が足立区、南側が荒川区となる地で辺鄙な地であった。田の中の曲折する盛り上がった土手のような道を三頭の馬に乗る武士が疾駆する。早馬のようである。道の途中には一本松があり、遠くには赤く染まる富士。右には高札が描かれる。中央の武士の羽織の赤、富士の赤、松の赤とが強調される。

北斎は「早駆け」(シボルト・コレクション:文政9年条参照)「武士の乗馬」(フランス国立図書館:文政9年条参照)でも乗馬図を描いている。

※校合摺がある(島根県立美術館:永田コレクション蔵)。



1100 隅田川関屋の里:2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈武州千住〉(北斎改為一筆。25.4×37.8 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立美術館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館・チコチンコレクション/すみだ北斎美術館/島根県立美術館:永田コレクション蔵)

※千住は日光・奥州街道の第一番目の宿場だが、作品はそこから少し離れた荒川の水門わきが描かれる。笠を被った馬を牽く男が、遠景の富士を眺めている。あるいは釣りの様子を見ているのか。その側では釣竿をかざしている二人の男が描かれる。千住は味な千住鮎で有名。

1101 武州千住



☆〈武陽佃島〉(前北斎為一筆。25.0×37.3 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立美術館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/北斎館/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション/山口県立萩美術館・チコチンコレクション/東京国立博物館/ホノルル美術館蔵)

※佃島は、摂津国佃村の住人が移り住んだ漁師の村で、現在の東京都中央区佃一帯を指す。富士を望む江戸湾の佃の小島の周囲で荷を運ぶ舟、渡し船、乗り合いの釣り舟、魚を獲る小舟などが淡い藍色を基調に描かれる。図の前面には和船が大きく描かれる。海路で江戸に運ばれた荷物は佃島辺りで小舟に積みかえ各河岸へ陸揚げした。人家の密集した佃

島を小さく描き、その左に樹木の繁った中の家並みの石川島を描いている。図の上部は一文字の藍の暈し、図の下部の海も藍の暈しとなっている。

なお、本図は、天保2年(1831)の西村屋与八の広告に「・・佃島眺る景など・・」とあることから、ほぼ天保2年に描かれたとされる(『名品浮世絵揃物8 北斎I』解説)。



1102 武陽佃島

☆〈上総ノ海路〉(「かずさのかいろ」とも。前北斎為一筆。25.3×37.8 メトロポリタン美術館/太田記念美術館/山口県立萩美術館・チココレクション/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/日本浮世絵博物館/大田区龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館/大分県芸術会館/アレ・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵)

※二艘の五大力船が風を帆に受け、浦賀水道から房総方面に向かっている。円みを帯びた水平線のかなたに小さく富士を描く。五大力船は江戸湾内で米や薪炭などを積んで航行した。特に江戸日本橋本船町の河岸から上総国木更津の間の貨客輸送は、特に木更津船と呼ばれた。その名は五大力菩薩から取られ、仏教国を守る憤怒顔をした五人の菩薩のことで、海難を避けるためこのように言われた。日本で

は邪を除く菩薩として、封書の封じ目に「五大力」と書くと邪が入らないといわれ、また、女性の持ち物に「五大力」と書いて貞操を守る誓いとした。この図の船は弁才船(廻船の一種の大型帆船)という見方もある。



1103 上総ノ海路：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈登戸浦〉(前北斎為一筆。26.2×38.4 メトロポリタン美術館日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館・チココレクション/日本浮世絵博物館/蔵)

※「登戸浦」の画題から、登戸は、現千葉県中央区登戸市の海辺であったと考えられる。いくつかの『北斎展図録』では横中判洋風画シリーズ(文化初年)「ぎゃうとくしほはまよりのぼとのひがたをのぞむ」と「のぼと」と読んでいる。当時は江戸湾の港町であった。画中の二つの鳥居は登渡神社(現千葉県千葉市中央区登戸3-3-8)や稲毛浅間神社ともとされる。潮干狩りをする漁夫や、その女房や子供たちを描く。手前の大きな鳥居の向こうに小さな富士が見える。



1104 登戸浦

☆〈常州牛掘〉(前北斎為一筆。26.0×38.1 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/MAO 美術館/中右コレクション/江戸東京博物館/

東京国立博物館/ベルリン東洋美術館/山梨県立博物館/山口県立萩美術館：チチンコレクション/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/ホノルル美術館/北斎館/島根県立美術館蔵)

※霞ヶ浦に面した茨城県行方郡牛堀町で、鹿島や銚子に向かう船が行きかかったという。岸边に苦舟が、岸に後ろ部分を隠して大きく描かれ、船の縁から食事の米を研いだ水を流している男の図。牛堀の水面が富士山の背後にまで描かれているので、実際の富士山ではなく富士塚を描いたものという説がある（有泉豊明『楽しい北斎の富嶽三十六景 富嶽百景 動植物 他』（p117）。



1105 常州牛堀：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈神奈川冲浪裏〉重要美術品（北斎改为一筆。25.7×37.9 メトロポリタン美術館・ハヴマイヤ・コレクション/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/太田区川端龍子記念館/東京国立博物館/北斎館/大英博物館/ホノルル美術館/アメリカ議会図書館/ウイスコンシン大学マディソン校/ハーバード大学/シカゴ美術館/ミネアポリス美術館/ボストン美術館/すみだ北斎美術館/ギメ美術館/島根県立美術館：新庄コレクション/山口県立萩美術館/MOA 美術館蔵)

※伊豆や安房から魚や野菜を江戸に運んだ押送り船が江戸から戻るところといわれる。但し、押送り船は、帆と艀の并用の船であり、この図の船には帆が見えないため、むしろ八人による櫓だけで漕ぐ八丁櫓船の変形とも思われる。そのため小さな船が巨大な波に翻弄される様子が印象付けられた。船はそれに耐えて、波の反り上がりに合わせるように描かれ、乗船者はただ自然の荒々しさにこらえているような様子である。デフォルメされた波の構図は、フランスの印象派などの絵画に「ビッグ・ウエーブ」と称され、影響を与えた北斎の代表作として有名な作品。

※ゴッホは弟テオに送った手紙で「神奈川冲浪裏」について次のように語っている。

「君は北斎を見て『この波は爪だ、船がその爪に捕らえられているのを感じる』と手紙に書いていたが、北斎もまた君におなじ叫びをあげさせたわけだ。もちろん、北斎はその線と素描とによってだがね。

もしたただ正確な色彩とか、ただ正確な素描とかで描いただけならば、そうした感動を引き起こさないだろう」（『ゴッホの手紙』中（テオドル宛）P220 碓伊之助訳。岩波文庫）

ゴッホはここで写実を越えた美の感動を示している。影響を受けてゴッホは「星月夜」を描いたと言われる。また、ドビッシューは「交響詩 海」（1905）の初版楽譜の表紙に〈神奈川冲浪裏〉をデフォルメした絵が使われていることは有名である。また、クリストガードレッサーの錫釉を用いたファイアンス陶器「波型鉢」や、カミーユ・クローデルのブロンズ像「波」などにも影響を与えている。

本図は、「凱風快晴」「山下白雨」とともに『富嶽三十六景』の三役と称せられる。



ゴッホ「星月夜」(1889)
 ニューヨーク近代美術館)

1106 神奈川沖浪裏：2020年より日本国旅券査証欄図案 トビッシー「海」楽譜表紙(1905)

※小林一茶の俳句「なの花のとつぱづれ也ふじの山」(文化9年：1812『七番日記』二月条)とよく比較される。神奈川沖の向こうの富士山と、千葉の菜の花畑の向こうの富士山を描く遠近法。北斎と一茶はほぼ同時代であるのでお互いの存在は認識していたかもしれないが、制作年代からして一茶の句が影響したとは考えにくい。

※浮世絵は、初摺 200 枚といわれるが、〈神奈川沖浪裏〉は増刷 8000 枚の大ヒットといわれる。

☆〈武州玉川〉(北斎為一筆。24.8×36.7 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館/山口県立萩美術館・コレクション/オーストリア応用美術館/すみだ北斎美術館蔵・ピーター・モース・コレクション/ミネアポリス美術研究所/島根県立美術館蔵)

※落款の「北斎為一」は「北斎改为一」の「改」が脱落したものとされる。画面は、手前の岸边、中央の波打つ川、遠景の富士というように、画面を上中下に三分割された構図が特徴的である。手前の岸边の上方からの画家の視線で描く。岸边に行く馬を牽く農夫はその視線の下に低く描かれる。川は空摺で、船頭が竿を挿す一艘の船。三層の構図の上には、横に裾を広げる富士の図。川の向こう岸から富士山の裾にかけて白いすやり霞が描かれる。府中宿と日野宿の間の多摩川風景といわれる。



1107 武州玉川

☆〈東海道程ヶ谷〉(前北斎為一筆。24.6×37.1 メトロポリタン美術館太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館/山口県立萩美術館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/東京国立博物館/北斎館/日本浮世絵博物館/ミネアポリス美術研究所/蔵)

※保土ヶ谷は日本橋から四番目の宿場。本図は品濃坂とも権太坂であるとも。駕籠に乗る女旅人、馬に乗る旅人、逆方向に行く虚無僧など、いかにも東海道の要所らしい図。八本の松並木の向こうに富士が描かれる。馬の背の布に版元の永寿堂(西村屋与八)の「寿」が描かれる。八本の細く、ほぼ垂直に伸びた松の幹の向こうに風を見る構図は、サンティアゴ・ルシニョールの「丘」(1892年、油彩 73.5×100.5 バルセロナ・カタルーニャ

国立美術館蔵) や、クロード・モネ「陽を浴びるポプラ並木」(国立西洋美術館:松方コレクション蔵)に影響したといわれる。

1108 東海道保土ヶ谷

☆〈相州七里浜〉(前北斎為一筆。25.3×37.3 メ

トロポリタン美術館/大英博物館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/山口県立萩美術館/日本浮世絵博物館/東京国立博物館/北斎館/千葉市美術館/島根県立美術館:新庄コレクション/ホノルル美術館蔵)

※人物が描かれない図。左に入道雲、背景に雪を被った富士、中程に描かれた青々とした木々の配置から、季節の違いを疑問視するむきもあるが、問題にする必要はない。七里ヶ浜は、鎌倉の稲村ヶ崎から腰越の小動岬に至る浜辺だが、江の島に至る砂浜は描かれず、江の島も緑の木に覆われたように描かれる。



1109 相州七里浜

☆〈相州江の島〉(前北斎為一筆。25.4×37.6 メトロポリタン美術館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/山口県立萩美術館/東京国立博物館蔵)

※江の島は弁財天信仰の地としてにぎわったという。現在のように橋はないので舟で行くか、引潮時に歩いて渡った。弁財天に向かう人々が干潮で浮き出た砂州を片瀬海岸から歩いて渡る図。水際は点描により描き、光の反射を表現したものか。

〈相州七里浜〉と違い、江の島の典型的な描き方となっている。図の右に雪を被った富士が描かれる。

1110 相州江の島:2020年より日本国旅券査証欄図案



☆〈相州梅澤左〉(前北斎為一筆。25.6×37.8 メトロポリタン美術館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/東京国立博物館/北斎館/大英博物館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/山口県立萩美術館・チコチンコレクション/日本浮世絵博物館/アレク・メモリアル美術館:マリーエイズワース・コレクション蔵)

1111 相州梅澤左:2020年より日本国旅券査証欄図案

※「左」は「梅澤庄」または「梅澤在」の誤刻であろうという見方が有力であるが、曖昧に、その辺りを示す「左」でもよいとする見方もある。現在の神奈川県二宮町内にこの名があり、ここを描いたものとされる。手前に4羽の鶴が群れていて、空には2羽の鶴が飛んでいる。

手前に矢倉山、その向こうに薄紅色を持つ左右のすやり霞を通して富士が描か



れる。全体に藍の色調で統一される。人物の描写はない。

☆〈相州箱根湖水〉（前北斎為一筆。25.3×38.0 メトロポリタン美術館太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館：チココレクション/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/蔵）

※芦の湖を描く。人物は描かれないので、静寂感がある。箱根山や湖には薄紅を含むすやり霞で覆い、背景に白色だけの富士を描く。図の右には箱根神社が描かれる。

1112 相州箱根湖水：2020年より日本国旅券査証欄図案



☆〈甲州三島越〉（前北斎為一筆。25.3×37.6 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館

/MAO 美術館/江戸東京博物館/東京国立博物館/北斎館/大英博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション/山口県立萩美術館・チココレクション/島根県立美術館/オーストリア応用美術館/ミネアポリス美術館/ホノルル美術館/アレクサンダー・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵）

※三島越えは、籠坂峠から御殿場を通り三島へ抜ける道をいう。中央に描かれた杉の巨木の太さを手を広げて測る三人の旅人。その脇を下っていく人たちの図。巨木の左右に富士の両裾にかかる雲や頂上にかかる笠雲が印象的。

籠坂峠には、この様な巨大な杉はなく、実際には、近くの笹子峠の矢立の杉を描いたものという通説があるが、山梨県富士吉田市の富士浅間神社の太郎杉という説もある（有泉豊明『楽しい北斎の富嶽三十六景 富嶽百景 動植物画 他』P134）。

また、七代目三階屋仁右衛門（筆者注：甚右衛門とも）による『駿河国新風土記』（文化13年）の記事「駿甲ノ境ハ元禄十五年壬午年、両国ノ境ヲ定（中略）駿州須走村・甲州山中村ニテハ両村ノ間籠坂峠、往還ヨリ天神峠、天神ノ神木桧古木ヨリ富士山頂中墨（筆者注：中心線）ヲ見通シ境トス」を引き、籠坂峠の南の天神峠にある「桧古木」の御神木を以て駿河と甲斐の国境としていたので、この天神の神木からみた富士を描いたとする説もある（大高康正編『古地図で楽しむ富士山』p65 風媒社）校合摺は太田記念美術館蔵。



1113 甲州三島越：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈山下白雨〉（北斎改為一筆。25.7×37.4 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/北斎館/大英博物館/太田記念/太田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館/神奈川県立歴史博物館/島根県立美術館：新庄コレクション/山梨県立博物館/江戸東京博物館/山口県立萩美術館・チココレクション/ギメ美術館/オーストリア応用美術館/MOA 美術館/ホノルル美術館/アレクサンダー・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵）

※「^{びがいふうかいせい}凱風快晴」「^{かながわおきなみうら}神奈川沖浪裏」とともに『^{とみだけさんじゅうろっかい}富嶽三十六景』の三役といわれるもの。俗に「黒富士」と呼ばれる。富士山頂には雪が被り、空は快晴であるが、中腹は暗茶色となり雷の稲妻が鋭く光っている。富士の自然の変化をとらえた図。静岡県富士宮・^{ふじのみや}白糸の滝方面からの富士といわれる（NHK「^{しらいと}偉人たちの健康診断」〈天才の脳 北斎〉2018年4月放映より）。



1114 山下白雨：2020年より日本国旅券査証欄図案



1115 山下白雨：変わり図

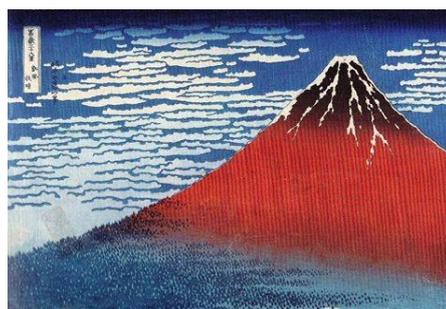
作者・制作年不詳の「変わり図」では、下部に松林が描かれているものもある。

☆〈^{びがいふうかいせい}凱風快晴〉（北斎改为一筆。25.4×38.0 メトロポリタン美術館/ギメ美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/江戸東京博物館/北斎館/東京国立博物館/大英博物館/太田記念美術館/太田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館/島根県立美術館：新庄コレクション/ホノルル美術館/東京芸術大学芸術資料館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/ケルン東洋美術館/MAO美術館/東京国立博物館/オーストリア応用美術館/MOA美術館/アレ・メモリアル美術館：マリ・エイズ・ワース・コレクション/山種美術館/アダチ伝統木版画技術保存財団蔵）

※いわゆる「^{あかふじ}赤富士」と呼ばれる作品。^{かわぐちこ}河口湖から見た富士といわれる。富士が赤く染まるのは夏から秋にかけてであるという。この図もフランス印象派の画家たちに影響を与えたことで有名。「^{さんかほくう}山下白雨」とともに富士山そのものの存在を前面に出した作品で、当然、人物の描写はない。山肌には版木の木目跡が見える図が初摺に近い。後摺は富士の赤の色合いが濃いものや、^{やますみ}山裾の木々が潰れていたりするものも多い。



1116 凱風快晴：2020年より日本国旅券査証欄図案 ギメ美術館蔵（初摺）ヴァクトリア・&アルバート美術館蔵（後摺）



※藍摺の流行で、「青富士」も摺られたが、不人気で早々に摺止めとなっらしい。

1117 茂木本家美術館（青富士）



〈駿州江尻〉（前北斎為一筆。24.2×36.2 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/東京国立博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/北斎館/江戸東京博物館/大英博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館/山口県立萩美術館/太田記念美術館/ギメ美術館/東京富士美術館/ホノルル美術館/島根県立美術館：新庄コレクション/オーストリア応用美術館蔵）

※江尻は興津から一里ほどの所（現清水市付近）。この図は姥ヶ池（現静岡県清水市清水区追分）回りだといわれる。曲がりくねる土手の旅人や女に強い風が吹き付け、風に抵抗する姿勢や、御高祖頭巾の女の手を持つ懐紙や、天秤の荷物を担ぐ男の笠が中空に舞い上がる図。目に見えない風の動きを巧みに描いた図。富士は描線だけで描かれる。

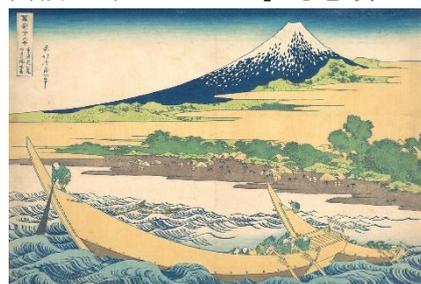


1118 駿州江尻：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈東海道江尻田子の浦略図注〉（前北斎為一筆。26.2×39.1 メトロポリタン美術館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/大英博物館/江戸東京博物館/ボストン美術館/近江美術館/アメリカ議会図書館/ミネアポリス美術研究所/シカゴ美術館/ウイスコンシン大学マディソン校/山口県立萩美術館：フチコレクション/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/オーストリア応用美術館/島根県立美術館蔵）

注）略図：古典などを当世風に表現するという程度の意味。

※田子の浦（現静岡県富士市）から見る富士に霞がかかっているところから、大中臣能宣（三十六歌仙の一人）の歌「田子の浦に霞の深く見ゆるかな 藻塩の煙立ちや添ふらん」（拾遺和歌集）からの着想とみられている（『名品揃物浮世絵8北斎I』解説）。あるいは山部赤人の「田子浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪はふりつつ」も念頭にあったか。富士の雪は斑模様まだらに描かれ、裾野には、すやり霞がたなびいている。手前には船首で投網の漁をする男や、左右二人ずつ四人で櫓を漕ぐ男たちの乗る船を二艘大きく描く。その二艘の向こうに波小さな舟が二艘浮かんでいる。遠景の海辺には塩田と、そこで働く人々が小さく描かれる。1119 東海道江尻田子の浦略図



☆〈遠江山中〉（前北斎為一筆。26.0×38.4 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/大英博物館/山口県立萩美術館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/ベルリン東洋美術館/ミネアポリス美術研究所/ホノルル美術館/江戸東京博物館/東京国立博物館/北斎館/島根県立美術館：新庄コレクション蔵）

※鋏形蕙斎（1764～1824）の肉筆風俗絵巻「近世職人尽絵詞」のうち〈木挽師〉の場面を参照したとされる。遠江山中の樵が、斜めに渡した巨大な角材を大鋸で切っている。そ

の角材の裏側からももう一人の男が鋸を引いている。木挽台の下では、男が鋸の歯の目立てをしている。側で赤子を背負った女や、山の下から立ち上る、何かを焼いている煙を見ている向こうむきの子どもが描かれる。幾何学的構図で、左上から右下に斜めに画面を区切る画面中央の大板が印象的である。

※東京国立博物館蔵の同図は藍摺の基調が朱色となっている。

1120 遠江山中



☆〈東海道吉田〉（前北斎為一筆。26.0×38.3 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/島根県立美術館/ハーバード大学サッター美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館：フチンコレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/バウアー・コレクション/ライデン国立民俗学博物館蔵）

※「不二見茶屋」の箱看板が正面天井に掲げられた茶屋の小上がりの座敷に、富士を見ながらくつろぐ揚げ帽子（角隠し）の二人の女がいる。同じく手拭を頭に巻いた男が、煙管を銜えて座敷に上がろうとしている。もう一人の男は座敷で座って煙管で一服している。正面の座敷で富士を眺める女二人に、茶屋の女が富士の様子を指差して説明している。いや、この二人の女は大柄なので、立ちあがったときに、頭をぶつけないように注意しているのだという、おどけた解釈もある。図の左には、柱の側では、木槌で草鞋を叩いて整えている瘦せた駕籠かきの男と、駕籠を置いて頭の汗を拭いている駕籠かきがいる。店の入口には「御茶津希」と「根元吉田ほくち」の縦看板がある。「ほくち」とは火を移す「火口」のことで、この辺りの名物という。



1121 東海道吉田

☆〈尾州不二見原〉（北斎改为一筆。26.1×38.6 メトロポリタン美術館/大英博物館/北斎館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館/山梨県立美術館/MAO 美術館/江戸東京博物館/東京国立博物館/山口県立萩美術館・フチンコレクション//日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/島根県立美術館：永田コレクション/アレク・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵）

※一般に「桶屋の富士」と呼ばれる図。桶の中のがかけ（箍直し）職人の背後に富士山が描かれる。この場所は現在の名古屋市中区富士見町とされている。槍鉋を持つ職人は石垣の台地で作業をしている。図の左に石垣の一部が描かれている。円の中の小さな富士の構図が特徴的。

1122 尾州不二見原



☆〈^{こうしゅう いぬめとうげ}甲州犬目峠〉（北斎改為一筆。25.6×38.4 メトロポリタン美術館/北斎館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館/山口県立萩美術館・チココレクション/日本浮世絵博物館/島根県立美術館/山梨県立博物館/MAO 美術館/東京国立博物館/江戸東京博物館/ホノルル美術館蔵）

※^{いぬめとうげ}犬目峠の急坂を登る二人の男。その後ろには、これから登る^{ふもと}麓の馬と旅人。右斜め上にせりあがる峠の稜線の途中から左斜め上に伸びる富士山の稜線によって構成された図。犬目峠は、甲州街道の野田尻と^{いぬめじゆく}犬目宿の間にあり、^{かつらがわ}桂川に沿った辺りは眺望が開けた所という。1123 駿州犬目峠：2020年より日本国旅券査証欄図案



☆〈^{しんしゅう すわいこ}信州諏訪湖〉（前北斎為一筆。25.3×37.9 メトロポリタン美術館/江戸東京博物館/北斎館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/山口県立萩美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/秋田市赤れんが郷土館/弘前市立美術館/ホノルル美術館/島根県立美術館蔵）

※全体に藍色と紅色を基調にした図。諏訪湖は長野県の諏訪市、岡谷市、諏訪郡下諏訪町にまたがる湖。諏訪湖を背景に、画面中央の高台に^{ほころ}祠のような茅葺の小屋と、その前に左右に伸びる二本の松の木が印象的に描かれる。諏訪湖には一艘の帆掛け舟が浮かび、遠くに^{たかしまじょう}高島城が水面に浮くように描かれている。諏訪の^{うきしろ}浮城と呼ばれたが、江戸期には干拓されて水辺の城ではなかったもので、実際の風景ではない。その先に富士が見える。



※校合摺がある（島根県立美術館：永田コレクション蔵）。

1124 信州諏訪湖：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈^{こうしゅう かいじかきわ}甲州石班沢〉（前北斎為一筆。25.3×37.4 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/山口県立萩美術館/中右コレクション/ホノルル美術館/北斎館/島根県立美術館/東京国立博物館/ベルギー王立美術館/オーストリア応用美術館/アダチ伝統木版画技術保存財団/江戸東京博物館蔵）



1125 甲州石班沢：初摺すみだ北斎美術館）2020年より日本国旅券査証欄図案。

後摺

※「石班」は、「石班魚」の誤記との説がある。石班沢は、富士川の鰍沢で、現在の山梨県南巨摩郡にあり、釜無川と笛吹川の合流する急流として知られている。場所は、二つの川の合流地点・禹之瀬とする見方がある。まるで海岸の荒波に立ち向かうような緊張感のある図となっている。漁師の後ろには魚籠を見る子どもが座っている。初摺は全体に藍摺であったが、後摺では色が増やされた。

☆〈甲州三坂水面〉（前北斎為一筆。25.5×37.7 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館/山口県立萩美術館/チココレクション/すみだ北斎美術館/東京国立博物館/アレン・メリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵）

※ 鋏形蕙斎の肉筆「名所図会」の〈相州管根賽の河原〉からの発想。山梨県河口湖町の御坂峠より河口湖の逆さ富士を描く。初夏か初秋の景色と思われるが、湖面の逆さ富士は雪を被っている。湖面の舟中に二人の男が小さく描かれ画面全体に静寂さが漂う。



1126 甲州三坂水面：2020年より日本国旅券査証欄図案

全体に緑色系を基調とする図。

【追加された10図（裏不二）】

☆〈本所立川〉（前北斎為一筆。26.0×38.0 メトロポリタン美術館すみだ北斎美術館/太田記念美術館/山口県萩美術館・チココレクション/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/蔵）

※立川は、現東京都墨田区両国辺を流れる掘割りの豎川で、兩岸には材木屋が多くあった。多くの材木が針のように垂直に並べられ、その間から富士が覗かれる。立てられた材木には版元（西村屋与八）を示す「西村置場」の文字の他、「馬喰丁式丁目角」「永寿堂仕入」「新板三拾六木二仕入」（追加出版の広告）などの文字ががさりげなく書き込まれている。左には職人が短く切った材木を積み上げられた材木の上に立った職人に投げ上げる様子がリズミカルに描かれる。全体に縦線が強調された構図。



1127 本所立川

☆〈従千住花街眺望ノ不二〉（前北斎為一筆。24.4×37.0 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/大英博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館/すみだ北斎美術館/島根県立美術館/ギメ美術館蔵）

※千住の岡場所（非公認の遊女屋。現東京都足立区千住柳町大門商店街辺にあった）を彼方に描き、後方には富士山。参勤交代の行列で鉄砲隊の武士たちが、遊郭や富士を振り返り見ている。鉄砲を肩に担ぐ鉄砲隊の行列には鉄砲を包む猩々緋の袋が描かれており、これは将軍より特別に許可された盛岡藩のシンボルであるところから、江戸から帰る盛岡

藩の大名行列の図といわれる。左の家の屋根の陰から槍組の毛槍先も見える。遠方の田圃ではその様子を畦道に座って見ている農民夫婦を描く。花街は、岡場所のことで、飯盛女がいる宿が多くあった。ここに描かれた花街を吉原とする見方があるが採れない。

1128 従千住花街眺望ノ不二



☆〈東海道品川御殿山ノ不二〉（前北斎為一筆。24.9×36.7 メトロポリタン美術館/東京富士美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/東京国立博物館/北斎館/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/東京国立博物館蔵）

※御殿山は現在の東京都品川区北品川3丁目付近の高台とされる。寛文年間(1661~73)に将軍徳川吉宗により吉野から桜が植えられ、桜の名所として定着した。小高い山の上では毛氈を敷いて花見をしながら酒を酌み交わす男たちや、そぞろ歩きで花見を楽しむ人々が描かれる。画面の中央には細く高く伸びた桜の木の先に花が咲いている。実際には、御殿山から品川沖の向こうに富士山は見るできない。

1129 東海道品川御殿山ノ不二



☆〈甲州伊沢暁〉（前北斎為一筆。24.6×37.2 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館（複製）/山口県立萩美術館：コチコレクション/すみだ北斎美術館/ミネアポリス美術研究所蔵）

※伊沢は石和で、笛吹川沿いの宿場（現山梨県笛吹市伊沢町）。朝焼けの早朝に出発する人々の様子を俯瞰した図。遠景の、空と富士山が次第に紅に染まる様子と、近景の、宿場の道を急ぐ大勢の旅人の様子が描かれる。



1130 甲州伊沢暁

☆〈身延川裏不二〉（前北斎為一筆。25.3×37.0 メトロポリタン美術館日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/島根県立美術館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/蔵）

1131 身延川裏不二

※身延川は、山梨県身延町の山中を流れる小さな谷川。身延川の脇を行く久遠寺への参詣と思われる人馬。背景の峨々たる山容の下には霧が立ちこめ、道の先には



巨樹が聳えている。身延山の岩場の間から富士山が見える。

☆〈相州仲原〉（前北斎為一筆。25.1×37.0 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/島根県立美術館/大英博物館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/東京国立博物館/北斎館/千葉市美術館蔵）

※現在の神奈川県平塚市中原とみられている。中原街道は大山参りへの道としてにぎわったといわれるが、作品では田圃の広がる鄙びた風景となっている。小川に架かる小さな橋を渡る赤子を背負って頭に桶を乗せて荷物を運ぶ農婦、天秤棒の荷物を運ぶ行商の男。笈箱を背負って大山参りに行く六十六部注の男たち、版元の「永楽屋」の山形に三つ巴の印を染め抜いた風呂敷に包んだ荷物の上に傘を括りつけて担いでいる男、わき目も振らず小川の中で筏を入れ、貝などを獲る男を描く。背景に雪を被った藍の肌を見せる富士。

注) 六十六分：諸国巡礼で、書写した法華経を全国66か所の霊場に一部ずつ収める人をいう。略して六分ともいう。

1132 相州仲原



☆〈駿州大野新田〉（前北斎為一筆。25.8×38.2 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/東京国立博物館/大英博物館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館/千葉市美術館/アレン・メモリアル美術館：マリ・エイズ・ワース・コレクション蔵）

※大野新田は、東海道原の宿と吉原宿の間の地。点在する富士沼のある浮島ヶ原と呼ばれる湿地帯風景か。手前に刈藁を終え、四頭の牛の背に三束ずつ乗せて家路につく農夫と、背に藁を背負った二人の農婦。中央には水辺を飛ぶ鷺が5羽。正面背景に雪を抱いた富士の図。

1133 駿州大野新田



☆〈駿州片倉茶園ノ不二〉（前北斎為一筆。25.7×38.4 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/すみだ北斎美術館/島根県立美術館/オーストリア応用美術館蔵）

1134 駿州片倉茶園ノ不二

※駿州（静岡県）の片倉とされる茶畑の茶摘みの風景。茶畑で茶葉を摘み取る多くの女性たち。茶葉を籠に入れて天秤棒で運ぶ男たち。茶葉を入れた籠を背にした馬を牽く男などを、全体を茶色を基調に描いた図。背景に雪を被っている富士。実際には、この茶園がどこかは不明。ここから見た富士までの構図は、ポール・



セザンヌの風景画「サント・ヴィクトワール山」（フリッホフ・コレクション蔵）に影響したと言われる。

☆〈東海道金谷ノ不二〉（前北斎為一筆。26.3×38.8 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/大英博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館・チコソコレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/中右コレクション/アレク・メリアル美術館：マリ・エイズワース・コレクション蔵）

※金谷は、島田市の大井川の西岸の地。東海道の日本橋から 24 番目の宿場で島田宿から大井川を越えて行く。その川越えの様子を描いた図。

川越人足たちが旅人を肩車で渡したり、輦台渡して渡したり、大勢の人物が五層に描かれた水流の中で描かれる。川を渡る箱に「壽」の文字が書かれ、対岸の家の幟に「永」の文字が書かれ、版元の永寿堂を表している。対岸には何かを組んで堤防のようにしたものが描かれ、その向こうに島田宿が見える。



1135 東海道金谷ノ不二

☆〈諸人登山〉（前北斎為一筆。25.3×37.0 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/大英博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館（複製）/島根県立美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/中右コレクション/山口県立萩美術館・チコソコレクション蔵）

※「しよじんとざん」「しよにとざん」とする図版もあるが、いかにも不自然な読み方であり、やはり「もろびと」と読むべきであろう。シリーズ最後に描かれたものと考えられている。富士の山容を描かず、山中の登山を描いた唯一の図。富士山の山開きは6月1日。富士講の男たちが金剛杖を手に山中を登り、途中の岩室の中では大勢の男たちが蹲って休んでいる。図の左下に梯子があり、それを上って来る男がいるので、駒が岳辺りの風景とする見方もある。ここから山頂の剣が峰を目指す人々が描かれる。山中の図であるので、富士の姿は描かれない。笠の7人を線で結ぶと北斗七星の形になる。

※この図に描かれた男たちは 36 人であるので、『富嶽三十六景』の題名にかけたのではないかという説もあるという。



1136 諸人登山

【落款の謎】

※大久保純一（「葛飾北斎 富嶽三十六景 神奈川冲浪裏 一線を引きたくなる絵」）、その他の研究者により、落款の書体により制作年代が類推されている。

※以下は、久保田一洋編「富嶽三十六景の推定刊行順および極印・版元印の有無調査表」(島田賢太郎「生涯学習浮世絵講座『葛飾北斎』第三回：代表作(1) 富嶽三十六景をめぐる諸問題」所収。平成23年2月24日)を参照している。

台東区生涯学習北斎研究会 Face Book より

※【A】グループから順に【E】グループまで制作されたと思われるが、各グループ内の制作順は不明。

【A】「北斎改為一筆」(「筆」がノーマルな書き方。「為一」の「為」が「爲」となっている。文政13年/天保元年頃に制作。〈武州玉川〉のみ「北斎為一筆」の落款)。北斎は60歳の時に戴斗号を弟子の北泉に譲り「北斎改為一」と号したことから、グループ【B】～【E】に用いられた「前北斎為一」号より早いと思われ、【B】よりも以前に制作されたと推定できる。版元の西村屋は文政12年(1829)3月21日に類焼し7月19日に店舗が再建されているので(『馬琴日記』による)、それ以後の制作となり、【B】が制作・発売される前の文政13年(天保元年)と推定される。

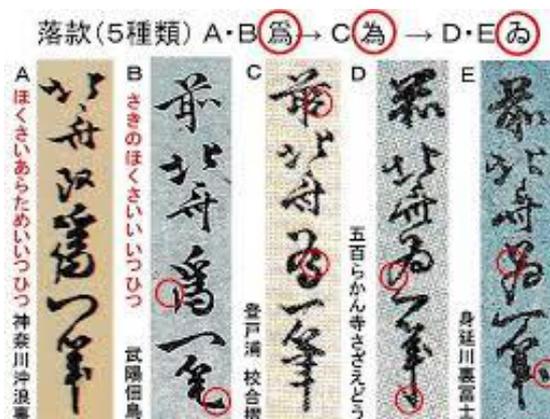
〈凱風快晴〉〈山下白雨〉〈神奈川冲浪裏〉〈東都駿台〉〈青山円座松〉〈深川万年橋下〉〈武州千住〉〈甲州犬目峠〉〈尾州不二見原〉の9図に〈武州玉川〉を加えての10図。

【B】「前北斎改為一筆」(「筆」が「毛」のように終筆が右に跳ねている。これは天保2年の「百物語」の落款の字体に同じなので天保2年の制作と推定される)。「為一」の「為」が「爲」。〈武陽佃島〉〈相州七里浜〉〈信州諏訪湖〉〈常州牛堀〉〈甲州三島越〉〈東都浅草本願寺〉〈駿州江尻〉〈遠江山中〉〈甲州石斑沢〉〈相州梅沢左〉の10図。

【C】「前北斎為一筆」(「為」が草書体で、形がやや複雑。天保3年～4年の制作)〈礪川雪の旦〉〈下目黒〉〈東海道吉田〉〈上総ノ海路〉〈登戸浦〉の5図。

【D】「前北斎為一筆」(「為」がすっかり草書体で「ゐ」の字。天保4年の制作)落款の書体が【C】に比べ落款が乱れているところから【C】より後と考えられる。〈五百らかん寺さざゐどう〉〈隠田の水車〉〈御厩川岸より両国橋夕陽見〉〈相州江の島〉〈江都駿河町三井見世略図〉〈東海道江尻田子ノ浦略図〉〈隅田川関屋の里〉〈東海道程ヶ谷〉〈江戸日本橋〉〈甲州三坂水面〉〈相州箱根湖水〉の11図。

【E】「前北斎為一筆」(「為」がすっかり草書体で「ゐ」の字。天保4年秋～末の制作)。このグループが最後の制作であることは明らか。天保4年中に翌年出版予定の『富嶽百景』の広告が出ているので、これまでには初めの三十六景は制作されていたと考えられる。天保5年に刊行予定の『百景』の前に「裏富士」十景を急ぎ制作し、天保5年の正月に刊行されたのではと推測されている。



〈身延川裏不二〉 〈従千住花街眺望ノ不二〉 〈駿州片倉茶園ノ不二〉 〈東海道品川御殿山ノ不二〉 〈東海道金谷ノ不二〉 〈本所立川〉 〈駿州大野新田〉 〈相州仲原〉 〈甲州伊沢暁〉 〈諸人登山〉 の 10 図。

【「極」印・「改」印の謎】

※46 図中、数種の版による「極」印と版元印の有無について 文政 13 年/天保元年 (1830) 頃に製作されたと考えられる 10 図には、両印とも無く、「下目黒」「東海道品川御殿山ノ不二」の 2 図のみには必ず両印が押されている。24 図は全く両印とも無く、20 図は両印の有無が混在しているという考察がある (島田賢太郎「台東区北斎研究会ニュース」(2016 年 11 月 5 日))。

【永寿堂の広告 富士の形、異なる事を示す】

※文政 12 年『稗史水滸伝』(山東京伝訳。西村屋与八版)及び天保 2 年(文政 14 年)『正本製』(柳亭種彦作。歌川国貞画、永寿堂：西村屋与八版)下巻にある広告。

「富嶽三十六景 前北斎為一翁画 藍摺注一枚一枚ニ一景ツゞ追々出版 此絵は富士のかたち、その所によりて、異なる事を示す、或は七里ヶ浜にて見るかたち、又は佃島より眺る景など総て追々彫刻すれば猶百にもあまるべし 三十六に限るにあらず」(天保 2 年に広告があることから、あるいは前年に刊行が始まったか)。

注) 藍摺：いわゆるベロ藍によるもの。

※藍摺の B グループから発売されたか。但し、文政末頃には〈飢風快晴〉〈山下白雨〉〈神奈川沖浪裏〉などを含む 10 図が刊行されたとする浅野秀剛の説(『日本史リブレット 51 錦絵を読む』山川出版)を大久保純一は『北斎』(岩波新書)で紹介している(p 121)。

【富士講講元・永寿堂の策略】

※富士信仰の形として、江戸では毎月 5 月晦日から 6 月 1 日にかけて、先達に引率されて白衣に身を包み、金剛杖を持って富士山の山開きに参加するという。また、江戸各地の富士神社で富士禪定(修行)の神事が行われたという(平凡社『浮世絵八華 5 北斎』口絵)。

当時富士講は 92 講あり、支講を含めると 300 講あり、1 講 10 人として 3000 人の信者がいたと思われる。永寿堂は富士講の講元で、富士講信者を目標に富士シリーズを企画したと思われる。「富嶽三十六景」に限らず、そのような永寿堂を、馬琴は『近世物之本江戸作者部類』(岩波文庫版 p 194)で「売買にさかしきものなるが(略)」と評している。

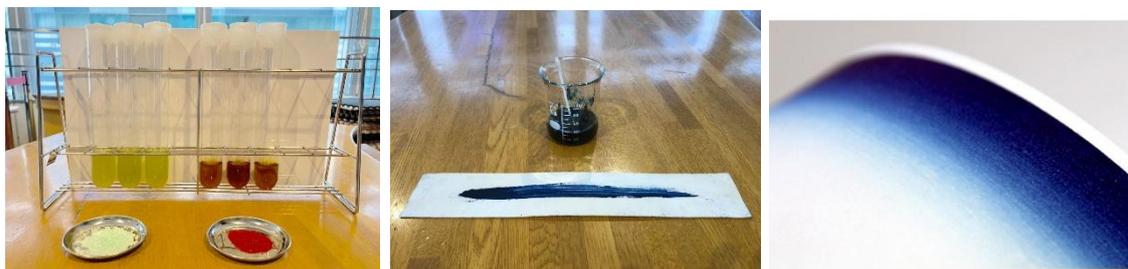
【富士の頂角、広重は 85 度、北斎は 30 度くらい】

※太宰治「富嶽百景」の冒頭には「富士の頂角、広重の富士は八十五度、文晁の富士も八十四度くらゐ、けれども、陸軍の実測図によつて東西及南北に断面図を作つてみると、東西縦断は頂角、百二十度となり、南北は百十七度である。広重、文晁に限らず、たいいていの絵の富士は、鋭角である。いただきが、細く、高く、華奢である。北斎にいたつては、その頂角、ほとんど三十度くらゐ、エッフェル鉄塔のやうな富士をさへ描いてゐる。」とある。但し、『富嶽三十六景』ではエッフェル塔のやうな富士は描かれていない。

【ベロ藍の発見】

※1704年～1710年にかけて、ドイツ・ベルリンで塗料製造に従事していたディース・バッハと錬金術師ディッペルがフロレンスレーキという赤い顔料を作ろうとしたときに、偶然フェロシアンという青が発見されたという。このプルシアン・ブルー（ベロ藍）は文化4年（1807）に長崎に持ち込まれた記録があり、文化7年（1810）、蘭学者大槻玄沢が、ドイツ学者による製造書を訳した『蘭畹摘芳』で、ベルリンのブルーから「ベルレンブラウ」と記述している。（2007年12月13日『日経ビジネス・オンライン』所収、内田千鶴子「シーボルト事件に脅えた北斎」による）。

【ベロ藍とは】



1137 硫酸第一鉄の水溶液とヘキサシアノ鉄(Ⅲ)酸カリウムの水溶液（撮影：アダチ版画研究所）

※硫酸第一鉄の水溶液とヘキサシアノ鉄(Ⅲ)酸カリウムの水溶液を混ぜるとベロ藍になる。（2019年6月「静岡科学館る・く・る」での実験。アダチ版画研究所 Web「北斎今昔」より）

※『富嶽三十六景』の主版は本藍（校合摺）で、多色はベロ藍（非破壊分析。松井英男・下山進・下山裕子「錦絵青色着色料の非破壊同定法に基づくベルリン・ブルー導入過程と「富嶽三十六景」を嚆矢とする浮世絵風景版画確立経緯の研究」（北斎研究 37号 2005年）を日野原健司『北斎 富嶽三十六景』（岩波文庫 p216）で紹介。

【ベロ藍の絵で流行おびだしく】

※『真佐喜のかつら』（未完随筆。青葱堂冬圃著。嘉永～安政頃成立）による「ベロリン」の記述（林美一『お栄と英泉』 p97より）。

「唐藍は蘭名をへろリンといふ、この絵の具摺物に用ひはじめしは、文政十二年よりなり。（中略）藍紙の色などは光沢の能き事格別なる故、狂歌、俳諧の摺物は悉く是を用ゐぬ、されど未だ錦絵には用ひざりしが、翌年堀江町式丁目団扇問屋伊勢屋葱兵衛にて、画師溪斎英泉画きたる唐土山水、（団扇の）うらは隅田川の図をへろリン一色をもつて濃き薄きに摺立、うり出しけるに、その流行おびだしく、外の団扇屋それを見、同じく藍摺を多く売出しける、地本問屋にては、馬喰町永寿堂西村与八方にて、前北斎のゑがきたる富士三十六景をへろリン摺になし出板す、これまた大流行、団扇に倍す、そのころほかのにしき絵にも、皆へろリンを用ゐる事になりぬ（略）」

●「ベロ藍団扇絵シリーズ」（?）

☆団扇絵「水辺の二羽の鴨」（北斎改为一筆。印葛しか。団扇絵判錦絵。（入山型の下に太）。22.1×28.9 ベルリン東洋美術館蔵。ベロ藍を基調とした絵）

☆団扇絵「鯉図」(「鯉魚図」とも。団扇絵判錦絵。北斎改為一筆。印葛しか。版元不明。23.2×28.7 ギメ美術館蔵)

※背後をベロ藍のグラデーションで描く。水草の前で、二匹の鯉が重なるように泳いでいる。文化10年(1813)4月25日に門人に与えた肉筆画「鯉図」と似ている図。入山型の下に太の字の定紋があるが版元名は不明。1138 鯉図(ギメ美術館)



☆団扇絵「鯉と石鯛」(この頃か。団扇絵判錦絵。北斎改為一筆。印葛しか。入山型の下に太の字のある定紋があるが、版元名は不明。旧シトラ・コレクション蔵)

※笹の上に鯉が置かれ、その上に縞模様の石鯛が置かれた図。

●団扇絵「露草に鶏と雛」(この頃か。団扇絵判錦絵。前北斎為一筆。版元不明。22.9×29.2 メトロポリタン美術館蔵)

※赤い鶏冠の雌雄の鶏。雌鶏の背中に雛が乗っている。三羽の鶏が楕円形のように寄り添っている構図。背後に紫の花を咲かせた露草が描かれる。

入り屋根の下に太の字の商標があるが、版元明は不明。同じ商標のあるベロ藍団扇シリーズの一図か。天保3年頃説あり(『2017 北斎一富士を超えて展図録』p157)。



鶏の羽先だけが朱色(のちの所蔵者の手彩色と思われる)の校合摺がある(24.4×30.0 ヴィクトリア&アルバート美術館蔵)。1139 露草に鶏と雛(メトロポリタン美術館)

【あれこれ印の使い分け】

●錦絵「森治版中判藍摺シリーズ」(中判揃物。前北斎筆。印各図ごとに数種の印を用いている。各平均約22.0×16.1 森屋治兵衛版)

※11図が確認されているという(『2005 北斎展図録』p349)。

☆〈さより・石鯛・海老〉(印二人人形。ジェノバ東洋美術館/ベルリン東洋美術館蔵)

※嘴を突き出すように置かれたさよりの上に縞模様の石鯛が横たわり、その腹の上に海老が長い髭を一本伸ばして置かれている。

1140 さより・石鯛・海老(ベルリン東洋美術館) 右:印影図



☆〈かれい・かさご・赤貝〉(印二人人形。ジェノバ東洋美術館/ベルリン東洋美術館蔵)

※かれいが大きな白い腹を見せている上に、かさごが置かれ、その脇に赤貝が二枚ある。鰈は、『肉筆画帖』(天保6年頃)

の〈鯉と撫子〉でも同様の形で描いている。

1141 かれい・かさご・赤貝 (ジェノバ東洋美術館)

☆〈月下山水 滝山水〉(印為一(?))。ジェノバ東洋美術館/ベルリン東洋美術館蔵)



※勢いよく
流れ落ちる
滝の上に架
かる橋の先
に、森の中

の民家が数軒あり、その背後には峨々
たる山が白く描かれる。

1142 左：月下山水 (ベルリン東洋美術館)

右：滝山水 (ベルリン東洋美術館)



☆〈月下山水〉(「月下の風景」とも。印ふしのやま(?))。ジェノバ東洋美術館/ベル
リン東洋美術館/太田記念美術館蔵)

※松が二本生えている断崖の空洞の海面に、人を乗せて小舟が二艘行き来している。水平
線の上には満月が白く輝いている。

☆〈老人芋洗〉(「農夫芋洗い」とも。印七十二翁。印瓢箪の形。23.5×16.7 すみだ
北斎美術館：ピーターモース・コレクション/日本浮世絵博物館/ボストン美術館/ジェノヴァ東洋美術
館/ベルリン東洋美術館/東京国立博物館蔵)

※桶の縁に両脚を掛け、中の芋を二本の棒をかき回
して洗う老人の後ろ姿。老人の正面には大きな月が
出ている。

1143 老人芋洗 (すみだ北斎美術館) 右：印影拡大図

☆〈雪中の筍掘り〉(「孟宗」とも。印ふしのや
ま。印葛しか。島根県立美術館：永田コレクション/ジェ
ノバ東洋美術館/ベルリン東洋美術館蔵)



※雪中の筍掘りで巨大な筍の前で鋤を投げ出して驚く農夫の
後姿。弘化元年にも「雪中筍狩り図」を描いている。中国の呉
の国の人孟宗を描いたものといわれる。病床の母が筍を欲し
がったので、冬に竹林に行くと雪の中から筍が出現したとい
う話を踏まえている。

1144 雪中の筍掘り (島根県立美術館)

☆〈小禽に虻〉(印為弑。23.2×17.5 太田記念美術館：長
瀬コレクション/ジェノバ東洋美術館/東京国立博物館/島根県立美術
館：永田コレクション/アレン・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵)



※画面上から左に掛けて茎が伸び、そこにいくつかの花が咲いている。その側に飛んでいる虻を捕まえようと口を開けて飛んで近づく雀。

1145 小禽に虻（島根県立美術館）右：印影拡大図

☆〈雀に朝顔〉（「小禽に朝顔」とも。印のみのみん。22.3×16.4。すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/ジェノバ東洋美術館/島根県立美術

館：永田コレクション蔵）

※三羽の雀が朝顔の上で飛んでいる。そのうちの二羽は噛み合っている。

1146 雀に朝顔（島根県立美術館）右：印号拡大図

印については、「為一の印」と読むか。安田剛蔵は「西西西ん」と読んで、「24（にじゅうよん）

が3倍で、72歳を表現している」とする説を、台東区北斎研究会ニュース（2014年11月15日）が紹介している。



☆〈波に千鳥〉（印為弐。22.9×16.0 太田記念美術館/ジェノバ東洋美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※擦るように斜めに引いた藍色の波の上を四羽の千鳥が群れ飛ぶ。波頭から千鳥の画趣は北斎の好む図柄。

1147 波に千鳥（島根県立美術館）

●錦絵『森治版短冊判シリーズ』（この頃か。

森屋治兵衛版。20 図確認されているという。ベルリン東洋美術館蔵）

※「前北斎為一筆」と「前北斎画」の落款を使っている。

☆〈軽業〉（「曲芸」とも。前北斎為一筆）

※笛を吹きながら額に乗せた棒の先の丸物を落とさずにいる曲芸師。足元では袋を広げている男。手前に太鼓で囃す男。

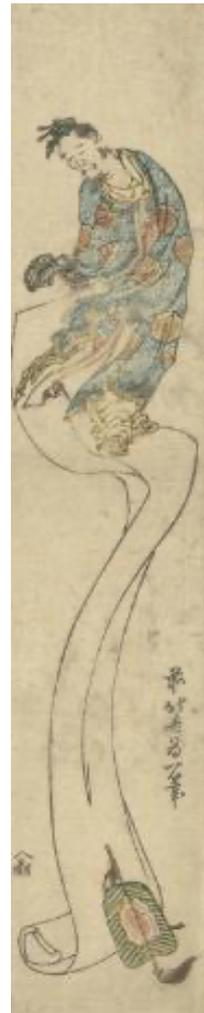
☆〈仕丁〉（前北斎為一筆）

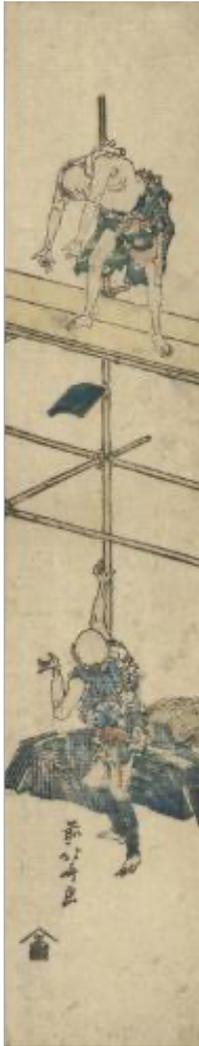
※寺の境内に落ちた紅葉を掃く仕丁。

☆〈武志士〉（前北斎為一筆）

※武志士は北宋代の仙人で、青布を橋として川を渡ったと伝えられる。図は、長い白布が縦長に伸び、その上に折烏帽子を被り、着衣を靡かせ下駄を履いて立つ武志士。

1148 武志士（プーシキン美術館）





☆〈正月の謡〉（前北斎為一筆。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「前北斎為一筆」と書かれた松の絵を描いた屏風を背にして、袴姿の男が謡を唄う。天井には鏡餅を乗せ、注連飾りのある棚が吊るされている。

☆〈放下師〉（前北斎為一筆）

※放下師は、田楽から転化した大道芸を演じる者。図は放下師の一人は笛を吹きながら額に立てた棒の先の玉を操る。その下でしゃがんで玉を受け取る袋を広げている男。その後で太鼓を叩いて調子をとる男。

☆〈桶屋〉（前北斎為一筆）

※縦長の桶に乗り、箍を締める男と、桶の下で箍を塗る男。

☆〈深山の鹿〉（「みやまのしか」とも。前北斎為一筆）

※藍色を基調に、山中で月を眺める鹿を描く。

☆〈瓦屋〉（前北斎画）

※足場にいる職人に下から瓦を放りあげる男。

1149 瓦屋（プーシキン美術館）

☆〈鯛釣り〉（前北斎為一筆）

1150 鯛釣り（ベルリン東洋美術館）

☆〈綱渡り〉（前北斎為一筆）

※綱渡りをする女曲芸師と、下からそれを見守る男。

☆年始（前北斎為一筆）未見

☆日本橋（前北斎為一筆）未見

☆本所（前北斎為一筆）未見

☆〈雀躍り〉（前北斎為一筆。島根県立美術館：永田コレクション/ベルリン東洋美術館蔵）

※図の下から上にかけて、男が雀のように踊る所作を 10 図連続して、次第に遠くに行くように描く。

☆桜下の馬（前北斎為一筆 プーシキン美術館蔵）

※桜の木の下に三頭の馬が群れている。一頭は桜花を見上げている。

1151 桜花の馬（縮小：プーシキン美術館）

☆〈巡礼〉（前北斎画）

1152 巡礼（縮小：プーシキン美術館）



※四つん這いの男の背に立ち、柱に字を描く男。

☆〈禁酒の猩々〉（前北斎為一筆。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※猩々は中国の伝説上の生き物で、

朱色の長髪で、人の言葉を理解し、酒を好んだという。図は「当分の内禁酒」と書かれた大酒甕と「船橋屋 御菓子」と書かれた箱看板の前で、菓子箱の蓋を開け、胡坐をかいて中の饅頭を口にしている猩々。前に茶の急須と茶碗、菓子を包んであった経木が置いてある。 1153 禁酒の猩々

天保3(1832) 壬辰 73 歳 卍、前北斎為一、北斎改為一：孫(23)

阿栄(35)

◇天保の飢饉。

◇歌川広重、定火消同心職を正式に養祖父の子仲次郎（17 歳）に譲る。また、幕府の八朔の御馬献上の列に加わり、東海道を京まで上る。但し、上京同行については諸説あり、疑問視もされている（参考。「司馬江漢『東海道五十三次画帖』一広重「五十三次」には元絵があった」 監修：對中如雲 ワイズ出版 1996 年）。

◇1 月 23 日、マネ生（～1883）。

◇3 月 22 日、ゲーテ没（84）。

◇8 月 19 日、鼠小僧次郎吉、小塚原刑場で磔刑。

◇9 月 23 日、頼山陽没（53）。

◇11 月、風邪流行、江戸窮民 30 万 6000 人に施米。

◇11 月、16 回目の琉球使節江戸上り（尚育王・琉球国王即位の謝恩使）

○寺門清軒『江戸繁盛記』。

○曲亭馬琴『開港驚奇侠客伝』（天保 6 年迄。未完）。

○1 月、為永春水『春色梅児誉美』初・後編刊。

○シーボルト『NIPPON』出版。「同書の『北斎漫画』は実物ではなく、すべてシーボルトによる転写です」（橋本健一郎「北斎漫画考—その成立と影響」『北斎研究所研究紀要第五集』：千野塚子『江戸のジャーナリスト葛飾北斎』で紹介（p 117～118）。

【長女阿美与の元夫 柳川重信没す】

★閏 11 月 28 日、柳川重信（北斎の長女阿美与の元夫）没（46）。

※『増補武江年表』（斎藤月岑著・嘉永元年脱稿・同三年刊）の死亡記事に続いて、以下のように記される。

「筠庭注云ふ、柳川重信は志賀理斎の子なり。師なくして画をよくせり。北斎の風なりしが、本所一ツ目弁天の前なる髪結床の障子に、午の時参りする女を野ぶせりの乞食等が犯さんとする図を書きて、いと能く出来たり。北溪これを見て、画は社中の風なるが、かばかり書かんものを覚えずとて、其所に問ひしとぞ。夫より相知りて、北溪これを引きて北



斎が弟子とす。其の後北斎これを養子とせしが、如何したりけん、義絶におよべり、夫より重信頼りに板下を書きしを、北斎これを板下に禁じて、互いに意趣を含みけるを、柳亭種彦双方をなだめて事andraげり」(p85)

注) 筠庭：喜多村信節(天明3年～安政3年(1783～1856)国学者)。筠庭は号。

※『馬琴日記』閏11月29日条には「昼飯(筆者注：「後」か)丁子や(筆者注：丁子屋平兵衛)より老僕を以、根岸柳川重信作、昨夜中死去のよし、告来ル。明廿九日昼九半時、出棺のよし也」とある(『馬琴日記』第3巻による。ルビ・注は筆者による)。昼九つ半は、13時頃。

【鶏の足跡が竜田川の紅葉に】

★十一代将軍徳川家斉(在位 1787～1837)、鷹狩りの途中、浅草伝法院で座興に北斎と谷文晁(1763～1840)に絵を描くよう命じる。北斎は鶏の足に赤墨をつけ紙の上を歩かせ「竜田川の紅葉」とした逸話がある。

※『無可有郷』(「むこうきょう」とも。3巻。詩瀑山人(鈴木桃野)著。天保期成立)の下巻(画の工夫)の項の記事より(同記事は『年譜』に資料22として紹介されている)。

「先比葛飾北斎翁御上覧の画をかきしとき、鶏尾に藍水(筆者注：藍色の水)を濡し、足に臘脂(筆者注：えんじ色)を濡し、紙上を走らせしかば、自然と龍田川を成せりといふ。何れも画の工みなるのみならず、工夫もまた常人の及ぶところにあらず。」(同記事は天保3年(1832)～9年(1838)の記事なので「先比」は天保3年以前の事を示している。但し、明確な年代は特定できない。

※飯島虚心『葛飾北斎伝』(p76～78)の記事。

「時に徳川将軍家斉公 徳川十一世文恭院殿 北斎の妙技を聞き、放鷹の途次、写山楼文晁注および葛飾北斎を浅草伝法院に召して、席上画を画かしむ。文晁先づ画く。(略)次に北斎、将軍の前に出で、従容として、おそろゝ色なく、筆を揮ってまづ花鳥山水を画く。左右感嘆せざるものなし。後に長くつぎたる唐紙を横にし、刷毛をもて長く藍を引き、さて携へたる鶏を籠中より出だし、さらに捕へて、趾に朱肉をつけ、これを紙上に放ち、趾痕を印残せしめ、是はこれ立田川の風景なりとて、揮一揮して退きたり。人皆其の奇巧に驚く。此の時写山楼傍にありて手に汗を握りしと。写山楼の話。」(ルビは筆者による)

注) 写山楼文晁：谷文晁(宝暦13年～天保11年：1763～1841)。文人画家。和漢洋の画法を学ぶ。門下に渡辺崋山等がいる。

【竜田川の紅葉絵は失敗だったか】

瀬木慎一『画狂人北斎』(p82)では、明治39年(1906)6月刊の雑誌『高潮』に掲載された四葩山人による「丁子屋と北斎」という標題で、大島屋伝右衛門の文溪堂に関する談話の一節を紹介している文を孫引きしている。

「『又飯島虚心といふ方の著された葛飾北斎伝には・・・』とあるけれど、『事実を申しますと、之は失敗したので、更に紙面の处处へ墨をこぼし、其墨を爪の先で雲龍の図とし

て漸く面目を全くして引退がつたといふ事に聞いて居ります。立田川は一寸思付ではありましたが、実際は散々であつたさうで御座いました。』」

※以上のエピソードの信憑性については、鶏の足の爪が紙を損ねることからも、疑問視する説もあるが、北斎らしき逸話である。

★シーボルト『日本』(20分冊)で、北斎のみを偉大な絵師として紹介。同誌に『北斎写真画譜』(文化11年)『北斎漫画』(初編：文化11年)が掲載される。

★『柳多留』116編に9句、119編に9句、120編に4句載る。

【柳多留 116 編】

☆海苔麩朶の浪旧苔の髭をなで 卍 (海苔の養殖用の麩朶の杭に古い海苔が付いて髭のようだ。宿六心配『謎解き北斎川柳』では天保2年)

☆羽虱で土器になる迦陵頻 卍 (雅楽の羽をつけた迦陵頻伽も羽虱に食われたらつるつるの土器になる)

☆初夢がモシさめますと獺の妻 卍 (目覚めると夢を食べられない獺。その妻は早く食べないと夢も冷めて目も覚めますと言う)

☆海苔麩朶の浪旧苔の髭をなで 卍 (他者評により前出)

☆つま恋の娘を母の虫封じ 卍 (妻恋の鳴く鹿ならぬ、色気づいた娘に母親が虫封じの薬を飲ませる)

☆姫とよふ粥に付そふ小殿原 卍 (お姫様の白い粥に、黒いごまめの小殿原が添えられた。姫に黒魚は?)

☆はつ夢が醒るハねモシと獺の妻 卍 (他者評により前出。但し、表記に異同あり)

☆羽虱で土器になる迦陵頻 卍 (他者評により前出)

☆門万歳銭にならんのけふの雪 卍 (門付けの万歳も今日の雪では仕事にならず、銭にもならない)

【柳多留 119 編】

☆宇治よりも育ちと葉向茶を誉ル 卍 (氏より育ち。宇治の茶より風に倒れた下等の茶でも旨いものだ)

☆山出しの千代か生れも小松川 卍 (加賀の千代女ではないが、田舎出の千代だって小松川の生まれだ)

☆雪隠へ六十六屎馬喰町 卍 (六十六部が泊まる馬喰町の宿には、全国六十六カ所の屎が溜まっている)

☆赤免馬の尻に雲長が苦笑 卍 (一日千里の関羽の愛馬・赤免馬の尻に雲長(関羽の字)も苦笑い)

☆雪隠へ六十六屎馬喰町 卍 (他者評により前出)

☆振る汐花も一筋に局見世 卍 (不浄払いの汐花も最下級の局見世の入り口ではほんの一筋にまく汐で済む)

☆指人形も居敷から手を入れる 卍 (指人形は尻から指を入れるが、男の指も女の着物の下から入る。宿六心配『謎解き北斎川柳』では「入れる」)

☆柳原戸棚ハ箱を横にする 卍 (神田川東岸の柳原には床に商品を並べ棚は箱を横にした貧しい店が多い)

☆褌ハ柳絞りにあふらじみ 卍 (折角の柳絞り模様の褌が油じみになってしまった)

【柳多留 120 編】

☆世からく寄ますかく盆の懸 卍 (あの世からあの世から、呼びましょうか、呼びましょうかと盆の掛提灯)

☆竹笠で雪に野糞のイキみ形 卍 (竹笠を被った男が雪のなかで息んで野糞を垂れる姿は雪見灯籠のよう)

☆世柄く寄りますかく盆の懸 卍 (他者評により前出。但し、表記に異同あり)

☆軒にハ国なまりなし馬喰町 卍 (全国からの六十六部が泊まる馬喰町の宿。流石に軒にはお国訛りはない)

●合巻表紙絵『花雪吹縁柵』前帙（春。中本四冊。柳亭種彦校合。相州磯辺（仙客亭柏琳）作。表紙図は、図の丸枠に国芳の美人大首絵が描かれ、北斎は、鮎が五匹泳いでいる姿に赤い石竹（筆者注：ナデシコ科の多年草）を描く。「柳亭応需白口魚（筆者注：イシモチ。グチ。但し、鮎としている）写前北斎為一」とある。挿絵は国芳が描く。「天保壬辰春」（天保3年）の書き込みがある。

前北斎為一。鶴屋喜右衛門版。島根県立美術館：永田コレクション/国立国会図書館蔵

※相州磯部（現神奈川県大磯）在住の仙客亭柏琳が、自作の草稿を柳亭種彦に送り出版を請い、種彦が手を入れて、表紙絵を北斎に頼んで刊行した



もの。 1154 前帙表紙：裏表紙：表（立命館大学 ARC）

●合巻表紙絵『花雪吹縁柵』後帙（柳亭種彦校合。表紙には「相州磯部（仙客亭柏琳）作。歌川国芳画。四冊 天保壬申春」とある。鶴屋喜右衛門版。島根県立美術館：永田コレクション/国立国会図書館蔵）

※北斎は策に鮎が三匹入れられ、紫の桔梗の花と雀が策の柄に絡み付いている絵を描く。左下の四角枠に国芳の美人大首絵の上にも雀が描かれる。「柳亭応需白口魚（筆者注：イシモチ。グチ。但し、鮎としている）写前北斎為一」とある。上記の合巻と、翌天保4年（1833）の合巻表紙『出世奴小方之伝』を含め、北斎が合巻の表紙に作画したのはこの三冊のみだという。「壬辰春」とある。（『年譜』による）。

前帙下の見返しに柳亭種彦の文で「為一翁にへうしへ鮎の画をかいてもらいましたるは、かのいそべあたりの名産ゆゑにござります。まうさずとも知れました事ながら、あねさま顔ハやはり国芳画にござります」とある（鈴木重三「近世小説の造本美術とその性格」『絵本と浮世絵』（p131）所収）。

●錦絵『琉球八景』（秋頃。横大判。8枚揃。前北斎为一筆。西村屋与八版。森屋治兵衛版の後摺あり）。

※この年11月16日の琉球使節参府を見越しての刊行か。琉球に訪れた官吏周煌が宝暦7年（1757）年に中国で刊行した『琉球国志略』所収の琉球八景図を、天保2年（1831）に幕府が摸刻し刊行した『球陽八景』（「琉球八景図」）を種本にしたという。琉球人の朝貢は慶長15年（1536）より始まる。

☆「泉崎夜月」（「いずみざきやげつ」とも。25.3×37.3 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/東京国立博物館/慶応義塾大学/浦添市美術館）

1155 泉崎夜月（日本浮世絵博物館）

※屋敷の前に太鼓橋風の石橋があり、遠く山の上には月が出ている。月の欠け方が不自然だが、右下が欠けているので有明の月（陰暦16日以降の夜明けまで残



っている月)頃の風景とされる。『球陽八景』も同画題。

☆「臨海湖声」(25.7×37.5 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/浦添市美術館/島根県立美術館/太田記念美術館/ミネアポリス美術研究所/ホノルル美術館蔵)

※屋敷の前からくねくねとした石橋が島に続いている。海には渡し舟の図。西村屋与八の印と伊勢屋利兵衛の印が捺されている。『球陽八景』の画題は「臨界潮声」。「潮」を「湖」と誤彫したか。

1156 臨海湖声(日本浮世絵博物館)



☆「条村竹籬」(25.3×38.0 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/浦添市美術館/アレン・メモリアル美術館:マリー・エイズワース・コレクション/慶応大学蔵)



※木の葉に覆われた籬に囲まれた村の門の前で掃き掃除をする男たち。村の前の海には舟が一隻浮かんでいる。『球陽八景』も同画題。

1157 条村竹籬(日本浮世絵博物館)

☆「龍洞松壽」(25.5×31.5 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/浦添市美術館/山口県立美術館)

※雪の村を鳥瞰一覽で描く。沖縄では雪は降らないが、この年の11月16日(太陽暦12月7日)の使節団参府時には雪が降ったといわれ、その印象を描いたのではと推測されている。伊勢屋利兵衛の印が図右に捺されている。『球陽八景』も同画題。1158 龍洞松壽(日本浮世絵博物館)



☆「筈崖夕照」(25.3×37.3 東京国立博物館/日本浮

世絵博物館/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション/浦添市美術館)



※海に突き出した岩山の先には石垣に囲われた山城。その下には帆船が二隻浮かんでいる。山の麓には鳥居と神社が描かれる。『球陽八景』も同画題。

1159 筈崖夕照(日本浮世絵博物館)

☆「長虹秋霽」(25.0×36.9 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/浦添市美術館/島根県立美術/アレン・メモリアル美術館:マリー・エイズワース・コレクション館)

1160 長虹秋霽(日本浮世絵博物館)

※長い虹のような石橋が海上に渡され、二人が渡っている。海には唐船と和船が並走し、水平線には富士のよう



な山影が描かれる。『球陽八景』も同画題。

☆「城獄靈泉」(24.5×35.6 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館/浦添市美術館/太田記念美術館/慶応大学図書館)



※松林を前にした門のある山端から海に流れ落ちる滝。遠くには富士のような形をした山が見える。西村屋与八の印と伊勢屋利兵衛の印が捺されている。『球陽八景』も同画題。

1161 城獄靈泉 (日本浮世絵博物館)

☆「中島蕉園」(24.6×36.9 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館/浦添市美術館/太田記念美術/慶応大学/ホノルル美術館)

※石垣の塀から伸びた蘇鉄の葉が見られる家々。画面上方には、遠く雪を被った富士山が描かれる。西村屋与八の印と伊勢屋利兵衛の印が捺されている。『球陽八景』も同画題。

1162 中島蕉園 (日本浮世絵博物館)



●『東都百景 藍摺封筒』(北斎改为一筆。191.0×52.0 藍摺封筒。シカゴ美術館蔵)

天保4(1833) 癸巳 74 歳 前北斎为一、前北斎为一老人、前北斎为一、画狂人北斎、時年七十四前北斎为一 印之印、ふもとのさと：孫(24歳) 阿栄(36)

◇5月、二代目鳶屋重三郎没。

◇8月1日、江戸市中の米穀払底のため幕府より御蔵米を支給。

◇8月頃、曲亭馬琴、右目に異常があり見えなくなる(67)。

◇9月～12月、米価高騰。全国に一揆打壊し。

◇天保の飢饉(天保7年迄)。

◇この年より、相撲興行は江戸・本所回向院が春夏2回の定場所となる(「資料館ノート」第106号 江東区深川江戸資料館より)。

◇富賀岡八幡宮(砂村の元八幡。現東京都江東区南砂7-14-18)の小富士建立。

【広重 保栄堂版 東海道五十三次刊行】

○歌川広重『東海道五十三次之内』刊行始まる(大判55枚揃。このうち「四日市」は北斎の『富嶽三十六景』(駿州江尻)を意識したもの。

保永堂(竹内孫八)版。初めは僊鶴堂との合梓。東京国立博物館蔵。

1163 歌川広重『東海道五十三次内 四日市』(保栄堂版：知足美術館)



○為永春水『春色辰巳園』(人情本『春色梅児誉美』の続編)初編。

○溪齋英泉『浮世絵類考』の増補をし『无名翁随筆』と題す。

○シーボルト編『日本動物誌』。

【歌川広重、北齋と会った？】

★この頃、歌川広重、風景画の描き方について尋ねるために北齋に会ったが、北齋の冷淡な態度に腹を立て退出したといわれるが確証はない。

★この頃、浅草寺前に住んだか。

※「今浅草寺前に住す」と溪齋英泉の『无名翁随筆』（天保4年：1833）に記される。

★『柳多留』121編に川柳1句、122編に1句、123編に3句、125編に4句載る（『年譜』による）。『俳風柳多留全集』（三省堂）では天保5年以降に卍号の句は見られない。

【柳多留 121 編】

☆泥水へ踏込足袋も目くらじま 卍（うっかり泥水に足を入れ、めくら編の足袋もめくらになったか）

【柳多留 122 編】

☆紹芭織質の流をせき留て 卍（質草に高級な紹芭織を入れたが、請け出す金がないが、せめて利子だけは。宿六心配『謎解き北齋川柳』では「紹芭織」「流れ」。田中聡『北齋川柳』では「流れ」）

【柳多留 123 編】

☆眞ン猫ハヤンワリヰる首ツ玉 卍（人目を避けて語らう男女も、つい熱くなり互いの首をやんわり絞める）

☆間のわるさ月の影さす夜蛤 卍（満月の夜に食べる蛤売りも月が陰っては間が悪い。男女の密会も同じ）

☆紹芭織質の流もせき留て 卍（122編で他者評により前出。但し、表記に異同あり）

【125 編】

☆紹芭織質の流もせき留て 卍（122編・123編で他者評により前出）

☆紹芭織質の流もせき留て 卍（122編・123編・125編で他者評により前出）

☆顔氏のたまはく丘ぼうが未だ寐ず 卍（孔子の母・顔氏が夫に丘坊（孔子の幼名）がまだ寝ていないよ、少しお待ち。田中聡『北齋川柳』による）

☆木魂して天地へひゞく井戸屋の屁 卍（井戸浚いの職人の屁が反響して天地に木魂した）

【『北齋漫画』パリに到着】

★この年、『北齋漫画』（何編か不明）がパリに到着したという考証がある。

※『秘蔵浮世絵大観 8 パリ 国立図書館』所収：小杉恵子「パリ 国立図書館 東洋写真室の浮世絵」より。

「ブラックモンがパリ摺師ドラートルの家で 1856 年『北齋漫画』を発見・・・（信憑性はともかく）芸術的反響とも浮世絵流行とも無関係な別本『北齋漫画』が、1833 年の春、パリに到着した。所持者はティチングと同じオランダ人で、1820 年（文政 3）から 1829 年（文政 12）まで長崎オランダ商館員を務めた J・F・ヴァン・オーヴェルメール・フィッシャー（1800～48）であった。フランスにはじめて『北齋漫画』をもたらした人物として明記されるべきであろう。」

フィッシャーの所蔵品は、その後クラプロートに渡ったという。「こうして姿を消した『北齋漫画』が再びパリ国立図書館に現れたのは、十年後、1843 年のことである。ただ

し六編の一冊のみで。」

筆者注：「ブラックモンがパリ摺師ドラートルの家で 1856 年『北斎漫画』を発見」とは、次のよく知られたエピソードを指している。

「仏人フェリックス・ブラックモン(1833～1914)、パリの印刷屋ドラートルの仕事場で、日本から送られてきた陶器の包み紙の『北斎漫画』を発見。ブラックモンはドラートルに譲ってほしいと願うが断られる。2 年後、版画家ラヴィーユの家で再び『北斎漫画』に出合い、ようやく手に入れる」（大島清次『ジャポニスム』 p28）。このエピソードは近年疑問視されている。

【この頃の北斎の評判】

★この頃の北斎がどのように見られていたか、溪齋英泉の『无名翁随筆』（天保 4 年：1833 刊行。別名『増補浮世絵類考』）が要領よくまとめてあるので、少し長いが引用する（岩波文庫『浮世絵類考』（p143～148 武田勝之助編校）及び「国立国会図書館デジタル・コレクション」より）。

「葛飾為一（明和の生れ（筆者注：誤り）、寛政より、享和、文化、文政、天保の今に至る）俗称 幼名時太郎、後鉄二郎、居、始本所横網町、数十ヶ所に転居す、今浅草寺前に住す。姓氏 江戸本所の産也。始は業を勝川春章に受く。勝川春朗と画名す。故ありて破門せられ 叢 春朗と云り。古俵屋宗理の跡を継いで二代目菱川宗理となり、其此画風をかへて（宗理の頃は狂歌の摺物多し、錦画はかゝず）一派をなさず（堤等琳孫二注¹の風を慕ふ）、赤門人宗二に宗理を譲り（三代目宗理トス）名を家元へ帰せり。于時寛政 戊午の末年、爰に至り、一派の画風を立て、北斎辰政雷斗と改む、（一説、北辰妙見を信ず、故に北斎と改しと云、其頃は東都に明画の風大に行れ、画心有ものは唐画を学ぶ事専ら流行す注²。俗に従ひて画風を立しは、世に出るの時なり。雷斗の画名は重信にゆづる）北斎流と号し、明画の筆法を以て浮世絵をなす。古今唐画の筆意を以て画を工夫せしは、北翁を以て改租とす。爰に於て世上の画家（俗ニ云本画師）其画風を奇として、世俗に至る迄大にもてはやせり、一時に行れて、門人多く、高名の妙手となれり。従来書を読み学才あれば戯作の絵草紙多く、草双紙の画作を板行す。作名を時太郎可候と云へり。

（叢 春朗の頃は役者の錦絵を出せり。北斎に至りて錦絵の板下を画かず。狂言摺物を多くかけり。錦絵風あらぬを以てことごとく北斎の画風を用ゆ。摺て奇巧なりし）画狂人の号は門人北黄に譲る。北黄は板下をかゝず。専ら画狂人葛飾北斎と画名して雷鳴す。画風錦絵草紙等の尋常にあらず。繡像読本の挿絵を多くかきて世に行れ、絵入読本此人より大いにひらけり。（此頃絵入読本世に流行す。画法草双紙に似よらぬを以て貴とす。亦時にあへり（筆者注：流行した）。読本画とて別にす。杏花園蔵書浮世絵類考に云、北斎宗理は狂言摺物に名高し。浅草に住す。すべて摺物は錦絵に似ざるを貴とすと云）、京師大坂より雷名を慕ひ、門人多く学ぶ者有し故、尾州名古屋を始として京大阪に至れども、必観する画家絶てなし。板刻の蜜画に妙を得て当世に独歩す。数万部の刊本枚挙すべからず。漫画と題して絵手本を發布す。大に世に行る数編を出せり。（始板元江戸麴町

角丸屋甚助なりしが、故有て後、尾張名古屋永楽屋東四郎蔵元となれり）再名注₃門人に譲りて錦袋舎戴斗と改たり。前北斎戴斗と云。（二代目北斎は本所の産なりしが、後吉原仲の町亀屋注₄と云茶屋なり。両国回向院にて大画錦袋をかけり。錦袋舎弘め画会あり。大画は十六間四方十八間四方、名古屋にては釈迦出山の図をかけり）是をも文化の末、門人北泉に譲り与へて前北斎為一と改名す。門人に臨本を与ふる違あらず。画手本を是が為に板刻して数十冊を世に行はしむ。生涯の面目は画風公聴に達して、御成先に於て席面上覽度々あり。希代の画法妙手と云べし」（注・ルビは筆者による）

注1) 堤等琳孫二：堤等琳吟二の誤りか。吟二は等琳の俗名。

注2) 画心有ものは唐画を学ぶ事専ら流行す：唐画は、主に南蘋派を指す。南蘋は中国清朝の浙江省の画家沈南蘋で、享保16年（1731）に長崎に来た。その花鳥画の写実的な画風が当時の絵師に広がり、北斎も唐画を以て画を工夫したというのである。

注3) 名：北斎号を指す。亀屋：亀屋喜三郎のこと。二世北斎。吉原の引手茶屋の主人。二世戴斗（北泉。犬北斎）と混同される向きがある。

★同書は更に続けて以下の様に記している。

【総て総身に画法充満したる人】

「伝に曰（略）、彩色に一家の工風をこらして、一派の妙を極めたり。総て総身に画法充満したる人にて、一点の戲墨をなさずと云事なし。希代の名人なり。倭漢の画法に委し。骨法自ら宋明の筆意ありて、尋常の画風にひとしからず。真を写すに、一家の筆法、画体、悉く異りといへども、能其真に似たり、（狩野流にても、似て似ざるを画法の第一とす。画中不全して画をなすを以て善とす）自ら云、数年諸流の画家に入、其骨法を得て、一派の筆法、画道の業に於て、筆をこゝろみ得ずとせざる事はなしと云り。香具師の看板画より、戯場操の看板、油画、蘭画に至る迄、往々新規の工風を画き、刻本の細密、定規引きの奇巧なる、一家の画法を起せしは尤妙なり。他郷に至るも、画者皆門に入て業を学ぶ。京師浪花は、悉く翁の画風を学びて名を改ずといへども、門弟にならぬはなし。（為一翁転宅する事一癖あり。数十ヶ所に住を替たり）浪花発市注₁の絵本を見て世に知るところなり。紅毛よりも需にに応じて、二三年の間数百枚を送りしかば、蘭人も大いに珍重す。故有て是を禁ぜられたり。天保の今に至るまで六十余歳、筆法少も衰へず。老年に及びて彌筆に潤あり。近年錦絵を多く出せり。（諸国の山水、花鳥尽し、三十六富士、百鬼夜行、琉球八景、瀧尽し）肉筆彩色は、他に優れて見事なり。別に為一翁が画伝を誌す。委しくは其書注₂を見るべし」（ルビは筆者による）

※以上の文は本稿「文化年間」の【北斎翁は曲画を善す】の項の引用文に続くものである。

注1) 発市：発兌の誤りか。発行すること。

注2) 其書：未見にして不明。

★同書に記されている「葛飾為一系図」では「女子榮女、画を善す、父に従いて今専ら絵師となす、名手なり」と阿榮を評している。

【余の美人画は、阿榮におよばざるなり】

★「北斎翁嘗人に語りて曰く、余の美人画は、阿榮におよばざるなり。彼は妙に画きて、よく画法にかなへり」（飯島虚心『葛飾北斎伝』 p 309～310 ルビは筆者）。

【阿榮の絵、気韻生動、筆力非凡なり】

「（露木氏の話）梅彦氏注、嘗阿榮に依頼し、稲荷社前に供する発句の奉灯の口画を画かせたるが、阿榮諾して盆栽の桜のかげに、猫児の戯るゝ所を画く。下筆密にして、設色佳麗なり。同氏阿榮に謂て曰く、奉灯の口絵なれば、此の如く細密なるを要せずして可なるべし。阿榮曰く、此の絹本は、裏打せし者なれば、画きたるなり。従来裏打ちせし絹本は画き難きものなれば、尋常の画工ならば、謝絶して画かざるべし。妾は、試みに其の画き難きものに画きたるなり。知らず知らず、細密になりたれど、他人のいふごとく、画き難きものにあらずと。同氏携へ帰りて、熟視すれば、気韻生動、筆力非凡なり。よりて奉灯となすは、おしければ、更に他人をして、口画を画かしめ、神前に供し、しかして此の阿榮の画は、裱装して珍藏せしが、後火災に罹り、これを失ふ、惜むべしと、同氏の話。」（『葛飾北斎伝 p 310 ルビは筆者による）

注）梅彦氏：露木梅彦。名は孔彰。北斎から号を譲られ、露木為一と号す。

●絵本『唐詩選画本 五言律』（1月。半紙本 5冊。見返しに『画本唐詩選』。前北斎為一画。袋には「前北斎為一老人画」。22.7×15.8（嵩山房・小林新兵衛版。国文学研究資料館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/フリーア美術館：ブルヴァエー・コレクション蔵）



1164『唐詩選画本 五言律』六編 見返し（国文学研究資料館）

「送遠」

※唐詩選五言律の略解書。中国の故事や動植物を描く。「送遠」と呼ばれる絵は、杜甫が戦地に赴く友人を送った詩を題材にして、馬に乗り雪景色を眺める男の後ろから下僕がついて行く様子を描き、天保4年～5年（1833～34）の『詩歌写真鏡』の「無題」の絵に反映している。

五編～七編は高井蘭山著。北斎は六編・七編（天保7年：1836）を描く。六編巻一に11図、巻二に15図、巻三に13図、巻四に12図、巻五に6図の挿絵を描く（『ピーターモース・コレクション北斎図録』による）。全七編三十五巻三十五冊。初編は天明8年刊（文化2年再